
ルカリオの育て屋奮闘記A

リング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルカリオの育て屋奮闘記A

【Nコード】

N0846R

【作者名】

リング

【あらすじ】

育て屋と言えば、トレーニングと子作り！！ トレーニングのために来たルカリオの少年杭奈は、偶然チラーミイの子作りをガン見いしてしまい、一緒に預けられたズルズキンの静流に子作りをしたいと申し込み、そして撃沈。

トサカもなければ強くない男には魅力が感じられないから、というのは静流の弁。ならば強くなってみせるさ、と杭奈は奮闘するのであった。

育て屋を舞台に成長していくポケモンの真つ向勝負を描くお話。久しくバトルをかいていなかった作者がバトルを書きたいがために書き始めたお話のため、非常にバトルが多め。

こちらは全年齢対応版です。なのでA指定をつけさせていただきますが……もしかしたらBくらいかもしれないという懸念

第1話（前書き）

こちらは全年齢対象版です。こちらのお話は一部省略されていますが、気にせずお読みください。

第1話

1

田舎に設けられたただっ広い土地は、池沼に森林、砂地に草地に洞窟と、数種の環境を人工的に作られた育て屋だ。

その中、生え放題の雑草が生えるそばから食い荒らされる草地のエリアでは、広い見通しを好むポケモン達がたむろしている。

抜けるような晴天も、肺を圧迫するような曇天も関係無しとばかりに、その平地のエリアで見つめ合う二人。

春を迎え、徐々に暖かさを増していき、冬毛が用を為さなくなつてゆくこの季節。まだまだ肌寒いけれど、熱くなるにはちょうどいい。

とあるトレーナーと一緒に預けられた二匹も、もう準備万端とばかりに熱々だ。

『今日こそ、仕留めて見せる』。まだ経験の浅いルカリオは、緊張した様子で相手に向きあう。

震える足は、まさしくその緊張を体現しており、元から青い体毛も弱気になっているおかげかより青みをましているようにさえ思えてしまう。

対して、彼女は冷静だった。誘うような目つきに、挑発的な態度。腰まで上げられた山吹色の抜け殻を着た脚をこれ見よがしにくねらせながら、深紅のモヒカンを掻き上げ笑む。

ルカリオ*1は意を決した。

まずは右腰に手を合わせ、波導弾を放つ構え。

ルカリオがチャージを始めた瞬間、目にもとまらぬ速さでズルズキン*2は接近、前後に頭を振る動作と合わせて口から酸を吐く。

顔面を狙ったそれを、身をかがめてルカリオが避けた。しかし、その一瞬ズルズキンから眼を離してしまう。

ズルズキンは隙を見逃さず、鞭のように撓^{しな}らせたミドルキックで、波導弾の構えをとるルカリオの腕を襲い、チャージしていた波導弾を潰しにかかった。

ルカリオは咄嗟の防御。右腕をクッションにしてその蹴りを防いでなお鳩尾まで響いた痛みを、ルカリオは気合いと精神力で耐え抜き左手の裏拳を相手の顔面めがけて放つ。

重い金属質の棘が付いた裏拳は、一発で戦意を失いかねない威力を持つが、ズルズキンは後方倒立回転跳び*3を行い、脚による威嚇で追撃を避けつつ安全圏へ離脱した。

ズルズキン優勢の攻防から一旦膠着状態へと移行して、ズルズキンは吸う息でヒュツと音を鳴らす。呼吸の音に反応してルカリオの体がビクリと震えた。

音によるフェイントから生まれた一瞬の隙を狙って、ズルズキンは左ジャブ*4で先手を取る。

予備動作を排した鋭いジャブをなんとか肘でいなして、ルカリオは相手の隙が生まれるのを待つ。

ルカリオが大きくズルズキンの手を弾き飛ばした瞬間、彼はそれを好機とみた。

一気にズルズキンの懷に潜り込み、間合いを詰めての左肘打ち。相手が左半身を前に出す形で半身になって肘打ちを避けた所を、ルカリオはさらに右掌底で顎を狙う。が、それも避けられた。

ガラあきになったルカリオの腋^{わき}に、闘気を纏ったズルズキンの拳が叩きつけられる。

二度にわたる右脇腹への打撃で今すぐに崩れ落ちそうな痛みをこらえて、ルカリオは脚に炎を纏いつつズルズキンの脛をめがけて斜め下にえぐり込むような、踏みつけるような軌道で爪先を当てる。

いわゆる斧刃脚^{ふじんぎやく}と呼ばれるルカリオの一撃*5を、ズルズキンは

素早くバックステップでかわす。

視線を体勢を立て直しながら二人は向きあう。再びの膠着、仕切り直しだが、大ぶりの動作を多く取り入れたルカリオはスタミナが削られ、それに加えて二度も右上半身へと打撃を喰らっている。彼の劣勢は明らかだ。

ルカリオは前に大きく腕を伸ばした防御の構え、ゆったりとリラックスした膝を前にも後ろにも自在に動かせるよう、重心は両足の真ん中に。

大して、ズルズキンの重心は低く、かなり前のめりの攻撃的な重心。

あと少し傾ければ、よろけて立ち膝にならざるを得ないギリギリの所で重心を保っており、そのバランス感覚の良さを伺わせる。

タツクル狙いがバレバレじゃないかと、ルカリオは半ば油断しながら彼女の脚元に注視していた。

戦いの最中はむしろ相手の目を見るのが基本であり、これはルカリオの経験の浅さが生んでしまった致命的な間違いである。

相手がテイクダウン*6で来るとわかっていれば、相手に膝を掴まれる前に上から叩き潰すなり、ひざ蹴りを顔面に叩きこむなりしてやろう。

と、高をくくったのが甘かった。

走り出したズルズキンはしかし、ルカリオの間合いに入る直前で地面に左手をつき、左手足を軸に後ろ回し蹴り。

完全に下に向いていルカリオの視線は、その攻撃を視認することなく、文字通り見えない打撃となった彼女の右踵は彼の側頭部から頭蓋を貫かんと狙う。

住んでの所で気づいたルカリオは、鼻先を掠め風圧で顔の体毛が揺れるのを感じながら、のけぞってそれを避ける。

しかし、ズルズキンは回転の勢いを弱めないまま、今度は手をつ

かずに左足のみを軸にもう一回転。

ルカリオは体勢が崩れかけていてそれ以上後ろへ下がる事が出来ず、腕を上げて顔をカバーしたがそのガードの上から見舞われた重い蹴りが彼のマズルを振り抜き顔を揺らす。

綺麗にガードを打ち破られたルカリオは激しい脳震盪できつちりその場に崩れ落ちた。

驚いたまま止まっているルカリオの顔を確認しながらズルズキン

は立ちあがり、うつ伏せに倒れたルカリオへ馬乗りの体勢。後頭部に垂れさがる房をひつつかんで顔を浮かし、地面にたたきつける真似をするところで『トドメを刺した』と満足した。

「……結局アタイにダメージ与えられないでやんの。ダサイ」
勝者であるズルズキンは、唾と一緒に言葉を吐き捨てた。

2

（ご主人……僕、育て屋よりもあなたの元で修業したいのに……）

ルカリオはそんな気持ちを言葉にしたくて、しかし人間の言葉を操る術を知らない彼は、口を嚙むのであった。

「それじゃ杭奈、元気でな。ハカマと一緒に半年間頑張れよ。静流」
も、二人をよろしく頼むからな」

静流と呼ばれたズルズキンは笑顔で手を振るが、杭奈と呼ばれたルカリオはせめてもの抵抗に主人の体に抱きついた。

よく鍛えられた主人の体は、大木のようにごつごつとしていて、間違っても喧嘩を売ってはいけない相手である事を分らせてくれる。

そんな主人の肉体を感じながら甘えて見せるのだが、主人はルカリオの頭を撫でて、「行って来い」と少し名残惜しそうにしながら微笑むだけだった。

修行の岩屋で暮らしていた杭奈は、ポケモンバトルではなくこの主人のローキックと寝技のみで捕獲された。

各地の四天王やジムリーダーと同じく、主人も格闘家とポケモントレーナーの二足の草鞋をはいており、それらのご多分にもれずそこいらのポケモンよりずっと強い。

ゲットされてからの杭奈はというと、強い主人に憧れ必死で好きになろうと努力して、早い段階でルカリオになった。

ルカリオになれば本格的な指導をしてくれる、強くなれる信じていたのだが、あるうことが主人はもう体も完成されたと考え、杭奈を育て屋に預けることになってしまったのだ。

何でも、彼はポケモンリーグの試験を受け合格したそうで、晴れて格闘タイプのジムを開こうという彼らの主人は、輸入規制が解禁された地方の片っ端から格闘タイプを集めたそうだ。

一人じゃ育てきれないからと、助手や育成の才覚のある近所の子供に育成を手伝ってもらったりはしているのだが、それでも育てきれない分を育て屋で補うのだと。

せっかく進化したというのに、これでは杭奈も意気消沈であった。

それでも、与えられた試練は越えるしかない、杭奈は甘んじて育て屋生活に踏み出すのだ。

杭奈達が預けられるシラモリ育て屋本舗は、ポケモン同士の対戦をいつでも自由に行えるという解放的な（一部ただの放任主義との批判あり）の育て屋として有名である。

預けられるのは静流と杭奈他、幼い雄のラルトスの袴一匹。ハカマ

静流は主人と旅を共にしてきたメンバーで、教育・監督役という名目だ。

「おうおう、新人さんのお出ましだな」

三匹が育て屋の広場に入ると、早速以って先客達からの歓迎を受けることになる。

「見るよこの女。バカラ教官と同じズルズキンだぜ！」

「へえ、強いのかなあ」

と、三匹の中でも特に静流に注目が集まって数分。まずは拳で語り合おうとばかりに、先客達と対戦と相成った。

静流が先程の質問に対して『強いわよ』と、にこやかに答えたいだろうか。

なんの間違いか相性の悪い飛行タイプのポケモン、ウォーグルと戦うことになってしまったのだが――

静流は敵の足爪による掴み攻撃*7を仰向けになってやり過ごし、強酸性の液体を吐きかける。

その液体は酷い火傷を負いかねないので、浴びたらすぐに地面なり水なりで拭う必要があるのだが、鳥ポケモンが不用意に地面に降り立つというのは多くのアドバンテージを失う自殺行為だ。

羽根休めで急速なスタミナの回復を図るとしても、格闘タイプが相手では弱点を増やす要因だ。

しかも、『地面に降りたらその瞬間格闘技でぶっ殺す』とばかりに、指をバキバキと鳴らす彼女から受ける印象など恐怖以外のなものでもなく、そのウォーグルは空中であえなく降参してしまう。

拳での会話が終わると、雑魚に興味が無くなったのか、静流は自分と同じズルズキンだというバカラ教官の元へ。

モチベーションの下がっている杭奈は、静流がそうしたように先客と戯れながらぬるい訓練を行う事で日中を終える。

ちなみにハカマは、森林エリアの下草刈りの用務員であるハハコモリの着せ替え人形にされたままお持ち帰りされてしまったそうなのである。

問題が起こったのはその夜だ。困ったことに、静流は杭奈の異性である。

育て屋に来て初日はいつも通り可も無く不可も無くなつきあいが続けていくつもりだった杭奈だが――。

主人の厳しい訓練から解放されて気が楽だと思っ反面、さびしい

思いをしながら迎えたその日の夜。

二匹で広大な育て屋を見て回っている最中のことだ。ありがちな話だが、二匹は預けられたポケモンの情事を見てしまう。

戯れるエモンガとチラーミィをガン見して、非常に微妙な雰囲気になった所を敏感な嗅覚の杭奈は漂って来る匂いに便乗して欲情。

「元氣ねえ……これだから男は」

興奮する杭奈をよそに、元氣な下半身をマジマジと見て静流は溜め息をつくばかり。

呆れられているとわかっていても抑えきれない衝動に負けて、杭奈が思わず本能的に静流の肩を掴んで抱き寄せたところ……

「調子に乗るな、狗^{いぬ}が」

足払いから地面にたたきつけられ。一蹴されてしまった。否、倒れたところを実際に蹴られた。しかも2回だから二蹴か。やっぱりこの女は悪タイプだ。

「アタイ、トサカの無い男には魅力を感じないのよねー。その点、バカラ教官は素敵だったわー」

このままハカマがエルレイドに進化したりもすれば卵グループを無視してそっち側になびいてしまうのではないかといらぬ心配を杭奈はしつつ、なんとか抑えきれない欲求を解消する術を模索する。

「じゃ、じゃあ……僕はどうすれば静流にあのエモンガと同じ事できる？」

その方法が、恥知らずの質問をやつてのける事であつたので、静流は純粹で可愛いと思う反面純粹すぎるのも考えものだと思ひ溜め息一つ。

「トサカ作ってこれないならアタイを倒せるくらい強くなってきなさいな。所詮、バカラ教官とはお・あ・そ・び・だ・し……」

育て屋を抜けても、長いこと一緒に付き合って行く貴方となら遊びじゃなくて本気で付き合ってあげる」

「や、約束だからな」

喰らいつくように念を入れる杭奈を、静流は笑う。

「いいわよ。私は雌だけれど、格闘タイプの漢おとことして二言はないわ」
こうして、杭奈は1日でじゃれ合いのようなぬるいトレーニングを卒業することになる。

雨降って地固まるとはこのことで、杭奈もこれによりやる気は出したのだ。

……やる気は。

しかし、それから先は大変だ。まず、杭奈と静流の圧倒的な実力差を覆すための望みが足りない。希望が無ければ頑張り続けることは難しい。

そしてもう一つは違う意味での絶望として、お遊びとは思えない静流の態度である。

血のように紅く、大きく形もよいのトサカに大いなる魅力を感じたのか、静流は気がつけば育て屋の教官であるズルズキンのバカラと一緒にいたのであった。

静流は名目上、杭奈とハカマの教育・監督役として一緒に預けられたのだが、教育役と言うのは名ばかりでバカラ教官に指導してもらうために主人は静流を預けた節があるのかもしれない。

しかし、バカラ教官と静流の関係は教官として普通に指導しているだけではない。

昼食時は楽しそうに同じ木の実を食しているわ、しょっちゅう組み手をしているわ。

さらにはトサカの手入れまでするほど仲睦まじく同じトレーナーの元で育った杭奈の立場が無いのだ。

それでも彼女曰く、バカラとは『所詮お遊び』らしいのだから、やっぱりこの女は悪タイプだ。

絶望的なまでの腕の差と魅力の差。杭奈の特性は精神力寄りだが、もう片方の不屈の心も片鱗ながら備えている。

もしそれが無かったら、やっぱりやる気を失っていたかもしれない

い。

今はなけなしの希望を逆境にして、杭奈は『自分だって、棘の手入れをしてほしい!!』と叫びたい衝動を押し殺しながら修業している。

そのやる気がいつまでもつ事やら……。杭奈は自分自身でやる気が持つかどうかを危ぶんでいた。

「うう……ん」

気絶したまま、預けられた当初の夢を見ている杭奈を背負い、静流は住处として与えられた岩穴へと帰る。

静流はこんこんと湧き続ける水を手で掬い、杭奈の顔にぶっかける。さすがは悪タイプ、乱暴だ。

跳び起きた杭奈の額を軽くデコピンで弾き飛ばして、静流は嘲笑した。

「相変わらず弱いな、杭奈」

「あ、あんな足技初めて見たんだよ……避けられるわけないじゃん」
腫れた頬を冷凍パンチの要領で冷やししながら、杭奈と呼ばれたルカリオは不平を漏らす。

「なーに言ってるんだ。彼から習った技を見よう見まねで使ってみただけだってのに、かわせないものかねえ？」

「そっちはマスターの古参メンバーじゃないか……戦い慣れてるつてのにハンデも無しじゃ勝てるわけないよ……」

ウダウダとうるさい杭奈と話しているのは億劫なのか、ズルズキンは組んだ腕を枕にして仰向けに寝転がった。

「たしかにまあ、勝てないかもだが、ここに預けられてもう三日。今まで積み上げられた経験はともかくとしたって、あんた何か得るものがあつたつていいはずだぜ？ それを、特に何の変化も無しつてのはどうしたものかね」

「みんな、すごい技術だから何しているのかわかんないんだもの……」

… 静流みたいに強くなれば分かるのかもしれないけれど…… コレでもきちんと練習しているんだからね」

「なるほどね。あんた見る目ないもんねー」

ふふんと、得意げに笑いながら、静流は憎まれ口を叩く。仰向けのまま脚まで組んで見せるあられもない姿は、女性としてはいいかなものか。

「ま、こういうものは壁を乗り越えれば突然伸びるって時があるものさね。それまで地道に目を鍛えりゃいいさ」

「目……？」

笑い飛ばされて不満げに口を尖らせる杭奈が、しかめっ面のまま静流に尋ね返す。

「そうさね。攻撃も防御も、動きを真似するのには眼と反復練習さ。あんた、反復練習は上手いくせに、動きを真似すんのは苦手だからなあ。そんならいつそのことリアルから進化しなきゃ良かったんじゃないのか？」

「む…… これでもルカリオになって強くなったんだよ」

静流は起き上がり、杭奈に接近。

「はは、どうだか。こんな可愛い顔しちゃってさ。強がりたいたならもつと風格の一つでも出さないな」

ムキになって反論する杭奈の腫れていない方の左頬を突つつき、

静流は笑う。

「急がば回れたあよく言うじゃないの。リオルの時のような純粹無垢な目で周りを見てみるよ。アタイは今でも心は少女だから、見て真似するのは得意なのさ」

調子に乗った静流は杭奈の頬をつねったままぶんぶん指を振る。頭を揺らされ何も言えない杭奈を尻目に、静流は頬から離れた右手で強烈に背中張り手を喰らわせる。眼前に閃光が走るような衝撃。「いったああああ……」

案の定、背中に張り付いた熱を帯びた痛みに杭奈は悶絶。開いた大口からかすれた声を漏らして、目には涙が浮かんでいる。

「約束どおり勝つまでは、お楽しみもお預け……育て屋ライフを半分以上損してるよあんだ。無理だろうけれど、さっさとアタイより強くなりなさいな」

「……ふあい」

歯を食いしばったままの杭奈は震える声で気の無い返事を返すのが精一杯であった。

「全く、見る力を鍛えろっていうけれど、どうすりゃいいって言っただよ……」

岩穴に寝転がりながら、杭奈は静流に聞こえないように愚痴を漏らす。

杭奈だって、自分が強くなるためにアドバイスの一つや二つ欲しいものだ。しかし、肝心の静流は教えるのが苦手だと、杭奈のことは構ってくれない。

自分より強そうな格闘タイプも育て屋の先客に居るには居るのだが、それがナゲキやチャオプーではあまりにも戦闘スタイルが違いすぎて参考にならない。

更なる問題は、静流が言った通り目が鍛えられていないために、上手い動き方の真似が出来ず、それゆえ反復練習も出来ない。

教育役がいないことによる弊害をもろに被っている、と言うわけだ。

静流曰く、彼女の2連蹴りはこの育て屋の教官の動きを昨日の戦闘に生かしていたらしいのだが、そんな風に見て真似するなんて器用な事は杭奈には出来ない。

原因は、狩りの記憶はいくらあってもバトルの記憶があまりないことによる。

元野性だけに、杭奈の戦闘技術はバトルよりも狩りに特化しているのだ。とにかく突っ込み、相手に被害を与えればいい。

返り討ちにあっても、自分を攻撃している間に獲物は仲間に攻撃

されている。後先考えない攻撃こそが、野性ではもてはやされるのである。

そんな風にリオル時代を生きて来た杭奈に、そもそもバトルをしるというのも無理な話。

一匹で伸び悩む杭奈は途方に暮れていた。

3

数日経っても勝てない自分に嫌気がさしながら、寝床として与えられた岩穴に帰って見ると、麗しきトサカップルは戯れていた。

しかし、戯れてはいるものの愛しあいではなく殺し合いと見まがう勢いの組み手によってだ。

静流が間合いを離そうとすれば指をそろえて鉈のような抜き手が襲い、接近すれば膝蹴りや頭突き。

強酸性の液体を吐きかける勢い、フォーム共にそつがなく、攻撃の合間に的確に織り込んでくるバカラの強さは本物だ。元四天王*8の持ちちだったというのも頷ける。

静流の言うトサカが魅力的というのは確かにそうなのかもしれないが、動きの鋭さは杭奈のそれを遥かに凌駕していた。

バカラは強さの面でも十分魅力的なことだ。杭奈は遊びの関係だなんてもったいないとは思いつつも、遊びの関係でよかったと安堵している。

「いつ見ても速いな……」

どうやら意図的に格闘タイプの技を使わないようにしているらしいバカラがだが、それでもシズルは襲いかかる場気あらの攻撃を凌ぐのにも精いっぱいだ。

静流がバカラの手首を弾いていなくても、斧の重さと鞭の撓りを合わせたバカラの足技は非常に重い。

互いに闘気を使って*9攻撃していかないだけあって、致命傷は与え難いようだ、徐々に腕が上がらなくなっているのは静流の方だ。バカラは弱点である顔を狙うよりもガードしている腕にダメージを与えるように、顔狙いのパンチと腕狙いのパンチを使い分け、上手く静流を翻弄している……なんてことは、杭奈には分かるはずもなく。

未熟な彼に分かるのは、ただバカラが静流を圧倒していると言うことだけ。

徐々に蓄積した腕のダメージに耐え切れなくなったのか、静流が勝負にでて、接近からの右ストレート。

彼女の右腕が突き出されると同時に、バカラはそれを弾くのではなく自身は左に動き、相手の伸びきった腕が畳まれる前に掴みにかかる。

体の外側から静流の腕を抱くと、バカラは膝の裏に踵蹴りを叩き込んで、無様なうつ伏せの姿勢に倒した。

静流は腕を後ろに回されたままうつぶせの姿勢。こうなってしまえばバカラの心ひとつで肩を外すも、地面に叩きつけて頭蓋を砕くも自由だ。もちろん、勝負ありだ。

「か、敵いつこない……」

杭奈は静流の強さにすら足元にすら及んでいないのに、バカラは真っ向から攻めきって勝利してしまった。

ため息が出るような美しい強さには、強くなることが馬鹿らしく思えるほどの差が見えた。

まさしく、月とすっぽんというのが正しい表現だ。

盗み見していた事が何だかバツが悪いので、杭奈は逃げるようにその場を去り、数十分。

「単純な攻撃じゃ、絶対に攻めきれない……でも、トリッキーだったってどうすりゃいいのさ」

先程の試合内容を反芻しながら、杭奈は木陰の下でたたずんでいた。

あの後も何度か二人は組み手を行い、そして例外なくバカラが勝っていた。

大きく踏み込んでからの爪による引つ掻き攻撃。岩を砕くが如くの強烈な蹴り。

静流の攻撃全てを冷静に見切ってはその隙をつき、押し倒すなり打ち崩すなりして敵に致命傷を与えるお手本のような格闘技だ。

悪党ポケモンなんて呼ばれているけれど、正統派な格闘技でもとんでもなく強かった。

どちらかと言うと悪闘ポケモンと文字通り読んだほうがしっくりくる。

弱いほうのズルズキンである静流が当面の目標とはいえ、それにさえどうすれば勝てるのか見当も付かない。

杭奈はそのまま何事も無かったように岩穴に帰っても良かったのだが、静流の蹴りでも喰らって記憶が飛んでしまったり、頭痛で修行に集中できなくなっでは具合が悪い。

客観的に見て、改めて実力差を理解した杭奈は、今日は徹底的にシャドーをするために静流に挑まないと決め込んだ。

今は全力である場から離脱して乱れた息を整えていたが、そろそろ肩で息をする必要も無くなってきた杭奈は、立ちあがってシャドーを始める。

相手の懐に入り込んでのゼロ距離体当たり、肘打ち、斧刃脚、そして必殺技の裏拳。

ルカリオは、紙のような防御力を補うために相手の攻撃がしづらい位置から有効な打撃を一方的に与えるというのが理想の闘い方だ。杭奈は強くなるためにそれに関わる動作を幾度となく繰り返し返す。

しかし、相手の動きを予見して同じ動作が出来るかといえは難しい。その勘を養うためにも、動く標的が欲しいのだが、生憎持って適当な相手が見つけれない。

二足歩行で、出来れば身長が近い攻撃よりのポケモン。そんなのが都合よくこの育て屋に来てくれればいいのだが。

4

さらに数日。杭奈は本日の新入りの中に理想のポケモンを見つけ
た。身長は杭奈よりも少し高いくらい。

仮想敵をズルズキンとする杭奈にとっては低いポケモンの方があ
りがたかったのだが、贅沢は言っていられない。

強いのか？ 仲良くなれるだろうか？ そんな心配を抱きながら
も、そのポケモンを練習相手と決め込んで杭奈は勝負を挑んでみた。
「挨拶代わりにバトル……ねえ。俺バトルしに来たわけじゃないん
だけれどな……手が早いよね、みなさん」

苦言を呈す新入りの言葉に、杭奈がしょんぼり沈んだ表情をする。
「いや、別に戦いが嫌って言ったわけじゃないからさ……いいよ、
そこの青いお兄さん……戦おう。俺、コジョンド*10のジョン。
飼い主のネーミングセンスが安易なのが欠点さね。今日預けられ
たばかりだから、色々粗相もあるだろうけれどよろしくな」

杭奈の表情を見て少々焦りながら彼は戦いを承諾。微笑みながら
無難な自己紹介をした。

「えつと、僕はルカリオの杭奈。その……一緒に預けられた奴との
喧嘩に勝ちたいんだけど……相手がトレーニングの相手にならな
いから付き合ってくると嬉しいんだけどさ……」

「へ……ここは育て屋だって言われたけれど、いつもこんな風
にバトルをするものなのか？」

「ま、まあ……教官とバトルするなり、他の客と戦うなり自由だね」
「なるほど、血気盛んな若者がよく育ちそうだ」

肩をすくめて、皮肉めいた口調でジョンは言う。

「やっぱり、漢たるもの拳で語れってことなのかな？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……ま、いっか」

ちよつと馴れ馴れしいが人懐っこいジョンの態度に、杭奈は親近感を覚えて笑う。

「んで、トレーナー同士は審判が必要だったり、コインが落ちたと同時にスタートとか、開始の合図も色々だけれど、ここじゃどんな感じなんだい？」

体毛で口元を隠しながら尋ねるジョンの質問に杭奈は戸惑ってしまふ。

今までそんなことを考えもせずに育て屋ライフを送ってきただけに、改めて聞かれるとなんと答えればいいのかやら。

他のギャラリーからは、気があつたら勝負だよとか、闘いたい奴が闘えばいいんじゃないかね？ など、無責任な声が飛び交っている。

「ああ……えゝと、じゃあ……好きに攻めてきても良いよ」

思えば適当に向かい合つて、構えたらどちらともなく始めるのが普通だった。そういう意味では『好きに』というのは間違っていないと杭奈は判断する。

「うゝん……好きに、か。でも、そんなこと言われるとなあ……」

ここで、ジョンは祈るように手を合わせ目を瞑ると、おもむろに息を吐き始める。

じつと観察していると腹も胸も見て分かるほど縮んでいて、どうやら深呼吸を始めたようだ。

「あ」

気づいて声を上げた頃にはもう遅い。こいつは瞑想を積んでいる、つまりところ特殊型もしくは両刀*11だと杭奈は気付く。

瞑想で先手を取ったのはジョン。杭奈は攻撃の方では堅実に先手を取る。

まずは、電光石火の左ジャブ。瞬きの間にとどかせたその一撃を鼻先に見舞うと、ジョンは杭奈の拳を弾いていなすと同時に離れるとばかりのサマーソルト。

虫タイプの技だ。ルカリオは虫タイプの技に対して耐性はかなり高い水準で、杭奈もあまり痛くはなかったが、互いを後方へと飛ばす事が出来るこの技は綺麗に決まれば咄嗟の反撃が出来ない。

吹っ飛ばされたついでにバックステップでさらに距離をとってから波導弾で反撃しようとして、杭奈は躊躇した。

敵は瞑想を積んでいるから特防も上がっているはず。あまり鍛えていない杭奈の特殊技は、すでに出る幕ではないのだ。

そうになると、まずは距離を積めない事にはどうしようもなく、杭奈は電光石火で距離を詰める。

これでは、先程杭奈がしたバックステップは悪戯に敵へ時間を与えてしまっただけだ。

杭奈の次の攻撃は、ジャブではなくリーチの稼げる左前蹴り。それを股間に見舞うと、ジヨンは左足を半歩下げて杭奈の脚を払いのける。

蹴り足を弾かれて杭奈の体勢が崩れたと見るや、杭奈の外側を取ったジヨンは杭奈の右腕を右腕で。

後頭部の房を左腕で一息の間に掴み取り、耳元で大声で歌い始めた。

まだ粗削りなエコーボイスの技。単体ではとても使える威力ではないが、耳元でやられれば常に急所に当たるのとなんの相違もない威力だ。

杭奈を拘束するために腕を使えない以上、声による攻撃しかない。と判断したジヨンのエコーボイスだが、抵抗できない杭奈にとってみれば鬺り殺しでしかない。

瞑想で威力が上がっているともなればなおさら被害は甚大だ。

鋼タイプの杭奈には効果はいま一つだというのに杭奈は大した抵抗も出来ないまま数秒で負けを認めた。

その場合は、勝者であるジョンへの質問で終始し、質問攻めに疲れたジョンはちよつと休ませてくれと苦笑してその場を去る。

負けた自分はジョンにどう映ったのかどうしても訪ねたかった杭奈は、房を逆立て波導を感知してジョンを探し、居場所を突き止めた。

この田舎町の特産品である、摩天楼が霞んで見えるほどの天を貫く白い巨木群。

育て屋を管理する職員と、経営者の所有するキリキザンとコマタナたちの手によりよく手入れされた森林エリアは、いかなる庭園にも無い魅力を持っている。

高層ビル顔負けの巨木の足元にも陰を避けるようにして息づく背の低い広葉樹があり（巨木と比べなければ十分高いが）、草食のポケモン達がおやつ代わりに食す草やドングリなども豊富である。

ジョンは、その枝に座り込んで優雅に毛繕いに興じていた。

腕から伸びた振り袖状の体毛を、薄く唾液をまぶした舌先で撫で、毛羽立った体毛を梳^すいて光沢を蘇らせる。

白と薄紫が美しい模様を織り成す毛皮は、境界が曖昧なくらいに太陽光を照り返してはその美しさをアピールしている。

育て屋にきてから、飼い主の手入れをされていない杭奈は、近くで見れば鮮やかな青も土ぼこりにくすんでいる。

一応この育て屋には職員による毛繕いタイムもあるにはあるのだが、それよりやるべき事がある！！と、杭奈は招集に応じないのであった。

「こんなことなら……休憩がてらやっておけばよかったなあ」

と、自分の汚らしさを再認識した杭奈は、何だか住む世界やが違うのではないかと思つて苦笑する。

先程ジョンは戦いに来たわけではないと言つていたし戦いよりもミュージカルが好きだとも言われてしまえば目も当てられない。そんな相手にこれでは失礼かもしれないなあと杭奈は悩んだが、とにかくにもせめて毛づくろいが終わるまでは待とうと樹の影で

座って休むことにした。

毛づくろいの邪魔をしないように、とは言っても相手はポケモン。樹の影もじもじとしていれば敏感な嗅覚が杭奈を捉えるのは造作もないこと。

「……っーかまーえたー!!」

樹の枝から膝でぶら下がった彼に後頭部の房を掴まれて杭奈は跳び上がった。驚いた。

「ななな……なんだよ!!」

「あゝれえ？ ルカリオって気配を察知する力は鋭いと思ったんだけれど、何だか拍子抜けだなあ」

けらけらと天真爛漫に笑う彼は、勢いを付けて枝から飛び降りる。「いいから、何のつもりだっさ……」

「ん……何だか俺と相当戦いたがっていたし、質問したそうにしていたけれど出来なかったからね。

俺にどんなようがあるのかと気になったから話しかけようと思ったのだけれど……ただ話しかけても面白くないから脅かしてみただけさね。

そんな所で休んでて、なにしてたんだ？ 勝手に俺とかくれんぼでも始めてたのか？」

「い、いや……そうじゃなくってその……そうそう、毛繕いが終わるまで話しかけるのを待っていたんだよ」

「ん、そう」

ニコッ。と、音を出さんばかりに彼は笑った。

「で、なんの用だったの？」

「あの、その……僕が強かったかどうかを聞きたくって……」

恐ろしく簡単に負けてしまったから、良い評価ではないだろうと考え、杭奈は聞くのを躊躇いたくもなっていた。

勇気を出して聞いた問いに対する杭奈の答えは、ある程度予想通りのものである。

「強かったか弱かったかで聞かれると……弱かったな」

早速自分の評価を聞いてみて包み隠さずに言われて、杭奈は言葉を失う。

「うう……野性から上がってまだ日が浅いんだよね……」

泣き言のような言い訳もジョンの同情は誘えない。

「へえ、どおりで防御がお粗末……というか、後先考えずに突っ込む打撃が多いわけだ。なに、野性時代は集団で狩りでもしてたの？」
全くその通りだった。野性時代は集団で狩りをするから、相手が何が起こったか分からないうちに仕留めればいいだけで、防御の事なんて全く考えていなかったのだ。

雄同士の喧嘩も、当時はリオルだったものであまり考えていなかったし、メンバー入りしてからはあまり直接指導はしてもらえない。彼が強くなれないわけである。

それなのに、一緒に預けられた静流は卵グループが同じだというのは自分に勝てない相手に体は渡せないと言う。

逆に勝ったなら格闘タイプの漢として約束は守ると言ってくれたが、それも勝てる気がしない。

「なるほど。それで修行したいと……」

今必死で鍛えている理由から、未だ弱いままである事情を話してみるとため息交じりにジョンは納得する。

「いま、必死に鍛えているのか？」

「も、もちろん」

唐突に熱意の確認をされて、杭奈は咄嗟に肯定する。

「よし、その言葉嘘じゃないな？ 修行熱心なら、俺もやりがいがあるし付き合ってやるよ。」

杭奈の……というカルカリオの武術つてのをもつと見てみたいしね」

「え、ホント？　ありがとう……あ、で、でさ……正直なところ僕はどうだった？　もっと詳しく聞きたいんだけど……」

修行に付き合ってくれると言われて歓喜する杭奈は、お礼もおざなりに逸る気持ちを態度でぶつける。

「ん……人間と付き合うなら礼説も大事だと思うんだけどねえ。そっという風にがつくもんじゃないよ？」

そっちの教育は主人とやらに任せておくかと溜め息をつき、ジヨンは脳裏に焼きついた杭奈の動きを言葉にする。

「とりあえず、個人的な評価としてはあれだね。フェイントよりも、不意打ちで敵を仕留めることに向いている素早く直線的な打撃。」

本当に、狩りに特化されてるよ。恐らくだけれど、君は波導弾を撃たれて弱った獲物に追撃する係だったんじゃない？　いわゆるトドメ担当」

「あ、あう……その通り……」

「しかも、前蹴りで男の弱点を一直線に狙って来やがって……練習試合だつてのに殺す気満々じゃいつか嫌われるよ？」

「ご、ごめん」

「ついでに言えば、パンチを打ったらすぐに引かなきゃ、威力も出ないし相手に掴まれるよ。脇を締めて、素早く引く。これが基本さね。」

相手が動かない彫像なら力任せのほうが強いけれど、動き回る相手には力より技術でダメージを与えなきゃ。

力任せの格闘なんてローブシンにでも任せていればいいんだよ。キックも同じで、体ごとぶつかって行くような打撃の良さと悪さを理解してない。個人的に言わせてもらえば圧倒的に悪さが目立つてる。

うん、こんなところ……要約すると、攻撃自体は一撃必殺の威力はあるけれど、動く相手には通じないし、防御がゴミ」

「う、ごめんなさい……」

何だか酷い言われよしの杭奈は、自分が情けなく思えて反射的に謝ってしまう。

「いいよ、別に。弱い方が教えがいあるし」

対面するジヨンは陽気にそんな事を言いながら杭奈の肩を掴んで笑う。

「俺なら、今から2日で、今の倍強くしてあげる」

あっさりとすごい事を豪語して、ジヨンは笑う。

「そ、そうすれば君に勝てる？」

「最低でも5倍は強くならなきゃ無理かなあ。で、5倍強くなる期間は保障できないなあ……」

歯に衣着せない物言いでジヨンは笑う。

「でも、ま……なんとかなるでしょ。俺もなんだかで預けられる期間は長いし……」

「う、うん。とりあえず頑張ってみるよ」

「よし、その意気だ」

ひよんな出会いから始まった師弟生活。なんだかんだでまともな指導にありつけたのはこれが初めてな杭奈は、内心飛び上がりそうになりながら初の個人指導を迎えるのであった。

杭奈とジヨンは戦いのスタイルに違いはあるものの、どう攻撃すれば反撃を受けられないかを熟知したジヨンの指導は、向こう見ずな杭奈の戦い方を改める。

臆病にならないよう、反撃はしつつもあまり痛くないように優しい攻撃で返したりと、ジヨンは気遣いもばっちりだ。

見て真似するのが不得意な杭奈に気遣うように、動きを丁寧に指導する腕も大したもので、まさに理想の師匠と言えた。

ジムリーダーのポケモンにも匹敵しそうな実力を持ったこのコジヨンドが、番もなしにいまさら預けられたりして何故だろうとの疑問も浮かんだ。

バカラのように教官として預けられた様子もないので、ジヨンが

目的を話さない以上は見当も付かないのだ。

ジョンは、夜になったら目的を話すよと秘密にしていたので、待っていれば分かることだと杭奈はわざわざ尋ねる事はしなかった。

そもそも、トレーニングをしていると起きあがっては倒されの連続で、そんなことを考えている余裕も無くなってしまうので聞く意味もなかった。

疑問を払拭された夜の事であった。

「こついうの初めて？ 力を抜いてリラックスしなよ……その方が気持ちいいよ」

引き抜いた草を集めてベッド代わりにした地面の上、横たわった杭奈の上で、ジョンは固くなった杭奈の緊張を解くように、杭奈の肢体に手の平を押し付ける。

「や、そこくすぐりたい」

くすぐったさから杭奈は気の抜けるような奇声を発してしまい、まだ慣れていない行為に戸惑う。

「ん……まだ子供だな。大丈夫、もうちょっと続けてりや気持ちよくなるって」

そんな杭奈のことを笑いながら、ジョンは手を徐々に下の方へと伸ばしていく。

「ほら、ここなんかこんなにカッチコチになってるし……」

何百回とパンチを打ち込んだ腕は、すっかり緊張して固くなっている上に、酷くむくんでいる。

その筋肉を両手で揉みほぐされると、痛みとも重みともつかない疲れが解けるような感触を得て、杭奈は初めてマッサージの気持ち良さを知った。

「それにしても、どうして修行中のマッサージ師があんなに強いのか？ あれ、マッサージ師にあるまじき強さでしょ？」

ありがちな質問をされてジョンは笑う。

「マッサージ師じゃない、整体師……まあ、なんだかんだでマッサージもしているわけだけどもさ。」

前の主人がレンジャーでね、新米のポケモン鍛えていたから……一緒に教えるのは慣れてんだ。

今は元の主人も引退してね、故郷のここでポケモンの整体師をやっている今の御主人に引き取られたんだけれど……

どんなポケモンにも満足できるを提供するように、ってここで修行の最終段階さね。のびのびと技術を磨けてことさね。

目的を秘密にしたのは、ただ最初の客を驚かせただけ。他意はないよ。」

ここに至るまでの間、暗くて攻撃が見えなくなるまでトレーニングは続けられていた。

大きな力をことごとくつぶされてきた杭奈と、小さな力で大きな力をいなししてきたジョンでは、スタミナの減り具合に明らかな違いが生じており、ジョンの方は若干息が上がっている程度で、まだまだ矢でも鉄砲でも持つてこいとばかりの元気さだった。

杭奈は『練習終わり』の言葉を聞いてからは立ちあがろうとしないうほど疲れていて、それぐらい疲れていればマッサージも効果が高いだろうとわざと修行を厳しくしたジョンはちよつとばかりし性格が悪い。

とはいえ、そんな理由で厳しくされても、強い精神力と不屈の心で必要以上に修行についていけたという事実には、ジョン自身も驚くほどの根性であった。

本来の目的である整体師の修行も、大抵のポケモンがトレーニングを終える薄暗くなってきたころ始めるつもりだったが、真っ暗になるまで行えなかったのは予想外だったが、育てがいのある奴だと考えれば悪い気分ではなかった。

だが、とりあえず本来の目的を果たそうとばかりのジョンの手で杭奈は強引に寝かされ、今に至る。

「整体師の修行ばかりやらされてね、戦いはしばらくやって無

かったけれど……まあ、あんまりブランクが無いようで良かったよ」
杭奈の筋肉をほぐしながら、ジヨンは微笑みかける。といっても、ジヨンの顔は杭奈の死角にあったので見えなかったであろうが。

「というか、それだったら僕に構っている時間なんて無いんじゃない？」
……」

「ああ、いいのいいの。俺はやっぱ戦いの方が性に合ってるわ。
後輩のレンジャーに引き取ってもらえなかったのは、今思うと残念なものさね。」

主人はレンジャーの仕事でポケモンが死んだのを何度も見てるから、そうなって欲しくないんだとさ……」

「でも、君は戦い……好きなんだ」

「まあな。悪の組織との殺し合いは好きじゃないが、訓練の最中はまあ楽しくやれたよ……だから野蛮だとか誤解しないでくれよな？」

「そっか……」

強さを極めるのに恵まれた環境にいたのだなあ、と思いながら杭奈は気になった事を尋ねてみる。

「いつまでここに居られるの？」

「ん……俺はどうやら3ヶ月契約みたいだから……お前とのトレーニングも、整体師のトレーニングもゆっくりやらせてもらっわ。」

お前に付き合うのも、退屈しのぎにはちょうどよさそうだわ」

などと、今の安定した生活を嫌うような物言いをするジヨンではあるが、もともと発勁を使える以上、力の発生・移動・作用の流れは非常に優れたポケモンであるといえる。

体の奥深くまできちんと力を届かせるテクニクは、マッサージに応用すれば悪くはなかった。骨や関節の歪みを治すという整体において、もちろんそれは発揮されている。

「僕は6ヶ月契約……だし、寂しくなるなあ」

「そうしよげるな。主人は隣のブラックシティでゴギョウ整体院って店開いてっから、それなりに遊びに来ればいいさ」

陽気に笑いながらジヨンはマツサージを続ける。恐らく、戦い以外ではこういう職業が天職なのだろう。

気を抜けば眠ってしまいそうな心地よいマツサージだが、ジヨンは夢見心地に浸っている杭奈をよそに早々に切り上げて立ちあがる。「それじゃ、大分血行もよくなっただろうし、今日はもうゆっくり休みなよ。明日の朝も同じ場所で会おうな」

「え、ちよつとどこ行くのジヨン？」

「俺は、こっちの修行にいつて来る」

と、言いながらジヨンは腕から伸びる体毛を裏返してから手をワキワキと動かし、アピールした。

「あ。もうちょ……行つてらっしゃい」

樹の枝に飛び移ってから、足跡を残してはいけない呪いでもかかっているかのように木の上をゆくジヨンは、そのまま杭奈の視界から消えていった。

最後に言った『行つてらっしゃい』の一言は、恐らく聞こえてはいないだろう。

こうして、少々マイペースな所はあるが、なんだかんだで面倒見の良いジヨンに出会えて、杭奈は成長する希望と切っ掛けを持つ事が出来るにいったつた。

6

「ただいま!!」

夜遅く、寢床として与えられた岩穴に帰還した杭奈は、声だけで宇宙に行けそうなほど弾んでいた。

静流は感心したような、驚いたような顔で杭奈に近づく。今日だけで酷く汚れている上に、疲れているのが目に見えて分かる。

その上、匂いを嗅いでみれば明らかに杭奈以外の匂いが混ざって

いる。

「ふうん……嬉しそうな顔。随分と濃いめの男の匂いだね。アタイを諦めてついに男色にでも走ったかな。お尻の穴は大丈夫？」

「ちちちち違うよ！！これはあれ、ようやく僕の師匠に出会えたってこと。よく意味分らないけれどお尻の穴は大丈夫だから。

2日で2倍強くしてくれるって言われたんだからね。そりゃ、嬉しくもなるさ」

「ふうん……2日で2倍ねえ。本当なら楽しみにしてるわ」

静流は杭奈の頬を両手で包み込み、鼻に息を吹きかける。

「そんなときや、アタイに男を感じさせてくれよな」

そして、杭奈の下あごにチョロリと出した舌を這わせて静流は笑う。

「で、出来れば僕……今感じたいんだけ」

減らず口をたたく杭奈へ向かって頭突きがゴツン。

「ったああああ……」

強烈な思念を纏った頭突きが杭奈の鼻面を叩いた。これでは杭奈も悶絶せざるを得ない。

「この技、彼に見てもらってちょっとだけ鋭くなったんだ。

あんたのように2日で2倍の成長なんて出来なくなっちまったがね。伸びしろつてのはまだまだあるものだよ。

アタイはゆっくり成長するから追いつくのは頑張んな。調子に乗るのはそれから。いいね、杭奈？」

「ふあい……」

涙目で痛みをこらえる杭奈に向かって、静流は『若いていいわね』と笑う。

鍛えればそれだけ強くなれ、やればやるほど上達していった若いころを想いながら、静流は眠りにつくのであった。

次の日、ジョンが行う最初の修行は、準備体操から始まる。体が

温まったところで昨日初めて会った時と同じように組み手を開始、という流れだ。

基本的な屈伸運動から、足の甲とキスするような柔軟運動。180度股を開いて地面とキスしろだの、格闘タイプの中でもテクニクタイプのポケモン特有の柔軟さが無ければ到底不可能な要求をされる。

幸い杭奈は、主人の指導のたまものかジョンの要求ほどハードではないが柔軟運動はやり慣れていて、ある程度無茶な体勢からの蹴りも難なく放つ事は出来る。

つつがなく柔軟運動を終え、修行は組み手へと移るのであった。

昨日は意地悪で瞑想を先に積んでいたジョンだが、今日は強気に杭奈へ先攻を譲る。まず最初に左足を前に、それに合わせて左腕を前方に伸ばして腕から垂れ下がる優雅な体毛を見せつけるような構えをとる。

昨日、杭奈は体毛を掴みにかかった時に、掴まれても意外に問題にしない数多くの対処法に舌を巻いた覚えがある。

これ見よがしに掴んで下さいとばかりのジョンの腕から伸びる体毛だが、傍から見れば優雅なそれも突き付けられた方は本当に鬱陶しく、槍の穂先を突き付けられた気分である。

杭奈はまず半身になりながら重心を下げ、上半身を鉄壁の守りで固めながら接近戦を挑む。体の側面を敵に向け、急所を守った構えから顔面めがけて左裏拳。

流石に隙が大きく、ジョンの手で右手で軽くなされてしまったが後ろはとられておらず、超接近戦の間合いを取れた。続けて斧刃脚、かわされる。そして近距離での肩口からの体当たり。

ダメージ狙いではなく体勢を崩すための技ではあるが、きちんとヒットの感触を杭奈は得る。

追撃として顔を狙って打った杭奈の棘の裏拳は手首を抑えられて止められた。

杭奈の間合いを嫌ったジヨンは大きくバックステップで回避した。得意のアウトレンジからの特殊技とけん制技に持ちこむ算段のようだ。

負けてなるものと、遅れて距離を縮める杭奈に、片足で踏ん張ったジヨンの強烈な前蹴りが喉元を狙う。

美しいY字の姿勢で突き出された中足*12の威圧感に負けて杭奈はのけぞりながら止まった。

ジヨンに何かされる前に接近して戦況を立て直そうと、杭奈が脚を動かせれば、足元に生えた蔦草が絡まって杭奈は前のめりにつんのめった。

無防備に晒された杭奈の後頭部には、そつとジヨンの足の裏が触れる。そのまま鼻と顎の骨ごと叩き潰す術もジヨンは知っていたようが、ジヨンは敢えてそうはしない。

「立てよ、杭奈。まだ動けるんだろ？」

「……うん」

不覚にも草結びによってやられてしまった杭奈は、ジヨンに足で肩を搦りあげるように起こされ、またも先手を譲られる。

体力が回復すれば一撃を当てるくらいななんとかなると思っていたが、結局まともにヒットする事は一度も無い。

このままでは終われないと、杭奈は躍起になるが、冷静さを失わないよう努める事は忘れない。

今度は鍛え抜いた左ジャブに、鋼の力を付与して鋼鉄の爪での一閃。と、したいところだが、左ジャブでは速すぎて爪が形成されるまでに間に合わない。

結果、半端な鋼タイプが付与されただけの微妙な威力だが、ある意味では杭奈の攻撃が初めてクリーンヒットした瞬間である。

しかし、ジヨンは杭奈から決して目を離さなかった。

すぐに左腕を引く反動で右肘をジヨンの胸にぶつけてやろうと接近した杭奈を、カウンターの掌底フックで顎を打ち、沈める。

ふらりとよろけた杭奈に対して、ジヨンは腕の体毛を鞭のように

唸らせ、鼓膜、眼球、股間と、急所をひたすら狙った。骨を破壊する心配の少ない体毛による打撃は、効果音がビュオン、パシンツ！と、ひたすら風を切る音と乾いた打撃音のみで、聞くからに痛そうだ。

扱いの難しそうな二刀流の鞭だが、体の一部であるジョンには慣れた物なのだろう、腕同士がぶつかり合う事も絡み合う事も無しに、中空をブレながら優雅に舞い、本能的な恐怖を誘うその音が響く。

鞭に打たれたような強烈な痛みに負けて、杭奈はついに虐待を受ける子供のように体を丸めて無様な防御の姿勢を取った。

その隙にジョンは突き離すためのとんぼ返りで大きく距離を取り、杭奈がこちらに追いつく体制になる前にチャージされた特大の波導弾を見せつけ、勝負を決めた。

「……うゝん。昨日よりはだいぶ良くなっているけれど、まだ引きも遅いし動作の連続性がぎこちないかな。コンボを決めるためには結構きついかも。」

ジャブから肘打ちに繋ぐまでの動作……足運びから腋の締め方、足元から頭まで改善の余地があるね」

動作が早い事は褒められたが、やはり杭奈は最初の一発限りだ。

ジョンはコンボに重点を置く必要があると杭奈にアドバイスをする。

「わ、分かった……」

「それとね。一番最初に見せた防御しながら攻撃ってアイデア。一番最初に見せてくれたあれは結構面白かったよ。超近距離攻撃の基本さね。」

でも、あの裏拳……ホントは掴み取ってブン投げるなり、後ろを取って関節外すなりしたかったんだよね。

動く標的相手に攻撃してみたいだろうから放って置いたけれど……せっかく棘が付いているんだから、顔だけじゃなくって別の場所狙ってみたらどう？

あの裏拳はルカリオの専売特許だし、上手く当たれば何処を狙っても痛いだろ？」

ズバズバとジヨンは杭奈の弱点を解剖しては突き付ける。ここまですべての弱点が多いと気がつかされると、杭奈はもはや言葉が出なかった。「……はい」

「そうしよげるな……一つずつ潰して行けばいいさ。明日にはもっと強くなっている。一日だけでここまで強くなったしな」

そんな杭奈の気分を察してか、最後に励ましてジヨンは笑う。

「やっぱり、基礎を抑えた分昨日よりもずっと強くなってたし、今日から息抜きがてら俺以外とも戦おう。」

お前のご友人が何をやってくるか分からない、というのなら何をやってくるか分からない相手との経験を積んでおいた方が絶対にいいから。

なんだっけ、昼食を賭けて闘うあの……」

「昼食マッチだね……そう言えば静流は毎日洞窟エリアでそれを頑張ってるのか」

「そうそう、それ。お前が負けた相手に対しては、俺が戦いのお手本見せてやるからさ、一緒に昼飯たくさん食べてやるうぜ」

フォローもアドバイスも忘れないジヨンの教えに、杭奈は悔しさと達成感を同時に感じて奮い立つ。

当面は、静流に勝つ事は諦めて昼食マッチに勝つ事が目標となりそうだ。

7

昼食マッチは、食料を賭けて戦う。それだけだ。もちろん、ダブルバトルや時にはトリプル・ローテーションといったルールはあるが、基本は賭けて戦う。それだけである。

なんでも、ブラックシティ出身というこの育て屋の経営者は、『この世界に生きる事は誰も許されていない』という座右の銘を持っている。

本当なら負けた者には食料を半分しか出さないくらいの厳しいやり方にしたかったそうだが、それではトレーナーからも抗議が出そうなので、昼食を賭ける程度が関の山だそうなのだが。

昼食には草食、肉食、鉱食、腐食、全てのポケモンが美味しく食べられる木の実をあてがうために、食費は結果的に高くなったが、ポケモン達は食料を得るために強くなる理由が一つ増えた。

そのため、ポケモン達は傾向的に育ちがよくなり、なんだかんだでこの育て屋の評判が上がるきっかけともなった文化でもある。

ポケモン達は住処の位置に合わせて別々の場所で餌とそれを入れる専用のカゴを持たされ、それをお好みの場所に持ち寄って賭けな戦いを繰り広げた。

あえて不利な場所に挑む事で賭けの条件を良くする者もいれば、自分が慣れた場所で堅実に戦いに興じる者もいるというわけだ。

「じゃ、お前の対戦相手は……やっぱり何やってくるか分からない相手がいいよな……」

大小様々なポケモンが入り乱れる草地エリアと森林エリアの境界。癖の無いフィールドゆえに、普段は別の環境を好むポケモンなどもちらほらと集まって織りなす昼食会は、野性の時ほどではないがスリルに満ちた場所となっている。

池沼エリアや洞窟エリアでの開催もあるにはあり、参加資格に制限はないのだが、人気は少ないし杭奈に不利なフィールドも少ない。

それらは後回しという事で、無難に選ばれたのがこの場所であった。

「あ、あいつなんてどう？ 賭けの対象は鉄板だつてよ」

ジョンが指さした先にはギギギアル。中心に顔の無い歯車、その隣に顔のある歯車と赤い丸印の歯車。

二つの歯車の後ろに巨大な歯車と、赤い歯車に噛みあわせて回る鋸のように鋭い棘の生えた輪っか。

いきなり形状がもはやわけのわからないポケモンである。

「……鉄板、ねえ」

杭奈は自分の手の平に包んである薄い板状の鉄、3枚。言うなればチューイングガムのような形に延ばされた副菜を眺め、ギギギアルを眺める。

「奴の特徴は円の動きだ。気をつける」

愉快そうに笑いながらジヨンは役に立たないアドバイスをする。

「それ、見れば誰でもわかるし僕ら格闘タイプの使う円の動きとは全く異質な気がするんだけど……というか、闘う前提で話してない？」

「いいだろ、鋼タイプ同士仲良くやって来い」

そんな無茶な、と苦笑して杭奈は背中を押されるがままにギギギアルに話しかけなければ収まりのつかない霧囲気の渦中に放り込まれる。

ギギギアルにぶつかりかねない距離まで近づいて、杭奈とギギギアルは一気に注目の的に。

「あ、えっと……こっちは鉄板3枚。そっちは1枚でひと試合どうでしょうか……？」

杭奈は自分の方が不利な条件を提示するが、これは相手を舐めているわけではないし、自分を追い込んで力を出すという高尚な考えを持っていくわけでもない。

早い話が、タイプの杭奈有利なために、自分からハンデを申し出た。ここではそれが暗黙の了解だ。

「格闘タイプ……か。なら、それくらいが相場かな。いいよ、やろうじゃん」

「お、お願いします」

ジョンには一応の礼説を知っておくべきだろうという事で、戦う前に礼をさせられる。ただし、いきなり相手がかかってくることも考慮に入れて、礼の前後も目を離さない事は基本である。

ギギギアルは一応、杭奈が構えをとるまで待つてくれた。しかしながら、ギギギアルは四肢が無いためいつ仕掛けてくるか分からず、気味が悪い。

確かに、お遊びの面でも面白いポケモンだが、何をやってくるか分からないという点ではこれほど相応しいポケモンもなさそうだ。

杭奈もセオリー通りの戦い方が出来る気がせず、どう攻めるか少々迷う。

何より怖いのは、相手は攻撃しながら移動できるということ。頭突きや体当たりといった攻撃も、もちろん攻撃しながら移動と言えはそうなのだが。

ギギギアルの場合は常に正面を向いたままの回転という方法での攻撃で、ジャイロボールとも高速スピントも違う。

まさに異質としか表現しようが無い攻撃だ。

怖いのは鋭い棘の生えた輪っかだ。回転する事で本体を守っており、不用意にしかければ太ももの筋肉を切り裂かれかねない。

本体に攻撃を届かせるには、あの輪っかを如何に掻い潜るか、である。

杭奈は難しい事を考えなかった。構えてから一息の間に彼が選んだ技はボーンラッシュ。

ガラガラのように媒体となっている骨を持っていないために、武器として使用可能な長さまで波導を高め成形・実体化するには最低でも1秒ほどの時間がかかる。

しかし、武器ではなく防具として使用するならその限りではなく、この時杭奈が出した骨は長さにして約20cm。

接近の瞬間に伸ばし、防御に使用できるギリギリの長さである。

杭奈はギギギアルの回転する棘の輪っかに対し、波導で成形した骨を回転方向とは逆向きに打ちつけ、バランスを崩すと同時に回転の勢いを弱める。

ギギギアルの巨体が前のめりになったところで杭奈は輪っかを踏みつけ、地面にたたき落とす。

重心の外を踏みつける事で前のめりに襲いかかったギギギアルの本体には、棘の生えた裏拳を見舞って凌いだ。

回転し続ける事で尋常じゃない威圧感を与える歯車の動きを止めるため、杭奈は赤い歯車と鋸状の輪の間に骨を挟み、小さく跳躍して本体を蹴り飛ばして距離を取った。

「さて、まだ続ける？」

波導弾をフルチャージした構えのまま、杭奈は尋ねてみる。杭奈自身は知る由もないのだが、ギギギアルにとって回転は呼吸にも等しい行為である。

それを封じられた今、首に縄を掛けられたまま戦うようなもの。

ギギギアルが選んだ答えはもちろんこと、

「参りました」

思えば、ここ数日負け続けた杭奈だが、久しぶりに勝ちを拾えた満足と安心感で、安堵のため息をついて彼は座りこんだ。

「よっし、上出来だ。明日はもっと手ごわい奴と戦おうな」

そして、その勝利を祝ってくれる相手がいる事で、その喜びも一塩だ。杭奈は戦利品として放られた小さな鉄板を受け取り、余った右手でハイタッチを交わして喜びを分かち合う。

とにかく今は、おやつ代わりの鉄板の味を噛みしめて喜びに浸るのが優先とばかりに、杭奈の食事の様子は馬鹿みたいに幸福な顔に終始していた。

「今日は勝っていたらしいわね」

夜遅くに帰って見ると、ニコニコした顔で静流が待ち構えていた。どうやらご機嫌な様子。

「ちゅ、昼食マツチのお話？」

「当たり前よ。だって、あんた弱いからあのジヨンのお兄さんに全く勝てないし、昼食マツチ以外で貴方が勝ってたりしたの？」

「う……」

見下ろされるのは気に食わないが、反論しようにもできず杭奈は身をすくめる。

「あのジヨンもなかなかの者よねー、あの子ぐらい強くなれば私を倒せるから、頑張りなさいよ。じゃないと私他の男に犯されちゃうかもよ？」

「ああもう……わかったよ。絶対、僕と交尾させてやるからな！！
覚悟しろよ！！」

「はいはい、覚悟覚悟。待ってるわよ。静流お姉さん、貴方が強くなるのは嬉しいからね」

クスクスと笑って、静流はあしらう。

「うう……絶対覚悟してないでしょ……」

「さあ、どうでしょうね？」

結局自分が相手にされていないことに、杭奈はむくれる。

むすっとして拗ねてしまった杭奈を見つめる静流の視線は、可愛いと感じているのか、おこちゃまと見下しているのか定かではない。後頭部の房を立てれば少しぐらいは感情も伺い知れるが、それに気づかれてしまうと、他人は心の内を探られないようにしてしまうので、それは出来なかった。

結局、悶々としたまま杭奈は眠くない目を強引に閉じて寝たふりを始めるのであった。

そして、寝たふりを始めてから少し時間がたつと、岩穴前の草む

らからなにがしかの来訪者が訪れ、静流はその来訪者と共に杭奈の付近から消えていた。

洞窟エリアのすぐそばにある広葉樹に腰掛けて、春一番によって揺れる木の葉ずれの音に邪魔されながらも静流とジヨンは仲良く語り合っていた。

「あら、約束は守るわよ。あの子の純粋な気持ちを踏みにじるほどアタイもワルじゃないもの」

静流はジヨンの強烈な突っ込みを笑い飛ばして、眼前で手を振りながら否定する。

「その割にはお前、さつき……」

静流はジヨンの首元にそっと抜き手を添えると、ジヨンは黙ってしまった。

無論、殺す気などはないだろうが、深く詮索するならば何らかの危害を加える事は間違いない。

「レディにみなまで言わせないの。いいかしら？ 私は強い人にか興味が無いのよ……今も昔もね」

すまん、と謝ってジヨンはその手を払いのけて苦笑する。

「男狩りのために強さを磨くか……こりやまた、立派な目標なこと」

「でも、流石に本気で付き合うには強いだけじゃ不安……落ち着いた雰囲気の上が良いのよ。私より遥かに弱い事はもちろん、童貞なんて対象外だわ」

「へいへい……分かりましたよ。とりあえず悪女なんさね……」

「だって、私悪タイプだし、良いじゃない。それに、約束は守るわ……」 勝つたら”やらせてあげるわよ”

「はは、こりや杭奈には酷かもな……勝たせられる気がしない」

悪びれることなく言っただけの静流の言葉に、ジヨンはおどけて笑って見せた。

「そう言いなさんな、ジョンさん。貴方は立派よ……杭奈を本当に2日でかなり強くしちゃって」

「身体能力が高い割に基礎が出来ていなかったただけさね。主人が相応あの子の教育をさぼっていたと見える」

「私の主人……忙しかったものね。半年契約じゃなくて良かったわ。半年なら万が一ってこともあったもの。

でも……3ヶ月あれば杭奈も少しは美味しくなっているかもね。生焼けの肉をつまみ食いするのは好きよ」

「あ……ああ、そう……さな」

なんとコメントすれば良いのか分からず、ジョンは生返事からため息へつないで気を取り直す。

「そうさね。半年あれば、あいつはここに来た時よりも5倍強くなるだろうさ……でも、お前さんに勝つには、杭奈が5倍強くなるだけで足りるのかどうか……正直分からんな」

「5倍つてのがどれくらいを意味するのは分からないけれど……私に勝つには少し足りないでしょうね。」

ま、読みあいに勝って私に綺麗に技を決められるならあるいは……あのピヨピヨ可愛いアチャモのようなあの子でも」

静流は目を閉じて、そんな風に杭奈を評価する。

「ところで、貴方は強そうでいい男ね。私と遊ばないかしら？」

静流は眼を閉じたまま上体を傾け、右肩をジョンに預ける。

穿いている抜け殻も少しずらして、大事なところが見えるか見えないかの位置まで下ろした。

冗談めいた口調で語る静流の言葉は、ジョンとの関係も遊びであると明言しているようなものだった。

「バカラ教官と『遊びで付き合ってる』って明言しているお前とは嫌。っていうか、杭奈に嫌われちまう。」

それに、俺は整体院に戻れば彼女がいるのさね。こんな状況で浮気なんてナンセンスさ。ま、俺に勝ったら遊んであげても良いよ」
自信満々にジョンは言つてのける。静流は体つき一つで相当鍛え

抜かれている事は分かるが、タイプの関係を思えば負ける気はしない。

「んもう……遊びで付き合うつて分かれると辛いわ。杭奈ったら余計な事を言うんだから」

「なら、俺をモノにするのは諦める？」

ジョンが苦笑して切り返す。

「ジョーダン……私の誘いを断るのなら、お望み通り力づくで言いながら、静流の肘打ちがジョンの脇腹を打ち貫——」

「冗談なんて、言っていないよ」

—— かなかった。軽く肘鉄を食らわせるだけのつもりだったが、きつちりガードされて静流は眼を皿にしてジョンを見る。

「まあ、驚いた。そんなに強いと本気になってしまっわ……」

ふん、と鼻息を吐いて静流は尋ねる。

「それじゃ、質問。格闘タイプの漢として、二言は無いかしら？」

貴方のことちよつと気に入っちゃったわ」

「……言っちゃったものは仕方ないね。いいよ、お前も闘うのが好きなんだろ？ 格闘タイプはみんなそうだ」

溜め息をつきながら、さりげなく静流の右腕を掴もうとしたジョンだが、その手は逆に静流に掴まれる。

「おっと、付き合ってもいない女性の手を握るのはマナー違反じゃないかしら」

「やべっ」

不意打ちをしようとして逆に不利な状況に追い込まれたジョンは反射的に声を上げた。

「それに、私は闘うのが好きなんじゃなくって……勝つのが好きな」

静流は、ジョンを掴む手にぐつと力を込める。

「知ったことかよ！」

ジョンは自身の左手首を強引に手繰り寄せ、それを掴んでいる静

流の右手首に貫き手*13を喰らわせた。

手首の腱を強かに打たれて緩んだ静流の手を彼女の体ごと打ち払って、ジョンは木の上から飛び降りる。

静流は葉がついた木の枝を折りつつ、跳び蹴りも兼ねて跳び下りた。

半歩下がって空中からの飛び蹴りをかわしたジョンはバックステップで距離を取るも、静流が投げた樹の枝が襲いかかる。

視界が塞がれたジョンは、樹の枝を払いのけて視界を確保するが、その瞬間に強酸を含んだ体液が彼の胸にヒットする。

胸が濡れた感覚に気付いたジョンは、すぐさま腕から伸びる体毛でそれを拭い去った。

自慢の美しい体毛が、拭いた右腕からはらりと溶け落ちるのを感じてぞっとする暇も無しに、静流の右ローキックがジョンの左脚を狙う。

膝を上げてキック受けると、足の甲が膝に当たった痛みで僅かに静流の動きが鈍った。

ジョンは上げた足を戻さず、前に押し出すようにして間合いを詰め、左手で静流の顎先を右から左へ張り手の形ではなく、

ジャブ代わりの逆張り手を軽く振り抜いて静流の顎先を揺らし、ダメ押しの発勁。

顔を狙った重く響く打撃で一発御退場願おうとしたジョンの一撃は、静流が勢いよく地面に倒れる事で避けられた。

「なっ……」

しかし、それは倒れたのではなく受け身を取って地面を転がるというトリッキーな動作であった。静流は尻尾を器用に扱って肩辺りから柔らかく地面に着地。

自慢のトサカを少々汚しながらも勢いを付けて静流は立ちあがると、双方ともに左足を前にしたスタンダードな構えで仕切り直して膠着する。

「ジョンさん。貴方随分、素敵な攻撃をしてくれるわね？ 年のせいかバカラ教官にも劣らない魅力だわ」

「年長者の魅力って奴ですかい。そりゃどーも……こちらこそ、何をしてくるか分からないって杭奈が言っていたけれど、本当さな。

レンジャーでも整体師でも、今までお前みたいな女見たことねえ……初体験だぜ」

「お褒めに預かり……」

と、静流が笑いながらその笑顔の奥に殺意を隠して精神を集中する。

その様子に本能的な危険を感じたジョンは、ひとまず飛びはねて樹の枝につかまった。

「光荣よ」

その刹那、ジャブより早く体当たりよりも重い、渾身のパンチが静流から放たれた。

その威力のほどは拳にヒットした固形物が無いために分からなかったが、踏み込み一つで地面がえぐれ、踏み込む時に足をひっかけた木の根っこが途中で千切れている。

まともに拳へ当たっていたらその威力は計り知れない物となっていただろう。

「気合いパンチ……お見事」

「避けられちゃあ、世話はないわよ」

静流は軽く開いた手の平の中に石を作りだし、飛礫ついでを投げてジョンを撃ち落としにかかる。

素手で受けては危険なそれを、ジョンは柔らかな体毛でくるみ込むようにキャッチする。

石の飛礫の結果がどうなったかを見ずして、静流は周囲の木々に身を隠していた。

だが、逃げたような気配ではない。

「物陰に隠れて……ビルドアップ……もしくは龍の舞いか？」

もしビルドアップで打撃力を上げられるのであれば、まだ対処

は出来る。しかし、もしも相手が龍の舞いを覚えていれば？

普通なら龍の舞いなんて行えば確実に居場所がばれる——が、今日は風がやたらとうるさい。

この闇と音に紛れて龍の舞を積む事は難しくない。恐ろしい想像がめぐつて、ジョンの身の毛がよだつ。

すぐさま、ジョンは精神を研ぎすまし、波導弾を放つ準備をする。瞑想からの波導弾と言えば彼の十八番だ。

悪タイプは夜目が効く種族が多く、静流が属するズルズキンもまたその例に漏れない。いつでも仕掛けられる静流と、いつ仕掛けられるかもわからないジョン。

静流が心理的にも状況的にも有利な勝負だ。だが、ジョンには勝算があった。

彼には、杭奈ほどではないが波導を駆使し気配を感知する技術がある。俗に言う心眼*14だ。

ジョンはフルチャージした波導弾を構えつつ、周囲の気配に気を払う。

数秒の沈黙。春一番だけが鳴いているこの場所に、ガサリと異物が紛れ込んだ音。

背後から繰り出されたズルズキンの跳び蹴り——は、ただの陽動だった。

わざとらしいまでにガサリと音がした方向から来たそのズルズキンは、いわゆる身代わりの技。

ぬいぐるみのようにふわりとした質量しか持ちえないその身代わりの跳び蹴りを棒立ちのまま受けとめたジョンは、同じ方向から遅れて迫ってきた静流に向かって特大の波導弾を放つ。

「きゃっ——！」

龍の舞を積んで対艦巨砲のような圧力を帯びて気合いパンチを放つ静流は、ジョンの攻撃を受けてただダメージを受けるにとどまらない。

体勢を崩して派手にすっ転び、木の根に四肢が引っかかりながら

小さくバウンド。積もった腐葉土で衝撃を吸収しながらブレーキして止まった。

全く無防備のまま受け身も取れていないという事は、すでに彼女は空中で気絶していたのだろう。

「身代わりからの……気合いパンチ。恐ろしい女だな……」

もしも最初の身代わりに波導弾を当てていれば、ジヨンは無防備になったところに静流の気合いパンチを打ちこまれていたであろう。そうなれば、一発KOである事は容易に想像できる。経験の差が勝負を分けたと言っているだろう。

「こいつに3ヶ月で杭奈を勝たせるとか……やっぱり無茶だね」
勝てたことにほっと息をつきつつ、ジヨンは疲れて座りこんだ。

その訪問者がバカラ教官だろうかと思つて房を立てて周囲の状況を探知してみると、どうやら近くでジヨンと静流が肩を並べているらしい事を感じる。

チラチーノとエモンガのカップルの時のような情事ではないようだが、楽しそうに話している事がわかつて杭奈は悶々とした気持ちはさらに増してしまう。

その気持ちをどうにかしたいのだが、解消するには岩穴で同居中という環境は危険だ。

何が危険かと言えば、主人の古参から教えてもらった自慰でもしようなものならその匂いを敏感に感じて指摘されるだろうということだ。

悶々とした気持ちを抱えながら無意味に寝がえりを打っていると、その内二人は戦いへの欲求に身を焦がされたらしい。

その感情の変化を前触れに、二人は立ちあがり戦闘を行い始めた。感知する力が弱い杭奈には詳しい事までは分からないが、最初静流が優勢に。

最終的にはジョンが逆転勝利だ。あの圧倒的な静流を下すジョンのすごさを感知して、杭奈は興奮してしまふ。

数十分後に、静流は体中を痛そうにおぼつかない足取りで帰ってきては、泥のように崩れ落ちて眠ってしまう。

結局杭奈は静流が寝静まってからもどんな方法でジョンが勝ったのかを無双して、しばらく寝付く事が出来ずに悶々とし続けるのであった。

翌日。スパーリングや基本練習もそこそこに、二人は昼食マツチに赴いた。

今日は『不利な場所でも戦えるように相手の領域で』、というコンセプトで池沼エリアでの戦いだ。

湿原を好むポケモン達が集まるここは、ガマゲロゲやマツギヨといったそれらしいポケモンもいれば、眩しい光沢が鋭いランスに映えるシュバルゴなど、不釣り合いとも思えるポケモンが集まっている。

「よし、今日の相手はマツギヨだ」

「あ、あのポケモン……？」

ジョンが指さすのは、顔芸と揶揄されて不動の地位を得ているポケモンである。

沼地にプカプカ浮かんで、モモンの実を提示して挑戦者を待っているところだ。

普通の魚と違って平たい体の両側に顔が付いているのではなく、上面に顔がよっているという不思議な形。

それだけならばまだしも唇が嫌に厚く、目も死んだように生気を

感じないという、見ただけで気の抜けるような顔だ。

女性だというのに、おいたわしや……と杭奈は苦笑した。

確かに、他の魚とは違って何をしてくるか分からないのは脅威だ。見た所、水・地面タイプのようなし地面技は警戒せねばなるまい。

後は不安定な足場。直接攻撃の使い手にとっては、結構な鬼門となりそうだと杭奈は分析した。

「おい、そのマツギヨのお姉さん。僕のオレンを賭けて勝負しないかい？」

「へへ、いいのかいお兄さん。私結構強いんだけどなー」

「そ、そう言われるとオレンの実が惜しくなるけれど、こっちだつてそれなりには強いつもりだ。自信があるってことは同意ってことでいいんだな？」

「へっへ……後悔するなやあ、兄ちゃん」

「そっちこそ！！ ジョン、預かってて」

杭奈はジョンに向かってオレンの実を投げ、預かってもらいつつ沼の中に入る。

ぐじゅり、と今まで感じた事の無いような地面の感触に包まれてひんやりとした沼の中に足が沈む。

見た目の割に体重が重い杭奈は歩く時こそよろけずに済んだが、ジャンプもキックも踏み込みも、全てが制限されてしまいそうだと本能的に感じ取った。

睨みあう二人、もうすでに戦いは始まっている。攻めあぐねている杭奈に対して、マツギヨが先攻を取った。

まず最初に杭奈の意表を突いたのは、マツギヨの攻撃が電気で来たこと。電気技は当然スピードが速く、避けるのは難しい。

沼地に慣れていないであろうことを見越しての攻撃に、杭奈はたまらずサイドステップで避けようとするが、転ぶ。

図らずも、泥が電気を防いでくれたので効果はかなり抑えられたが、見事に攻撃されるだけされて、こっちは反撃の糸口もつかめなかった。

しかも、転んだ拍子に大量の泥が顔に付いて目を開けられない。次善の策として後頭部の髪を立てるが、その前に足元から大地の力が見舞われる。

地面が間欠泉のように吹っ飛び、泥飛沫と共に杭奈は中空に浮き、頭から派手に落ちる。

泥がクッションになって受け身の必要もなかったが、地面タイプが弱点である杭奈には、二つの攻撃ですでにダメージは甚大だ。

普通に走ろうとしてもダメだと判断した杭奈は、野性の頃の狩りのスタイル。身を低くして接近する4足歩行のスタイルをとる。

空中で吹っ飛びながら用意したメタルクローをスパイク代わりに、野性の如く向う見ずな突進で跳び掛かる。

杭奈の跳び掛かりは、確実にマツギヨを捉え、抱きかかえるように覆いかぶさるのだが、彼女は柔軟な体に加えてよく滑る滑らかな泥。

彼の毛皮はマツギヨを捉えることなくすりぬけられる。しかし、杭奈はめげずに胸の棘を突き刺すように、腕へ力を込める場所を変える。

ザクリとばかりにマツギヨの体がえぐれ、滑りが止まる。

棘に体を挟まれる激痛で抜け出せないマツギヨは放電を見舞って杭奈にダメージを与え、図らずも根気の勝負となった。

バチン、と自分の体が爆ぜる音を聞いて、杭奈は聴覚に遅れて痛覚が悲鳴を上げるのを感じる。

マツギヨも腕の間をするりと抜けてしまい、明らかな劣勢だ。ここで負けを認めてしまえば楽なのだが、なんとか気力を振り絞って彼は立ちあがる。

「た、タフやね……まだやる気なの？」

まさか立ち上がるとは思わなかったのか、キレの無い褒め言葉を言ってマツギヨは苦笑する。

その背中というべきか、顔というべきか、表面には血がにじんで

いて痛々しい。

答える余裕もない杭奈だが、敵のタイプは電気・地面だと冷静に正解を導き出している。

今の自分が出来る技で何か有効打を与えられる技は無いかと模索し、結局見つからずに妥協。

電撃を防ぐための泥飛沫を派手にまき散らして接近、力任せに殴りかかった。

目が見えない状態で正確に攻撃してくる杭奈を見て、マツギヨは波導がどうのこうのという理由は知らなくとも敵が目以外の感知能力を持っているのは分かっていた。

相手が正確に襲いかかってくるであろうことは想定済みで、マツギヨは泥の中に隠れることをせずに真っ向から受けて立つ。

彼女の泥爆弾が杭奈の胸にヒットすると、杭奈はそのまま彼女の上に力なく落ちて、そのまま沈んでいった。

杭奈の敗北で勝負ありである。

10

目覚めた杭奈は、マツサージされながら目を覚まし、そのまま数十分マツサージをされ続ける。

まだ電撃の痛みは消えていないが、体はそれなりに動きそうだ。早く修業を再開したい杭奈にとって、この長時間は精神に答える。

「今日はマツサージがいやに念入りだね……」

少々嫌気がさしていると分かる口調で言うと、焦るなとばかりにジヨンが溜め息をつく

「電撃を喰らったら、体の外はともかく中がズタズタになりかねないからな。体の外は傷薬でなんとかなくても、中は熱心に治さんと。残念ながら俺は血行を良くして早く治るように祈るしかないし管

理棟のタブンネも昼食時は結構怪我人が多くて並ぶしさ……俺らは自分で治そうぜ」

「はあい……」

親切に戦い方を教えてくれるジョンに逆らうわけにもいかず、杭奈はしぶしぶジョンに従う。

「ねえ、ジョンは、自分が戦えばあのマツギヨに勝てたと思う？」

「ん？ 俺は……まあ、勝つだろうな。お前の方は正直沼でマツギヨ相手じゃまず負けると思っていたが、案外抵抗出来たと思うよ。ま、大差で負けたことには変わらないけどね。」

敗因は、いくらお前が物理型だからって、沼の中に無策で入って行った事かな？

相手の出方を沼の外から伺って、それから対策を立てればよかったんじゃないかな」

「ま、負けると思ってた戦わせたとか……酷いなあ」

杭奈はふてくされて不平を漏らす。

「そう言うな。お前の分の木の実、半分残してやっтарう？ まだ欲しいって言うなら明日は俺が奪い返してやるうか？」

「え、ホント？」

木の実半分に物足りなさを感じていた所。明日、その分が帰ってくると聞いて、杭奈は小躍りして尋ね返す。

「勝てるって決まったわけじゃないし……それに、お前には種族柄真似できない事をやるから、戦い方のお手本にもならないだろうかな。」

ま、強さを目指す基準にでもしてくれて事……」

「ど、どっちにしたっていいよ。ジョンの強さが見られるなら、是非」

子供のように無防備な笑顔で杭奈が頼む。

「お前は、可愛い奴だな」

感情ダダ漏れのその表情には、思わずジョンもそう答える始末だ。
「え……」

上半身だけジョンに向けたまま、杭奈は口をぽつかりと開けた間、
抜け面を晒す。

「え、じゃない。お前がああ静流に相手にされてないって漏らしていたけれど、そういう無防備に感情晒す所が子供なんだよ。」

がつついて、体だけ大人になっている子供じゃあ、大人を好むお転婆なお嬢様とは相性悪いだろうな」

「む……まだ子供ってこと」

「うん。このままじゃ強くなっても、静流が相手じゃあお前いつか捨てられるだろうな。」

ウチの店には色々来てねえ……そういう話をするとお前みたいなのが話題に上がるんだよ。もう少し、クールに振る舞ってみたらどうだ？」

「クール……クール……」

ピンとこない提案に、上半身を起こした無茶な体勢のまま杭奈は首をかしげる。

杭奈の高い柔軟性はこの体勢を苦と思わないのか、無駄な所で発揮されていた。

「分かった。無理してクールに振る舞おうとするな……いつか世話したがりのお姉さんに拾ってもらえ」

「あ……」

ジョンの言葉に何かを思い出したのか、素っ頓狂な杭奈の声が漏れる。

「どうした？」

「そう言えば、昨日静流と会っていたでしょ？ 何を話していたの？」

「お前に大人の魅力を感じないって話とか……」

何故か得意げにジョンは笑う。

「ぐっ……いや、そういう話じゃなくって、何か褒めてくれたりとかは無かったの？」

「可愛いって誉めてたよ。お前、全く相手にされていないな」

「うつつ……」

からからと陽気に笑うジヨンは、杭奈の肩を軽く叩いて笑い飛ばす。

「あいつは、お前のことを弟のように思っているんだよ。だから恋愛対象じゃないってだけじゃないのかな？」

俺が話しかけようとしたら、唇に指当てて『静かにしろ』って意思表示してきやがったしな」

意気消沈する杭奈をよそに、ジヨンは中々楽しげに静流を語る。

「静流は脈なしだよ。他の女狙った方がよくないか？」

「ウチのジム男ばかりなんだよお」

「はは、そりゃつらい。ここで嫁を見つけないきゃ一生童貞かもな……」

ひとしきり笑って、自分の手が止まっている事に気付いたジヨンは、小さなため息をついた。

「杭奈。お前そろそろ前を向けよ……マッサージし辛いだろう？」

それでも修業は続けるんだろう？」

「ふあい……お願い」

「あ、ついでに闘ったりもしたけれど勝敗知りたい？」

「知ってる……ジヨンの勝ちでしょ。僕は房で感じていたから……それより、どんな風に戦ったの？」

「はは、危うく負けるところだったよ。あのズルズキンは間違いくジムリーダーのメンバーとして一流だよ……」

それに、あの時は静流が負けたが、多分あいつまだ隠し玉をいくつか持っていてやがる。使えなかったのか使わなかったのかは分からんが……な。

で、肝心の戦いの内容だけれどね……」

すっかりテンションが下がった杭奈だが、ジヨンと静流の戦いの様子を効くとその、暗い気分も何処かへ行ってしまい、更なる負けん気を燃やすのであった。

そうして、杭奈の情熱は加速していくのであった。

翌日。約束通りジヨンはマツギヨに戦いを挑む。

「よつす。昨日は俺の弟分が世話になったね。今日は俺が相手したいんだけど、いいかな？」

悠々とした足取りで、如何にも自信満々にジヨンがマツギヨへ歩み寄る。

視点を少しでも低くするため、屈んで沼地を覗くと、マツギヨは見覚えのある顔だと気づいたようだ。

「あ、昨日のコジヨンド……なに、あのルカリオの子の敵打ちかしら？ いいわよ、今日も木の実同士交換しましょ」

「よし、そうこなくっちゃ」

前日杭奈に余裕を持って勝ったせい、マツギヨは今回も木の実の等価交換を承諾してくれた。

「じゃ、杭奈。よく見てろよ。戦いつてのは、我がままの押し付け合いさね。」

弱い奴だつて自分の得意なジャンルでなら勝ちを拾えるんだ。だから、沼で弱い俺はどう戦うべきか……見てろよ」

勝ってくるぞと勇ましく戦闘態勢に入るジヨンは、よせばいいのにわざわざ沼の中に入り込む。

だが、それを見る杭奈は『自分こそ無策じゃないか』とは思わなかった。

杭奈はジヨンなら何か策があるはずだと、根拠のない期待を抱いてジヨンの王道をしっかりと見つめる。

ジヨンはまず、泥を浴びて電気を防ぐ。昨日の杭奈のやり方を見て、思いついた事で、こればかりは杭奈の功績である。

しかし、そこからは杭奈とは全く違ったアプローチを見せる。

陸のポケモンの沼の中での機動力の低さに味をしめたのか、マツギヨは沼の内に地割れを起こし、深みに沈みこませようと画策する。

対するジヨンは跳んだ。ただ跳躍しただけに終わらず、足よりも遙かに面積の広い体毛を水面に叩きつけ沼の上を走り始める。

重心を低くして、両足と両手で交互に水面を叩き走る姿は、まさしく肉食獣の荒々しさだ。

油断して大規模な地割れを起こしたマツギヨはその隙も大きく、接近されたと思った頃には体毛で沼の中から掬いあげられ、陸に放り投げられる。

ビチビチと跳ねて沼の中に戻ろうとしたが、ジヨンはさせるかとはかりに再び腕の体毛で掬いあげ、弾き飛ばす。

泥を吸って重くなった体毛は、痛そうな音を立ててさらにマツギヨを吹っ飛ばす。

ダメ押しで草結びを連続で掛けて拘束。がんじがらめになったところで、跳躍からマツギヨの数センチメートル横を地面に穴があくほど踏みつけた。

「まだやる？ 次は容赦しないよ」

「いや、これは……参ったわ。貴方強いわね。昨日みたいに陸のポケモンなんて一ひねりだと思ったんだけれど……強い奴は沼でも強いね。」

完敗……私の木の実持って行きなさい」

あまりにも圧倒的に負けて、マツギヨは苦笑するしか出来なかった。この戦いは、非常に鮮やかなジヨンの勝利で幕を閉じた。

「へへ、悪いね」

泥まみれで笑うジヨンはひとつ飛びで沼から跳び上がると、マツギヨの木の实を預かっていたガマゲロゲからクラボの実を受け取った。

「ジヨン、さっすが」

「へへ、レンジャー時代はマグマの上でだって戦ったものさ。沼の中で戦うくらい余裕さね」

尻尾を振りながら待ちかまえていた杭奈とハイタッチを交わすと、爪で半分に裂いた木の实を渡す。

二人は木陰に座り込んで、戦利品と共に昼食を口にする。

「マツギヨとの戦いで伝えたかったことはだな。相手のペースに合わせる事はない。自分のペースに持ち込む手段を常に考えるんだということさね。」

例えば静流は砂漠……この育て屋で言うところの砂地エリアを得意としている。そこで戦うのであれば、俺は静流には絶対に勝てない、と断言できる。

それに、お前は暗い洞窟や夜の樹海を得意としているはずだ。そこで戦うのなら俺だってお前に勝てないかもしれない」

「う、うん……」

杭奈は素直に頷いて、同意する。

「とはいえ、静流と戦うときに、今回みたいに極端に相性の良し悪しがある戦いはしないだろうが……場所と言う条件以外でも自分のペースに持ち込む腕は細かいところで響くもんだ。」

例えば、お前のインファイトだ。ゴウカザルやエルレイドみたく、同じように接近戦が得意な奴とあたらならない限り、アレははまれば強い。

なんせ、近づかれた方は攻撃の方法がかなり限られるわけだからな。

例えば、はつけい、肘打ち、頭突き、膝蹴り、裏拳と言った、間合いが短くても出せる専用の技でないと対応できないと言うのは大きな強みだ。

対峙した相手は大きくペースを乱されるはず……ただし、静流が相手だと簡単にはいかないからな。

ズルズキンのことだ……とんぼ返りで距離を外したり、真つ向から膝蹴りや頭突きで潰される危険性も孕んでいる……

だからまあ、それらに対抗する手段、ペースを乱されるイメージと、それを取り戻すイメージ。常に頭の中においておくんだぞ？

でないと、為すすべなく負けるからな」
「はい、師匠」

ジョンの強さを改めて認識した杭奈は、いつか追い抜いてやる**とばかりに奮起する。**

大変な事は分かっているが、だからこそ燃えるという、まさしく不屈の心の持ち主であった。

1
1

連日のトレーニングをの傍ら、昼食マツチに毎日参加する杭奈は、ジョンの意表を突いた攻撃に対しても動じる事がなくなっていた。

あらゆるタイプ、そして生態のポケモンを相手にする内に、敵が仕掛けられる技というのがなんとなく読めるようになり、その経験もジョンとの戦いで活かせるようになって行く。

今まで軽くあしらうだけだったジョンも、今となっては杭奈を本気で戦うべき相手だと認めている。

それでもまだ、ただの一回すら勝ちを拾えない杭奈だが、敵の攻撃が見える、分かる。為すすべなくやられる事が無くなった。

それに、負けはしたが格闘タイプが弱点である静流と戦うのならあるいは、そう希望を持てる戦いも何度かあったのだ。

他にも、昼食マツチで負ける相手が随分少なくなつたと、徐々に感じる成長の実感は、彼のやる気を奮い立てていた。

相変わらず喜ぶ時は全力で、へこむ時も全力という無防備な感情表現は健在であるが、漂い始めた風格は育て屋に來た頃には無かつたものだ。

しかし、嬉しい事ばかり訪れてくれるほど人生は甘くない。
別れの時も近づいて、ジョンはマッサージを終えた後だというの

に解散せずに木の幹に背を預けて座りこむ。

「どうしたの？」

中腰の姿勢で話しかける杭奈に、ジョンはまあ座れやとばかりに手招きする。

「今日、スバルさん……この育て屋の経営者が俺の事を呼んだんだがな。俺が教えられるのも後8日。主人から、あと一週間とちよつとで引き取りに来る……って連絡が来たんだそうだ。だからそろそろ、お別れだなってさ」

「ああ、そう言えば……もうそんな時間だよな。静流もそろそろお別れじゃないかって言っていたけれど……本人の口から言われると、何だかお別れだって実感がわいちゃうなあ」

手招きされるがままに杭奈はジョンの隣に座り込み、木の幹にもたれかかる。

「色々あつたなあ……ここまで強くなれたのは、ジョンのおかげだよ。ありがとう……」

「気にするなや。俺のは暇つぶしさね。本来の目的は整体師としての腕前を上げることだったんだから」

赤裸々な杭奈のお礼への照れ隠しに、ジョンは本来の目的を口にしてみせる。杭奈は照れ隠しなんて事は考えすらしていないようだが。

「ここに来た頃もすでにうまかったけれど、ジョンのマッサージも整体も上達したよね。今はもう、気持ち良くて眠っちゃいそうなの……」

そこで言葉を切って杭奈はうつむいた。

「ジョンは、この育て屋を抜けたらもう戦いから身を引いちゃうの？」

「どうかね？ まだ戦いたい気もするんだが……戦いは爺さんになるまでは続けたいものだね。戦うってのはやっぱり面白いものさ」

「そっか……」

寂しい、と口にしたいが、それを口にすればジョンが困ってしま

うと感じて杭奈は口を嚙む。

だから、せめてもの抵抗として、自分を絶対に忘れられないように印象付けたい。前々から決めていたことだが、杭奈は今ここで言うことに決める。

「ねえ……ジョン。僕、ジョンがここを去る前にまた静流と戦う……その立会人になって欲しいんだ」

「ああ、良いぜ」

最初からそのつもりだったジョンは、今更な頼みに笑って即答する。

「多分勝てないだろうけれど、今のお前なら無様な戦い方はしないはずだ」

そして、余計な一言を付けくわえながらも杭奈を激励して心臓近くを小突いた。

「ちよちよ、負けるだろうってちよつと酷いなあ……僕かなり強くなったつもりなのに」

「かなり強くなっても、すごく強いやつにや勝てんさ。俺然り、あの姉さんしかり、教官たち然り、洞窟エリアの大将や然り……」

だがまあ、運つてものがある。読みあいに勝てれば、あの姉さんにだって勝てるはずさ。頑張れよ」

「それはもちろん……。うん、今の僕なら出来るよ」

「よし、その意気だよ杭奈。戦いの日にちが決まったら教えてくれ」
「分かった。今日、静流に申し込んでくるよ」

「ああ……」

満足そうに笑ってジョンは溜め息をつき、のっそりと立ち上がる。
「それじゃ、俺はお疲れのポケモン達にマッサージをして回ってくるよ。明日また会おう」

「うん、いつもの場所だね」

杭奈とジョンは手を振って別れる。

杭奈は最高のお別れにしようと意気込みながら、住处として与えられた岩穴を目指した。

「あら、遅かったのね。彼氏とは上手くいってる？」

「彼氏じゃなくって師匠！！ 全く、僕達そういう関係じゃないってば」

「あらあら、だって貴方達甘い関係なんだもの。お別れも近くなつてキスの一つでも交わしているのかと思っていた所よ」

「そーいうのは無いから……はあ」

茶化すのが好きな静流の言葉に杭奈は溜め息をつく。相変わらず相手にされていない感が酷いのだが、今に度肝抜いてやると杭奈は気を取り直す。

「そうそう、さっきご主人から電話があつたんだけどね。アタイ3日後の昼ごろに引き取られるって」

「え？」

「ああん？」

間抜けな声で聞き返す杭奈に、1世代前の不良を彷彿とさせる凄味を利かせて静流は聞き返す。

「あの、3日後ってどういうこと？」

「どういうことも何もアタイは3ヶ月契約よ……あれ、杭奈もしかして自分の契約期間知らなかったの？」

「え、いや……僕は半年契約……」

「へえ、なんだ知っているんじゃない。ちなみに袴君も半年契約よ。二人で仲良くやりなさいよ」

さらりと酷い事を言つて静流の笑顔が崩れない。

「ちよちよ、ちよつと待つてよ静流……それじゃ、明後日の夜に勝負を挑むよ。絶対負かせてやるんだからね」

「杭奈……少しは強くなつたつもりのようにだけど、それでもアタイにはちよつとねえ。でもま、万が一ってこともあるでしょうし、頑張りなさい」

あくまで、静流は杭奈より上という態度を崩さない。負けるとし

ても本当に万が一だと思っているようだ。

予定は色々狂ってしまったが、やる事は変わらない。杭奈はこれまでになく気持ちを奮い立たせて、決戦の日に備えるのであった。

1
2

「馬鹿だな、お前は」

静流が3日後に主人に引き取られると聞いてジョンは足首に口付けしながら溜め息を漏らす。

「う……てつきり静流も契約期間が同じだと思っていたんだよ」

「全く、それならもう……明日は軽く調整だけして休んだ方がいいな。本格的な練習は今日で最後にしよう」

「ああ……もう最後かあ」

最後宣言は杭奈の心に突き刺さる。寂しいと口に出してはいないが、ここまであからさまな態度では言葉にする必要もない。

「いや、な……静流が帰ってから最後の日までは練習に付き合ってたやらんでもないが……まあ、静流に挑むまで、では最後の日だな」

「あ、そっか」

「でもどの道、お前と一緒にいられるのがあと一週間なのは変わらないからな……俺も半年契約なら、ダークライ・ビリジョン感謝祭まで鍛えてやったのに……もったいない。どちらにせよ悔いが残らないようにやれよな」

「うん、分かってる……」

杭奈は柔軟運動をしながら力強く頷く。相変わらず気合いの入った声を聞いて、ジョンは安心して次のステップに進む事が出来そうだ。

「よし、それじゃあ今日も組み手をやるか……今日で最後だからな、勝つつもりでやれよ?」

「もちろん……そのつもりさ」

柔軟運動を終えた杭奈は深呼吸して気分を落ち着かせる。敵はジョン、戦って勝つのは難しい相手だ。

しかし、死ぬ事はないから思い切りやれる。思い切りやる。それだけを考えるよう、吐く息で余計は思考を全てい払う。

互いに向き合って構えを取り合う。開始の音頭はとらず、この体勢になればどちらが始めても構わない。

まずは杭奈が先手を取り、右足の上段蹴りがジョンの首を狙う。

ジョンは身を屈めてそれを避けて、左貫き手を脇腹に見舞う。

杭奈はそれを右肘で弾いて、左肩からジョンへ体当たりにかかる。ジョンは上半身を後ろに仰け反らせつつ、右肘を杭奈の肩に合わせ、押し返した。

杭奈お得意の超近距離に持ち込まれればジョンとて長くは持たない。今となつては勝つためには自分のやり方を通さねば不可能な域まで杭奈は達しているのだ。

体当たりを弾き返したジョンは、真つ直ぐに左拳を突き出す。左、右と払い除けられながら、ジョンは杭奈の太もも狙いで左足で後ろ回し蹴り。

ジョンの踵を、杭奈は膝ひざを上げて防ぐ。

体の固い場所同士がぶつかり合つて、2人は骨に響く痛みで顔をしかめるが、痛みには強い精神力の特性を持つ杭奈が一瞬速く動いてジョンの胸に右肘を当てる。

肺ごと砕くような打撃にジョンは息をつまらせるが、その痛みをこらえながらジョンは杭奈の右肩を掴み、脇の下の肋骨の側面へ向かつて跳び膝蹴り。

効果は抜群だった。無視できない激痛で右わき腹が砕けるような感覚で右腕が患部を押さえるために反射的に下がってしまう。

そのガードが下がった杭奈の顔に、ジョンの右掌底が迫る。身を屈めて避けると、今度は腕を取られて後ろ手に回される。

後ろ手を取られた杭奈はこれ以上不利な体勢にされる前にジョンへ肘打ちをしかける。

脇腹に当たった杭奈の肘打ちは確かにジョンの握力を弱まらせはしたが、手を離させるには至らない。

ジョンは杭奈を脱臼させないよう注意しながら地面へ押し倒し、うつ伏せの杭奈に草結びを掛ける。

トドメとばかりに、チャージ次第で拳ではどうあがいても出せない威力を叩きだす必殺技、気合い玉を杭奈の前方にある地面へ向かって放つ。

地表が砕け弾け飛ぶ威力を目の当たりにして、まともに当たった時のダメージを想像した杭奈は全身の毛を逆立ててぞっとした。情けで外されたが、絶際に喰らっていたら大怪我していた事だろう。

「勝負あり……だな」

色々危ない所があったと感じながら、ジョンはほっと息をついて杭奈の上から退く。

「やっぱり僕の負けか……」

寝返りをうつて仰向けになった杭奈は大きくため息をついた。

「俺も何度も危ない場面はあった。確実に成長はしている……まあ、本音を言えば勝って欲しくもあるし欲しくなくもある。」

俺が爺さんだったら『年のせいだ』っていいわけも出来るし、純粹に勝って欲しいって思えるんだけれどな……

今はまだ、俺の勝ちたいっていう欲求が強いから勝ちは譲れんさね。でも、いつかはお前が俺に勝つと思う……それが、予想の域を出なくなるのは残念だが……うん、湿っぽくなっても仕方ない。

呼吸を整えたら早速パンチの練習から始めよう。本格的な修行は今日で最後だ……悔いの残らないようにやろうじゃないか」

「うん……頑張ろう」

そうして、2人は夜遅くまで鍛錬を続ける。育て屋に来た当初よりはるかに鋭くなった突きを打ち崩し、遥かに固くなった防御を搔

い潜ろうとするジョンも今となつては必死である。

不覚を貰い、綺麗な当たりを見るたびに、ジョンは痛みと共に満足感を感じて笑みが浮かびそうになるのを抑えるのに苦労する。

全く、俺はこいつの事が好きなんだなあと自覚しながら、だからこそジョンは杭奈の熱意にこたえるために本気で彼の相手をする。

倒れても倒れても向かつて来る杭奈を、自分の体力の限界が来るまで付き合つて、修行の後にはマッサージ。

明日、万全な体調で臨めるように、特に念入りにマッサージを行った。

第1話（後書き）

- * 1 波導ポケモン：あらゆるものが発する波導をキャッチする能力を持ち、他人の考えが読み取れる
- * 2 悪党ポケモン：縄張りに入ってきた相手を集団で叩きのめす。口から酸性の体液を飛ばす
- * 3 いわゆるバツク転
- * 4 直線的な突き。腰の動きが無いため体重はのらないが、出してから当たるまではあらゆる技の中で最速といわれる
- * 5 本当の斧刃脚は踵を当てるが、ルカリオの体ではそれが出来ない
- * 6 タツクルのこと。脚を掴んで体当たりをする事で転ばせる
- * 7 フリーフォールである
- * 8 雄から雌に変えてたあの人の事である
- * 9 格闘タイプの攻撃のこと。同じパンチでも炎を纏えば炎のパンチ、闘気を纏えば気合パンチなどになる。この物語では細分化されている為、炎のパンチもストレート・アップ・フックなどがあったりする
- * 10 武術ポケモン：腕の体毛を鞭のように操って戦う。攻撃は目にもとまらぬ速さ
- * 11 ポケモンでは特殊攻撃と物理攻撃どちらも使うことを指す。ジヨンは見れば分かるが両刀
- * 12 足指の付け根の部分。つま先で蹴ると脱臼や突き指をする
- * 13 指先で攻撃すること。急所を狙うのに適しているが、きちんと指を鍛えてないと仕掛けた方も怪我をする
- * 14 『こころのめ』とはまた違う。心眼ならばアニメでもベイリーフがビシャスのハッサムに使用している

第2話（前書き）

全年齡対象なので16はありません

第2話

13

「杭奈……ここ2ヶ月半。私に全然挑んでこなかったけれど……どれくらい成長したのかしらね？」

「……一応、強くなったつもりだよ」

戦いを前にして、杭奈と静流は二人きりでの会話をする。岩穴の奥にある、オレンジ色の電球がともす頼りない光の元で、2人は岩肌に着いて話をしていた。

この2ヶ月半、互いに自分の師を見つけてそちらとの交流に専念していたせいか、改めて戦うとなると思うところも多いようだ。

そのせいだろうか、ここで交わされる会話の雰囲気は少々しんみりとしている。

字面だけ見れば変わっていない静流のセリフも、今は見下しているような視線や嘲りを含む口調は身を潜め、それなりに杭奈を認めている事が伺える憎まれ口に変わっている。

「2ヶ月間、みっちり練習したから」

「アタイもよ。結構強くなったわよ」

杭奈も、負ける事は覚悟の上。百も承知といった風だが、勝てるかもしれないという希望を含んだ、覇気のある声。

ジョン曰く『静流も強くなって入るだろうけれど、お前ほどの変化はしていないはずだ。しかし、お前の変化はもはや別人レベル……その変化に戸惑っているうちに度肝抜いてやれ』とのこと。

もちろん、静流も杭奈も互いの練習風景を覗く事はあったから成長はしている。

だが、遠くから見守ることと実際に対面することの違いは著しく、本当の所どれほど成長したかは互いに分かっていない。

その未知数を、杭奈は恐れている風に肩をすくめ、静流は楽しみ

にしている風に微笑んでいる。

「この2ヶ月半……楽しかった？」

「いや、辛いことばかりだったけれど……楽しくはないけれど、嬉しかったね」

「なるほど、良い答えじゃない……確かに、男遊びは楽しいけれど、褒められたりして嬉しい事の方が印象に残ってるわぁ……アタイもふー、と溜め息をついて静流は微笑む。

「言われてみて気付くなんてね……アタイ、育て屋ライフを無駄にしてくちゃったかな。もう少し嬉しい出来事を堪能すれば良かったな」

「……こっちはもつと無駄にしてるんだけれど」

むすつとした口調で杭奈は不平を漏らす。まだ、無邪気さゆえの性欲はきちんと尾を引いている。

「いいじゃないの。野性だって同じ、弱い奴は雌を手に入れられないのよ……そのハードルが少し上がったただじゃない？ 漢なら黙って、女をかつさらって行くぐらいの意気込み見せなきゃ」

「……約束覚えてるよね」

「うん、貴方が勝ったらっていうね。アタイはもちろん、格闘タイプの血に誓って約束は守るわよ」

「僕、頑張るから……」

「頑張りなさいよ。ま、どうせ無駄だろうけれど」

「まだそういう事言うー!」

「あのコジョンド……ジョン君ね」

静流は思わせぶりにそこで言葉を切る。杭奈が小さく『何?』と、尋ねると静流は笑う。

「一回だけ闘ったけれど、ほとんど互角。格闘タイプの攻撃に弱い私だけれど、技術の面ではきっと負けていなかったわ。つまりそういうこと……」

ジョン君に一度も勝てないようじゃ、まだまだ……」
「それでも……可能性はある」

「うん、万が一ってことはあるから、全力でやらせてもらう。油断も慢心も一切しないから、そのつもりで挑んできなさい」

今まで挑発するだけであつた静流の激励に内心驚きつつも、ルカリオはそれを素直に受け取りうんと頷く。

「そう言えば、勢いで夜に戦闘を開始って言っちゃったけれどどうする？　今も外は結構薄暗いから夜と言えば夜だけれど……」

「ん……そうね。ハンデって事で、準備が出来たら、いつでも始めて頂戴。ジョンを立会人にでも呼んでくるなりしてさ」

杭奈は考える。夜になつた方が有利に戦えるのか、それとも不利なのか？　しかし、空を見てみれば結局はどちらも同じことだつた。月明かりが明るい。これでは今まで培ってきたすべてを繰り出すのに、小細工は考える必要が無いし、弄しようもない。

「じゃあ、すぐ始めよう」

「分かつたわ。平地エリアの昼食マッチの場所でもいいのよね？」

「う、うん……」

「アタイは其処で先に待っているわ。もう夏も近いから、凍えさせて体が動かないうちに叩くなんて戦法は使えないからね？」

「……そ、そんなのを考えるのは君だけだから。僕は正々堂々やらせてもらうからね」

「うん、そうして。貴方とは長い事顔合わせるのでしようし、お互い納得のいくようにしましょう」

言いながら静流は立ちあがり、上半身だけ振り向かせながらヒラヒラと手を振る。

遅れて立ちあがつた杭奈は、外で毛づくろいをしながら待機しているジョンを呼びに行った。

その頃、ジョンはというと一人で月を見上げていた。

「今日は月が綺麗ですね」

静流と杭奈の会話の最中、一人木の枝に座りながら脚を揺らしていたジョンに話しかける人間の声。

「誰かと思えばジョン君でしたか。どうしました、こんなところに一人佇んで？」

ジョンが振り向いて見ると、そこにいたのはスバルであった。

この育て屋の経営者兼管理人長であるスバルは、結んだ長髪に黒眼鏡という敏腕秘書的な見た目をしていてデスクワークがよく似合う。

その割には、ホームページやメールマガジン用の写真撮影のため外にもよく出るのか、浅黒い小麦色の肌をしていて、とても健康的な見た目である。

暗いために肌の色は伺い知れないが、声色と匂いでスバルだと判断したジョンは、警戒心を解いてキウンキウンと鳴く。

スバルははちらりと顔を上げ、薔薇の装飾がついたUSBポートを咥えて浮遊しているポリゴンZをこつんと指で叩いて指示をする。「おい、ふじこ。今の訳してくれ」

ふじこと呼ばれたポリゴンZが入力し、USBポートを経由して文字が出力された手もとのライブキャスターを覗く。

表示された文字を読みあげて、スバルは笑った。

「ふむ……『マブダチの杭奈が今夜静流とガチバトルんだぜ!! マジ楽しみで全裸待機中(笑)』……元から全裸じゃないですか」
どうでもいい突っ込みをしながらスバルは続きを読みあげる。

「『ま、勝てる気しねーけれどな、今の杭奈なら公開処刑にやならんだろうね、だもんで激しく期待』か……」

なるほど、静流ちゃんとお別れを前に一勝負しようというのですね。よろしければ、私も観戦させてもらってよろしいでしょうか？」

スバルが尋ねてみると、ジョンは頷きながらキウンと鳴く。

「俺は鎌わねーけど邪魔すんなよ。フラッシュ焚いて集中力乱したら、逆に俺がバルスッ!! してやるからな」……

ええ、問題ありませんよ。邪魔にならないように赤外線カメラで録画させてもらいます」

こうして、観戦する者が一人増えた状態で杭奈と静流の決戦は始まるのであった。

日も長くなり、なかなか訪れない夜を間近に控えた平地エリアの一角で、杭奈と静流は向かい合う。

下心から始まった猛トレーニングだが、効果は上々。呼吸を整えて気合いを入れる杭奈の風格は、この育て屋に入る以前の物とは比べ物にならない。

しばらく相手をしていなかった静流はその変化に息を飲んで、驚くと同時に歓喜の笑いがこみ上げる。

「随分と美味しそうな獲物になったわね」

下半身の抜け殻を引き上げながら静流は挑発した。

「獲物じゃないやい！ 真面目に戦ってよ！！」

「……アンタにとっては私が真面目に戦わない方が、勝てる確率が上がって得なのに。全く、熱血馬鹿は損するわよ」

ヒュッ、と息を吐いて静流は一瞬で気合いを込める。深呼吸で気合いを込める杭奈とは違って、発する気合いの差が急激に上昇して杭奈はどきりと心臓を高鳴らせた。

「二人とも気合い十分さね。いつでも始めるよ……俺はここで見るからさ」

ジョンは平地エリアに僅かに生える広葉樹に、スバルと一緒に腰掛ける。スバルはどちらを応援するでもなく黙々とビデオ撮影に没頭していた。

「うん、見てて……ジョン」

振り向かずに杭奈は頷き、ジョンの激励に応える。

「男の友情っていいわね……でも、無駄よ。スバルさんのビデオには、貴方の無様な姿しか映らないわ」

静流は頷きを最後まで見送ってから静流が仕掛けた。静流の第一手は杭奈の顎に向かって突き上げるように掌底のアップercut。単純だが、脳を揺らして一発KOを狙うには最適のえげつない技だ。

静流の掌底は顔に当たる手前で弾かれたが、それで終わりではない。静流は戦闘前に、下半身の抜け殻の中に仕込んでいた砂を握りしめていた。

開戦一番、掌底アップercutをフェイクに行われた砂掛け眼つぶしが杭奈の眼を襲う。

14

杭奈は咄嗟に腕で顎を守り、房を立てて波導を感知し始めた。

だが、静流は波導で周囲を感じる体制が整う前に杭奈の肩を掴み、腹に向かって渾身の跳び膝蹴りを放つ。

もちろん、防御する暇は無かった。体内を鉛が駆け抜けるように重く鈍い感覚。効果は抜群だ。

その感覚が耐えがたい苦痛へと転じる前に、杭奈の意識は途切れ落ちる。

思わず、ジョンがなにかの言葉を呟いた。

「『＼（＾o＾）／（オワタ）』……か。しかし、約2・5秒とは短い戦いだ……」

ライブキャスターに表示された文字を見て、スバルはそんな風に呟いた。

「終わっちゃった……」

傍らで『オワタ』と呟くスバルの横、仰向けに空を仰ぐ杭奈を見てジョンはあつけに取られていた。

「雑魚……相変わらず甘いな。私は本気でやるって言ったのに……」

前のめりに崩れ落ちた杭奈の体を拾い上げ、静流はお暇様抱っこをする。

死んだようにだらんと垂れさがった杭奈の頭は、確認するまでもなく勝負ありと理解させた。

「……正々堂々って言ってなかったっけ？」

これからも伸びて欲しいという親心のために、ジョンは向上心を失わないよう杭奈に負けて欲しかったという本音もある。

そういう本音もあるが、ここまであっさり文字通り秒殺されると言葉も出ない。むしろこれでは向上心を失わないか心配になってきた。

「砂掛けるのって公式技だし……卑怯って人質とるとか弱みを握るとかそういうことじゃなくって？ そんなに言うなら、公式に認められていない技*15、使っちゃっても良いのよ？」

振り向きもせずに静流は言った。

「いや、ごめんなさい……」

「ジョン、貴方の言いたい事はわかってるわ。もう少し、いい試合した方がいいんじゃないかって言いたいのでしょ？ でも、アタイの匂い嗅いでみなよ」

「おま……暗くてよく見えなかったけれど」

鼻を動かしてみれば、風向きのせいか今まで分からなかった血の匂いが漂って来る。

静流の攻撃は跳び膝蹴りしか当たっていないから、杭奈が流血することはない。

可能性があるとするれば、杭奈の攻撃が当たったという事しかあり得ない。それも、とびつきり鋭利な攻撃が。

「肩を掴んだ瞬間に、胸と額に綺麗な裏拳が飛んできてね。ジョン、あまりレディが流血している見るものじゃない……」

悪いけれど、医者に見せるまで顔は見ないでくれるかしら？」

「ひとりで行けるのか？」

「うん、血は派手だけれどなんとかね……そうね、杭奈が心配なら

少し経ったら医務室に来てくれればいいから。」

声だけでにこやかに言つて、静流は杭奈を運んで闇に消えてゆく。彼女のあるいた場所は、例外なく血が滴つて道しるべを形成していた。

途中でスバルが手を貸そうとしても、彼女は断った。変なところでプライドのある女性である。

…

……

……

「で、跳び膝蹴りをまともに喰らつてお前は負けたのさ……これ、プリントアウトしてもらつた写真さね」

ベッドで眼を覚ました杭奈に、勝敗の様子を聞かせてジョンは溜め息をついた。

「……結局、手も足も出なかったか」

まだ痛む腹の鈍い痛みを気にしながら、無様な写真を見て杭奈は肩を落とす。

「でも、お前は中々よくやったと思うぞ。なんせ、静流の額と胸に裏拳を当てて、静流に流血させやがつた……まだ残っている血の匂いはそれだよ」

「いや……結局負けたことには変わらない。僕は……」

「杭奈……」

と、その先を言いかけた杭奈の元に、静流が病室のドアを開けて訪れる。額と胸にまかれた僅かに血がにじんだ彼女の包帯が痛々しかった。

「静流……？ 何、負けた僕を笑いにでも来たの」

卑屈になる杭奈の言葉に、静流は首を振つて否定する。

「ちがうわよ」

微笑んで、静流は杭奈の頬を撫でる。

「頑張ったわね……」

杭奈は眼を背ける。

「どうせ……ダメなんでしょ？」

「うん、約束は約束。どうせ勝たせる気はなかったからね」

あちゃー……とばかりにジョンは頭を押さえて溜め息をつく。

「それに、ごめんね。私本当は主人の古参にすでに私の帰りを待っている彼氏がいるの」

杭奈は絶句した。

「で、育て屋で会って終わりの関係ならまだしも、ずっと生活を共にする貴方とは変な関係になると非常に気まずいのよね……だから、ごめんね。」

あんな決着になっちゃったけれど、貴方が強くなっていたから万が一の確率も勘弁して欲しくて……」

「つ、つまり約束守る気はなかったってわけ？」

「そうじゃなくって、約束を守る必要を無くすことに全力を尽くさざるを得なかっただけ。魅力的な男性と言えば、年上でたくましい人一択なのよね」

ここできるとジョンを見据えて静流は笑う。

「例えばジョンみたいな……」

「いや、俺に振られても反応に困る……いや、杭奈。静流とは何も無かったからな。本当だぞ」

静流の物言いは何かいらぬ誤解をかけられそうな物言いなので、ジョンは必死で否定する。

「……そ、そこまで僕は眼中になかったのか」

「本音言つとね。貴方は、可愛らしい弟としてしか見る事が出来ないの。子供のような、弟のような……私は、貴方を可愛がる事や愛する事は出来ても、恋する事は出来ないし、ときめけない。」

衝動的な性欲で私に固執するよりもね、きつといいお嫁さんが見つかるわよ、あんたなら」

あれ、静流がまともな事を言っているぞ、とジョンは僅かに感心する。

「それだけ強くなれば、きっとあなたを評価してくれる人はいるわよ。だから頑張りなさい……私との約束よ？」

傍から見ているジョンにとっては酷い茶番のような気がしたが、なぜだか杭奈は催眠術にでもかかったようにコクリと頷いてしまう。
「わかった……」

それでいいのかとジョンは杭奈がいきなり哀れになってしまったが、哀れさとはかく色んな疑問は次の瞬間に吹き飛んだ。

静流が私は寝るから、と病室を出る。房を立てて静流の気配が消えるのを待っていたのだらう、そのまま杭奈はしばらく沈黙していた。

「ジョン……」

杭奈がジョンにしがみ付いて泣き出した。

「僕、結局相手にされてなかったよ……」

あらら、と思わずジョンから同情の声が漏れた。

「初恋ってな、叶わない物さね……でも、静流は酷い奴だけれど一理あるよ。お前はお前の相応しい相手を見つければいいさ……」

「そんな事言っても……うう……」

ああ、ダメだこりやとジョンはため息をつく。ここは黙って抱きしめてうんうん頷きながら慰めてやるしか効果がなさそうだ。

「僕は真剣だったって言うのにさあ……その気持ちを簡単に踏みこじるとか酷すぎるよお」

「まあな。ロクな女じゃなかったんだよ、あいつは」

やがて、ジョンは立って歩けるようになった杭奈を寢床へ送ろうとしたが、今日は静流と顔をあわせたくないとの事。

結局、その日の夜、杭奈はジョンの寢床で眠ることになるのだった。

「杭奈、修行始めるぞー」

結局泣き疲れて眠るといふ赤ん坊のような醜態を晒していた杭奈は情眠を貪っている。

「くいなー……起きないな」

死んだように起きない杭奈を可哀想とは思いつつも、早く立ち直らせてやろつという親心で、ジヨンは少々おせっかいなくらいに世話を焼くことに決めていた。

の、だが……ここまで無気力に情眠を貪られていては埒があかない。

意地悪だとは思いながらも、ジヨンは腕から垂れ下がる体毛に水を吸わせて、杭奈の目の近くにポタポタと垂らす。

めんどくさそうに目を開けた杭奈に向かって、ジヨンは朗らかに言ってみせる。

「おはよう、杭奈」

「おはよ……」

寝むそうな杭奈は、起きたはいいがうつむいたまま前を見ようとはしていない。

「くーいーな。どうしたよ、ものすごく無気力だが……ばやばやしとると朝の配給終わっちゃうぞ？」

「食欲がない……」

こんな調子で、杭奈は話にならなかった。

「杭奈……お前、どれだけ下心で生きていたんだよ？ 女も大事だが、もう静流についてはあきらめようぜ？ 諦めが肝心だって」

「だ、だってさあ……もう初体験済ましちゃったジヨンには僕の気持ちはわからないってばあ……愛しい人とやれば相当気持ちいいんでしょ？」

「う、うん……まあな」

痛いところを突かれてジヨンは少々あせって応答する。初恋が成就してしまったジヨンには確かに失恋の気持ちは分らないことであつた。

『諦めが肝心』という言葉に説得力がないといわれれば反論できない。

「つつても、お前に夢を持たせるためにかなり脚色したからなあ……お互いが気遣わなかったり下手だったりすると女だけじゃなく男だつて痛いし……」

「は、はあ……」

「そもそも、自分の体つてのは自分が一番知っているんだ。マツサージは、自分では揉み難い場所を揉んで貰えるからともかくとして、さ。」

俺ら人型の卵グループのポケモンは自分でもあそこはさわり易いだろ？

他人にしてもらふよりも自分でしたほうが気持ちいいなんて事は往々にしてあるものさ」

「そ、そうなの？　じゃあ、ジヨンはその……整体院に居るって言う彼女とはやりたくないの？」

「いや」

首をかしげる杭奈に、ジヨンは否定する。

「そういうわけではない。なんと言つか、気分の問題だな」

「つまり、どういうこと？」

「ふむ……例えば、俺たちに配給される食事は肉や内臓が多いけれど、デンチュラのおやつさんとか、エモンガの兄さんとか、あいつら虫を食うだろう？」

あの虫がな……肉や木の実のようにおいしい味だったとして、食べたいと思う？」

「ちよ、ちよつと気持ち悪いかな……なんていうか、肉の赤い色合いとかが、僕にはそういうのが目にあうというかなんと言つか……」

「ま、そういうことだ。腹が膨れて味がよくつても、見た目が悪か

「つたら気分が悪いだろ？」

「自慰つてのはまあ、あれだ……茶色い固形飼料（市販のポケフーズ）のように味は無難だが、見た目は良くも悪くもない感じさね。セックスもそれと同じ……って言って良いのかは分からないけれどさ、下手な女とやればダストダスに与えられる餌を食べる気分になっちまう。」

「味も悪ければ腹も膨れずしかも腐ってる……っていう最悪な感じのな。」

「ダストダスはアレが好きみたいだし、現実問題変わった趣味を持ったポケモンも居ることは居るが、俺達は違うだろ？ いや、多分ね。」

「静流は……うん、多分真剣に付き合っている奴にはともかくお前には冷たそうだな。」

「セックスをしたとしても、期待を持たせておいて悪かったが……多分、あの女とじゃロクな経験にならんさね」

「はあ……じゃあ、僕が頑張ってきたのはなんだったんだろ？」

「そ、それはアレさね。静流じゃなくなつて、他の女の子をゲットするための強さを手に入れたって事さ。」

「ほら、静流もなんだかんだで強い奴が好きって言っていたし、強いつてのは一種のステータスさ。」

「なんなら、今日の昼に主人が迎えに来るまでの間にもう一度静流に挑んでみたらどうだ？ 勝ってみれば一応約束は守ってくれると思うぞ」

「いや……静流、ここに来る前よりもずっと強くなっていたし、今の僕じゃきつと本当に万が一でしか勝てないよ」

「ここに来た当初の静流と昨夜の静流の違いを思い起こし、ジョンは『ああ』と頷く。」

「確かにあの女、強くなつてたな……俺ももう年だからなあ……ピークを維持するのは出来ても強くはなれねえや」

「強いものに挑むのも経験かもしれないけれど、わざわざ無駄に痛

い思いをすることもないでしょ……」

深くため息をついた杭奈は、酷く精神的に疲弊していた。

「ああ……これは酷い燃え尽き方だなあ……」

元々杭奈には才能はあるのだし、どうにかしてやる気を出してもらいたいとジヨンは思う。しかし、こうまでやる気が無くてはどうにもならなかった。

何かあたらしくやる気を出せるようなものを何か与えてやれればいいのだが。

静流への未練をふっ切るためとはいえ、セックスへの夢を見せてから現実を教えて突き落としてしまったのはまずかったかもしれない……と、ジヨンは反省した。

結局、下心だけでがんばろうと奮起していた杭奈だ。他人に与えられる快感の味をしつてしまえば、また燃料となるかもしれない。

ならば、とジヨンは考える。少しばかり脚色した自分の性体験を事細かに語ってやろう。

「なあ、杭奈」

と、切りだしてジヨンは甘い官能の物語を杭奈へと囁いた。杭奈は人間で言えば15程の年齢である。ここから更に3ヶ月ほどで18ほどまで成長するという、現在は多感な時期だ。

多くの脚色が施されたジヨンの言葉は、杭奈の曖昧な性へのイメージをそれとなく増大させ、そして再び欲求を燃え上がらせるのであった。ジヨン、『お前子供になんて事を教えているんだ』とか言うってはいけない。

「女を勝ち取れば、こう言う事も出来る……でも、今のままじゃ駄目だぞ？ 例え静流がダメだって、この育て屋にはお前と相性のいいポケモンだっているはずだ。その女を手に入れるためには強さは必ず武器になる……分かったな？」

「分かった……」

少しためらいがちに、しかししっかりと頷いて杭奈は言う。

「よし」

と、ジョンは短く簡潔にその様を褒めた。

「僕も、ジョンの気持ちを見事に出来ないし……何より、やっぱり女の子とやってみたくなっちゃった。」

……静流は、まあ、うん。無理かなって……でも、こんな僕だつてまだまだできる事はあるよね」

「よし、その意気だ」

やる気を取り戻してくれた杭奈を見て、ジョンは安心して溜め息をつく。

「今日、静流は主人の元に帰るんだろう？　じゃあ、見送りまでの間、軽く修業をしようか？」

「うん、やろっ……」

17

他人にしてもらったことの快感を教えたその後、午前中は組み手や軽い防御・攻撃の訓練を行い、程良く汗を流した。

そうして時間を潰した午前も終わり、昼食マツチも終わりの時間になった頃、静流と杭奈、ついでに袴とその友達は一足先に静流とお別れになる。

ポケモン受け渡しの受付に訪れた主人は相も変わらず岩か大木のような逞しい体躯の持ち主で、その高身長から見下ろせるのはポケモンだけでない。

このシラモリ育て屋本舗の経営者兼管理人である、スバルも女性にしてはかなりの高身長だが、それすらも見下ろしている。

この主人、大体2m前後はあるだろう。

「よう、皆久しぶり」

ただ、そうやって見下ろしているのは歩いている時だけで、ポケ

モンに話しかける時は子供に対してそうするようにしゃがんで視線を合わせている。

それでも相当な威圧感には変わらないのだが、体操のお兄さんの如く爽やかな笑顔の前には警戒心も薄れるというもの。

そんな主人は、抱擁というストレートな愛情表現をするあたり、本当は主人もさびしかった事が伺える。

ごつごつとした筋肉の塊に抱かると、静流もなんだかんだで嬉しそうに抱き返す。

『年上で、しかも強いって意味ではご主人もその条件に当てはまるけれど……』

『はは、人間に取られるとはまた傑作だな』

人間にはわからない言葉で呟いてしよげる杭奈をジョンは笑う。

『大丈夫よ。主人は好きだけれど、愛人程度にしか見てないわ』

『ああ、ズルズキンって悪タイプだったな』

なんのフロローにもなっていないフロローをして笑う静流に、呆れてジョンは苦笑する。

「静流も杭奈もここに来る前よりたくましくなったし……袴はキルリアに進化したか。

みんな随分成長してまあ……こりゃ、育て屋に預けて正解だったな」

言いながら主人は杭奈の首の後ろを撫でながら鼻に杭奈の額を擦り寄せる愛情表現。袴に対しては自分の胸に顔をうずめさせていた。「それに、友達もできたみたいだが、この子達は？」

主人はちらりと顔を上げてスバルを見ると、彼女は哺乳瓶の装飾がついたUSBポートを咥えて浮遊しているふじこに通訊の指示を下す。

手もとのライブキャスターを覗きながら、表示された文字を読みあげる。

「この子は、特訓で疲れたポケモン達に対してマッサージをして、

整体師の修行に來た子なんです。

けれどどうやら、初日から杭奈君に戦いのノウハウを教えていた
そうで……ふじこによりますと……」

スバルは手もとのライブキャスターを覗き、そこに記された文面
を覗く。

「『こいつはマジでマブダチってゆーの？ 親友だから、マジそ
こんところよろしくよご主人！ いや、マジで（笑）

てゆーか、こいつ無しのこの3ヶ月間とか考えられねーしwww
もしこの育て屋抜けた後にこいつと二度と会えないとかなったら
くあwse d r f t g y ふじこ1p』だそうです。この子達、随分と
いい友達ようですね」

読み上げてスバルは主人へ向かって微笑んだ。肝心の主人は戸惑
っているが。

「あの、もう少しまともな通訳してくれないのか？」

「ポリゴンZに進化させなければもう少しまともだったのですがね。
育て屋のポケモンが弱いと示しがつかないので、強くしようとした
らこうなってしまうました。

こればかりは進化させない方が良かったようですね……申し訳
ありません、オリザさん」

そう言ってスバルはオリザと呼ばれた杭奈達の主人に向かって苦
笑する。

「文面は分かりますし、ポケモンの言葉がおぼろげながらに分かる
だけでも贅沢は言えませんよ……さて」

と、言ってスバルはポケットからアルミのケースを取り出す。

「そういうわけで、このコジョンド……ジョン君っていうのですが、
この子の主人から名刺を預かっておりましてね。

よろしければ、お互いのためにも訪ねてあげて下さいな」

指でつまんで渡されたそれを主人は受け取り、記された情報を一
通り眼を通してから名刺ケースへと放り込む。

「色々俺の子によくしてくれたんだな……ありがとう。ジョン君」
膝立ちの姿勢で頭を下げる主人に、こちらこそとばかりにジョンが頭を下げる。

「杭奈君は、優秀な子ですね」

スバルはジョンと杭奈を見てしみじみと呟く。

「ん？ ああ、確かにこの短期間で随分と強くなったな……」

「ブラックシティにいた頃の私を思い出します。あの頃は私、食欲のために強くなるうとしておりました……この子は、お嫁さんを勝ち取るために。」

つまるところ、性欲のために強くなろうとしたようです……でも、頑張り続ける事はなかなか出来ることではありません。

ジョン君がいたからというのもあるでしょうが……優秀な子ですよ」

「ふ、不純な目的だな……男は強くなりたから強くなるもんだ。本能的なものさ」

主人のオリザは、鋼のような力瘤を見せてそんな事をのたまった。「その強くなるための本能は——かつて、群れの中で一番強い者だけが雌とまぐわる事が許された時代の名残ですよ。」

今は、強くなくても生存能力の高さは測れますから、賢いとか、場合によっては歌が上手いとか。

そういった時代の流れのおかげで強さの意味が薄くなるだけで……強くなる目的というのは、本来不純であるべきですよ」

「ふむ……そうか。まあ、そう言われるとそうかもしれないな……ううん」

「何が言いたいかと申しますと、もしも機会があればこの子にお嫁さんを宛がってやってくださいという事です。」

そうしてあげればきっと、杭奈君は今まで以上に強くなりますよ……女を手に入れるために頑張る意味を失ったら、次は女を守るためという風に」

お嫁さん、という言葉に杭奈は目を輝かせる。

「そうしたいところなのだが」

杭奈が俯き顔を横に振った。

「ジムの開設のために予算がな……この子達を預けたせいでしばらくは結構カツカツなんだ。なるだけ、節約したくってな……」

教え子たちの月謝はともかく、リーグからの補助金が降りるまではトレーニング用の機材のローンがきついものでな……これ以上借金もしたくないのだ」

「そうですね。お見合いサービスは最低2万。子育てについては、育て屋孵化で2万から。」

卵は自宅孵化でしたら無料から取り扱っておりますので、詳しくこちらのパンフレットかホームページをご参照くださいませ……とすみません。

この子を褒めるだけのつもりが、つつい商売に目がいつてしまいました……」

恥ずかしそうに苦笑しながら、スバルは頭を下げる。

「いや、構わないよ。この子を育てる参考にしてみ……さて」

オリザはさらに視点を下げて雄のキルリア、袴を見る。

「袴の友達はゾロアか。この子の名前はなんて言っただ？」

「ペテンちゃんですよ。最近になって、よく昼食マッチ・ダブルバトルを荒らしているようで、やるたびにかなり面白い試合をしているのですよ……」

二人はとつても仲がよくって……そのせいか、お見合いしようとしても割って入る隙が無いくらいで、いつもお流れになっちゃうんです。

それについての詳しくは、ホームページにも名勝負として、昼食マッチダブルの部に載せておりますのでご参照くださいませ。

ちなみに、袴君にとってのペテンちゃんの評価は……『最高のパートナーって奴だぜ!! ペテンは俺の嫁!!』だそうです……

どこまでふじこの翻訳を信用してよろしいのか分かりませんが、信頼し合っている事は確かなようです。

そのことを報告したくてわざわざこうして管理棟に呼んでくるくらいですからね」

「そうか……俺の袴と一緒に存分に強くなってくれよな」

ゾロアの頭を優しく撫でると、主人は立ちあがる。

「静流。それじゃ、俺達の家に戻るう」

主人は静流のモヒカンを指で梳くようにしながら彼女をモンスターボールの中にしまい、スバルと眼を合わせる。

「静流がお世話になりました。引き続き、杭奈と袴をよろしく願います」

「ええ、シラモリ育て屋本舗の名に掛けて、責任を以って預からせていただきます」

「それでは、元気だな。杭奈、袴。もう少し経営実績があれば、公式ジムに認定されてジムバッジ検定も行えるようになる……そうすりゃ補助金も手に入る。

その頃までにはお前はもっと一人前になっているんだぞ……杭奈。期待しているからな」

杭奈は主人へ向かってくうんと切なげに鳴いて手を振った。主人は振り向かず、手を振って、背中を「強くなれよ」と杭奈へ語っていた。

「ご利用ありがとうございました、オリザ様。これからも、我がシラモリ育て屋本舗のご利用をお願いします」

丁寧に頭を下げて、スバルは杭奈達の主人、オリザを見送る。

両開きのドアを抜けて静流と共に主人の姿が消えると、スバルは杭奈の肩を叩いて優しく語りかける。

「オリザさんの言うとおり、この育て屋に入った時よりも格段に強くなっておりますね。

昨日はボロ負けでしたが、私はきちんと貴方の成長を感じました

よ……」

杭奈は首を振って否定し、鳴き声を上げる。

「『負けたら意味ねーしww』……ふふん、そういうな。両生動物のクソをかき集めて出来た聳^{そび}え建つクソの塔ほどの価値もなかったお前が、

寄生して生きるしか能がない害悪の権化たる卑しいダニを卒業するくらいには成長したものだと思つたぞ」

杭奈はスバルの口調が豹変したことに驚き絶句する。

「何せ、アレだ。もしも静流があの時、跳び膝蹴りではなく頭突きを放っていたら……君は頭突きを防御しつつ、胸にまで攻撃を与えたことになる。」

しかも、頭から出る血の量は半端ではない。持久戦に持ち込めば恐らくは視界に影響を及ぼし、君は隙を見つけて勝ちをもぎ取っていただろう……

まあ、確かに頭突きやもろ刃の頭突きは君には効果が今一つだけに、それを放つてくる可能性は極端に低いと言えたらう。

もしも、格闘タイプで頭突きを放てる技があったらな。あのビッチに鉛の弾丸ぶち込んで公衆の面前で股開かせることくらいは……と、すまん。地が出ていた……

ここはホワイトフォレストだというのにブラックシティの私になつてどうしますのやら……」

コホンツと咳払いをしてスバルは続ける。

「ようするに、貴方も全く勝つ可能性が無かつたわけではないというわけですよ……読みあいにさえ勝てれば、きっと杭奈君も……」

ですから、めげることなくこれからがんばってください。昨日の夜から、私は貴方を応援しておりますよ」

そう言い残して、スバルは杭奈の返答も聞かずにデスクワークへと戻って行った。

「ふう……」

スバルも去って、この場に人間がいなくなると、何だか虚無感がこみ上げて杭奈は深くため息をついて肩を落とす。

まだ燃え尽き症状の残っている杭奈に対し、ジョンはおもむろに彼の肩を叩き、微笑みかける。

「杭奈。修行を再開しようぜ。俺がいられる時間も、あと僅かなんだ……悔いの残らないように、寸暇を惜しんで修行に励もう……スバルさんだって……何だか物凄い一面を垣間見た気がするけれど、応援してくれたじゃないか」

杭奈の手を取り、ジョンは外へと歩いて行く。残された数日も充実したものにするため、ジョンはまだ教えていない技術を少しでも杭奈に伝えようと。

杭奈は教えられていない技術をモノにしようと、それぞれ奮闘するのであった。

数日後に訪れた別れは、いつでも会える距離だからと、互いに涙を流す事もなくそれなりにあっさりと終わったのである。

次に会う時は、ダークライ・ビリジオン感謝祭だと約束して。ジョンの育て屋での3ヶ月は幕を閉じた。

第2話（後書き）

* 15 ルカリオの波導の嵐等

第3話

18

ジョンと杭奈がダークライ・ビリジオン感謝祭で会おうと約束して数日後。

これまで専属の教官代わりであったジョンがいなくなっただけ、杭奈は様々なエリアに赴いては色んな教官に教えを請う事を続けている。

もともと頼りにしているのは、やはり格闘タイプの教官であるズルズキンのバカラ教官であり、他のどの教官よりも多くの時間教えを請うている。

元四天王のポケモンという肩書きにも偽りが無く、ポーカーという名の雌のズルズキンに役目を奪われた今でもその強さは健在だ。その他スバル自らが育てたエルフーンのケセラン教官やアイアントのユウキ教官、シビルドンのうな井教官など、多くの優秀な教官の元で指導を受けてはいる。

だが、杭奈にはやはりジョンがいないとモチベーションの維持は難しかった。

今は後輩の指導と称して、息抜きがてら袴と修行半分戯れ半分の指導を行う時間が多く、徐々に強くなっただけはいるもののかつての勢いは衰えてしまった。

モチベーションが維持できているのは、なんだかんだであの日のジョンの舌使いの快感が体に刻まれているからなのだが。

しかしながら、それをしてくれる女性を得られるのはいつになる事やら——と思うとやるせなかった。

現在、時刻は昼時。ジョンに促されてから毎日欠かさず行ってい

た昼食マッチの時間帯である。

強くなっても強くなっても、まだまだ先の見えない育て屋の天辺。バトルサブウェイで頂点を目指しているトレーナーのポケモンは、静流や教官でさえ手こずる者が多く、特に強い子を産ませようという目的で預けられる親は、2軍扱いでさえとんでもない強さを持っている者も少なくない。

例えば、マジックガード特性を持たないが故にレギュラー入りを逃したランクルスや、型違いの子を求めて預けに出されたドレディアなど。

今日杭奈が挑むゴルージュも、特性が不器用であるが故にレギュラー入りを逃した子。

「木の実の等価交換？ あ、ああいいけど……相変わらず、だなお前」

杭奈が勝負を挑むには、相性的には厳しい物があるポケモンである。

「お願いします」

しかし、この無謀とも言える勝負を杭奈はあえて挑むのだ。

「わ、わかった。情けは掛けなくていいんだな？」

「そうじゃなくっちゃ意味が無いから」

なぜか？ それは、下がっていくモチベーションに危機感を感じた杭奈は、このままではジョーンに悪いと思って最近は不利な条件で昼食マッチに挑むようになったのだ。

その方が、毎回毎回負けないように必死で強くなる方法を考える意欲が湧くから——と、逆境でこそ成長できるという思考である。

この日の相手はゴルージュ。いまや定番となった巨大ロボットアニメはこのポケモン無しには成立しなかったと言わしめるほど、それっぽい造形のポケモンである。

地面が固く圧縮されたボディは陶器がおよそ及ぶべくもないほど強固にして、しかも柔軟。

強靱な体に加え、この育て屋一の2・8mという体躯を誇るその

巨体は、見る者を圧倒する。

怪力・剛健・重厚という岩タイプか鋼タイプのような見た目を持ちつため一見して格闘タイプならば圧倒できそうだが、ゴルグはこう見えてゴーストタイプであり、岩タイプではなく地面タイプだ。格闘タイプの攻撃は通じない上に地面タイプまで兼ねている。

ゴルグが、杭奈に対して等価交換をためらうのも、自分が有利じゃないかと気兼ねしているというわけだ。

無論、ハンデを与えれば簡単に勝ってしまうという自信があることも伺わせる。

しかし、ためらいがちなのは一瞬で、木の実への欲求で腹は決まったようである。

「なら、行くぞ」

ゴルグが一步踏み出す。それだけで発生した小規模な地響きを、杭奈は小刻のステップでかわす。

接近したままメタルクローを突き出そうとするとゴルグは転んだ風に見えるほど不格好に倒れ込む。

格好悪く見えて、ゴルグの巨体から放たれるこの抑え込みは中々えげつない。

地震を避けて一瞬だけ宙に浮いていた杭奈は地面に足が着いた瞬間に避けなければ押さえつけられてしまう。

小さなルカリオがゴルグに押さえつけられてしまえば脱出は困難だろう。

それだけは何としても避けたい杭奈は、つま先が付いた刹那の瞬間に足指でメタルクロー。

マツギヨの時と違って立ったままそれをスパイクに出来るように成長させた歩法で、通常ではありえないか速度を以って横に避ける。耳をゴルグの胸が掠めながらもなんとか脱出した杭奈は、そのまま振り向かずに一目散に走って距離を取りながら、悪の波導をチャージ。

振り向きざまにフルチャージの悪の波導をゴルグへ放った。

帯状の波導がゴルグに迫るが、ゴルグはバチバチと音を立てながら、巨大な右手でそれを防ぐ。

如何に物理型のルカリオの攻撃とはいえそんな受け止め方をすればしばらくは腕が痛くて痺れてまともに物も握れなくなるのが普通だ。

が、ゴルグは起きあがりざま右手に握りしめた土に体液を混ぜて泥にし、それをブン投げる。このポケモン、痛みを感じていないのか。

無造作に投げられたように見えて、計ったように正確なその泥。

しかも大きな塊として投げられたそれは空気抵抗で弾け、避けたと思って予想外の位置にヒットする。

瞬間、杭奈が眼をつむる。静流との戦いの経験から、眼をつむる動きとは連動して房を立て敵から距離を取るように何度も反復運動をしていた。

今回はその成果が出て、杭奈は練習通りの動きでゴルグから距離を取った。

杭奈は完全に地震の射程外だが、ゴルグは地面を強烈に踏みつけひび割れを起こす。同時に、杭奈は泥を拭いながらメタルクローを腕に出して接近。

ゴルグは地震によって碎けた地面の一欠片をサイコキネシスで掴み取って、きりもみ一回転。

ハンマー投げの如く体を傾けながら投げたそれは、巨大な塊でありながら空気を切り裂く轟音を奏でる。

まともに狙いを付けられそうにない投げ方だというのに、例によって例の如く正確に飛ぶその攻撃を杭奈は避ける。

油断していたわけではないが、予想を越えて速い。杭奈はまともに食らう事は避けたものの、掠ったというよりはえぐったというのが正しいほど強かに左肩口へヒットする。

インパクトの瞬間に下半身が浮き上がり、独楽のように回転しながら杭奈はうつ伏せに地面に落ちる。

そこに、ゴルグのハエ叩きのようなパーの手での右手でのアームハンマーが杭奈の顔面に迫る。

せめてもの抵抗に寝返りをうつて、顔の前で腕を構える。腕の棘をお見舞いしてやったが、効果が抜群なのは杭奈の方だ。

しかも、ゴルグはそれによって出来た傷も気にせず、今度は左手で腹にハエ叩き。

一発目ですでに息をしなくなるくらいのダメージを胸に負った杭奈に、この追撃は効いた。

トドメとばかりに、杭奈は睾丸を握られる。握りつぶされたりでもすれば男として非常にまずいことになる場所を握られて、思わず杭奈は叫んだ。

「む、無理無理無理！！ 無理だよ無理！！ 降参するからそれだけは許して！！」

結局、ゴルグの勝ちでこの勝負終了である。

19

「や、袴。今日も一緒に食べていいかな？」

杭奈は木陰で食事途中である袴という名のキルリアの元に、食料を入れた籠を持ちより、腰をかがめて尋ねた。

二人は昼食マッチのダブルバトルに盛大に勝利してきたようだ。

二人とも木の実を3個も持っている事がこの育て屋で意味するのは、戦闘になれた手練であるということ。

無論、未進化である彼らの対戦相手は杭奈が戦っている相手と比べれば格下ではあるが、同年代の中では2回の連戦で2回とも勝利を収める実力であることを意味しているのだから馬鹿には出来まい。

「いいですけど、兄さん今日も負けたんですね？ 隠していても落胆の感情が手に取るようにわかりますよ」

負けた事を口にださないよう、にこやかに話しかけたはいい物の、感情ダダ漏れで無防備な杭奈はキルリアである袴に対して嘘を付けない。

袴とて、『自分達より弱い』と言っているわけではないのだが、杭奈が馬鹿にされているのは間違いない。

少年漫画で言うところの、野球『馬鹿』のように、捉えようによつては褒め言葉にならなくもないのだが、結局の所馬鹿にされるとあれば複雑な気分だ。

「相変わらず、勝てない敵に挑むのやめなよお。オイラ達みたいに勝てる相手に挑めばいいのに……頭わるーい」
「ですね」

袴の指摘に追従して、この育て屋で友達となったゾロアのペテンが追従して笑うので、杭奈はいたたまれない気持ちとなってしまうた。

「そういうのは、表だって言わないもんでしょ、袴？」
苦笑しながら杭奈は袴に諭す。

「そうでしょうけれど、それなら僕が木の実を食べているのを見て、『欲しい』とか『食べたい』とか、そういう感情ダダ漏れにするのはどうかと思いますよ？ これは僕のですから、あげませんからね」

本心をばバラされるのはもはや慣れたものだが、袴の発言に対しては未だに恥ずかしい気分で杭奈は肩をすくめる。

「オイラのも上げないよ」
ペテンにまでからかわれて、なんだかなあと杭奈は困った顔が張り付いて離れなかった。

「強くなるための試練だと思っているんだから、貰わないよ。っていうかね、袴。僕もプライドがあるから」

「兄さんのそういう所、好きですよ」

袴はにやりと笑う。キルリアだつていうのに純粹無垢な笑顔ではなく、なんとなく腹黒い笑顔である。

もつと構ってやればよかったかなあと、杭奈は今更ながらに後悔していた。

「楽らくで」

『好きですよ』で止めておけばいいのに、『楽で』なんて言葉を付けくわえて袴は笑う。

3ヶ月間殆ど袴の事を放りっぱなしだった期間に、袴は先日育て屋を去って行ったハハコモリのお姉さんに相当可愛がられたようである。

明るい感情を好みとするラルトス・キルリアと進化してきた袴はその期間の間に大人に喜ばれる振る舞いを完全にマスターしてしまったらしい。

その感情を角で察知することで、角に快感を感じるだけならば良いのだが、ついでに木の実やら甘い蜜やらを貰っており、それを続けていく内にこの性格も形成されてしまったようだ。

その性格の形成にペテンの影響も混じっているのは言うまでもないことだ。

彼女は悪狐と呼ばれるだけあつて中々ずるがしこい所があり、この2匹がお揃いなのは首に下げた変わらないの石だけでなく腹黒い笑顔もだというのが性質が悪い。

なんで自分はこんな子供に馬鹿にされているのだろうと若干落ち込みつつ、杭奈は籠に入れている食料を食べ始める。

「楽らくってどういう意味だよ、袴？」

「ん、慰める必要もないというところでしょうか。負けたって勝手に立ち直ってくれますし」

指を一本立てるという気取ったポーズをとりながら、どや顔で袴は言う。

「あのね……年上にそういう態度とっていると、ジムでは袋叩きに合うよ？」

気をつけないと、その真っ白い肌が真っ赤になるまでひっぱたかれて、新手の色違いになっちゃうよ」

「うん、子供騙しな脅しですね」

袴の突っ込みは全くその通りであるが、それにしただけ言い方と
いうものがある。

「ありやいや、これはお厳しい」

と、対する杭奈も何度目かわからない苦笑をするのであった。

とまあ、袴は大人を少々舐めたような態度を取っているような節があるが、一応袴はこれで杭奈を労わっているつもりである。

叩けば叩くほど粘り強くなる鋼のように、杭奈は少々斜めに構えた態度で叩いてあげた方が元氣を取り戻してくれるのを、角が知っているのだ。

その証拠か、今日も木の実を食べ損ねて沈んでいた杭奈の気分も、食事が終わるころには袴の憎たらしさと可愛らしさを受け、大分復活するのであった。

育て屋はこんな様子で平和に時を刻んでいく。育て屋では喧嘩もあるし、涙もあるけれど、やっぱり似合うのは皆の笑顔なのだ。

今日はいつもと変わらぬ日々であり、比較的多くの笑顔があふれる場所——になればよかったのだが。

「あ、ウルガモス……いつも森林エリアでオノノクスと一緒にいる人とは違うな……」

木陰で昼食を食べながらふと袴が立ちあがり、木陰から出て空を見上げると、ウルガモスとワタツコが優雅に空を舞っていた。

「おや、本当だ。よく気がついたな袴？」

「あ、本当だ……」

杭奈は房を立ててそれを感じ、ペテンは袴と同じく木陰から出てそれを覗いて確認した。

「最近、何だか嫌な気分というか、胸騒ぎがするんです。なんとい

うか、最近の新入りというのですか……。

池沼エリアのモロバレルとか、洞窟エリアのパラセクトとか……
悪意のようなものを感じて……

で、最近悪意に敏感になっていたのですが……あのウルガモスからも似たような何かを感じます……それが、森林エリアのウルガモスとの違いといいましょるか……」

不快そうに角を撫でながら、袴は溜め息をつく。

「その、悪意つてのはなんなんだ？」

「説明し辛いんですが……悪意は悪意なんです。なんというか、その……角を体の内側から掻き毟られるような何とも言えないこの感覚がですね……あれ、何これ？」

「どしたの、袴？」

「どうしたの、袴君」

何か、とてつもない物を感じ取ってしまったのか、袴は角を触りながら表情を変えた。

「いや、まわりからそこらじゅうです……イライラしてます。みんな……特に、森林エリア。ギスギスしてる……というか、殺しあいでも行われているのでしょうか、この感情……？」

「は、はあ……そう」

杭奈はピンとこないために生返事を返す。しかし、袴は苦しげに首を横に振った。

「あの、結構……やばい感じですので、流しちゃいけない感じなんです……」

袴の目は不安そうに揺れていた。確かに、ただ事ではないようである。

「そ、そんなに？　なら……少し気になるし、様子を見に行った方がいいかな？」

杭奈が木陰から出て、森林エリアへと歩き出そうとしたのだが、その杭奈の尻尾を袴がつまむ。

「ごめん……何だか嫌な予感がします。杭奈兄さん、一緒にいてく

ださい……少し怖いんです」

すでに汗ばんだ袴の指から湿り気を感じて、杭奈はただ事ではないと感じた。一緒にいてあげた方がいいかもしれない。

「あ、うん……分かった。えっとじゃあ……袴。一緒に見に行くのはどう？」

「分かりました……」

「わ、オイラもいく。何やらやばそうな気配だし……」

数十秒の間に弱気になった袴を励ますように、ペテンも同行を決める。

とは言え、彼女も少々何か不穏な物を感じ取ったらしく、その表情は頼りなく見えた。杭奈は、房を立てれば周囲の状況が分かる。

しかし、この二人のように弱気になつてはいけなと考えて、周囲を探ると弱気になりそうな杭奈は、波導を感知することなく二人の前を歩いた。

20

「……ダメ。これ以上は無理、です」

森林エリアに向かう途中、袴は杭奈の尻尾を引つ張りながら、恐れを湛えた視線で首を振る。

「情けないな、袴は。すぐ戻ってくるから、そこで待ってて」

いらだたしげに杭奈は言って走り出そうとする。

「ちよつと、情けないなんてそんな言い方は酷いじゃない!? 袴君に謝りなさいよ!!」

が、それに後ろ髪を引く形でペテンの声が追いかけた。

「なんだと? 勝手に袴と一緒にいてって言ったんだろが!!」

「やめて、二人とも……イライラしないで……」

顔を悪くしている袴の言葉にはっとして、二人は言い争いを止

めた。

「ご、ごめん……」

「オイラこそ……何か変だった」

お互いに謝りあったところで、まだ何か釈然とした気持ちを抱えつつも杭奈は冷静になろうと努めて深呼吸をする。

何か変な匂い。蟲と、カビの匂い。

「そうだ、波導で周囲の様子を感じれば」

もう、一瞬たりとも袴から離れたらかわいそうだと思った杭奈は、直接見るとかまどろっこしい事をせずに房を立てる。

「これは……ポケモンがみんな争ってる。なんだこれ、まるで殺し合いじゃないか……憎しみ合って、いがみ合って。止めさせなきゃ……」

走り出そうとした杭奈の事を、袴はサイコネシスで引きとめる。

「まって、兄さん。それよりも……怪しいのはあのウルガモスとワタッコですよ……平地エリアの方では、まだこんな喧嘩が起こっていないみたいですから、何か原因があるはずですよ。」

その原因がああウルガモスにある事は……その、僕の勘だと、確定的で。だから、杭奈兄さん……管理棟に行って、とりあえずスバルさんに相談しましょう」

「えと……」

袴に諭された杭奈は身を二つに裂かれる思いで、森林エリアと管理棟の方向を交互に見る。

しかし、自分達のイライラも何か妙だと感じ、袴の言うように何か源信があるのだらう。管理棟へ行くという意見も最もだと杭奈は納得する。

「分かった、スバルさんに相談しよう」

袴は小さくコクリと頷く。ただならない危機感を感じた3人は、全速力で管理等へと向かって行くのであった。

途中、すれ違ったポケモン達も念のため森林エリアから離れて管理棟近くへ集合するように呼び掛けつつ、3人は管理棟までたどり着いた。

食料の発注の仕事の最中だったスバルは、あら、何かしら？ と、気楽な様子で、電話をしながら振り向いた。

その次の瞬間には、スバルが杭奈達のただならない雰囲気を感じた。

「申し訳ありません…… ちょっとポケモン達が緊急事態のようです…… 連絡は後ほど」

言葉通り緊急事態だと察知した彼女は、即座に電話をいったん中止して杭奈達の話聞き始めた。

無論のこと、ポケモン達の言葉を直接理解する術の無いスバルは、フルートの意匠を施したUSBポートを咥えたポリゴンZ、ふじこを通して、だが。

「『悪意を持ったフカガモスとオワタツコが来たと思ったら、森林エリアの奴ら顔面クリームガンwww 蝶だけに超やべーwww あ、蛾だっけかwww」

とにかく、何がやばいってマジヤヴァイ。みんな殺し合いなんかしちゃってチョーウケる!!」……か。

全く相変わらずの通訳精度ですが……今はどうでもいい事ですか。しかし、どう言うことでしょうかこれは？

他に何か変わった事に気がついたことはありませんか、袴君？」

ポリゴンZのふざけた翻訳に頭を痛めながら、更なる質問を袴に投げかける。

「『あのモロバレルとかパラセクトとかいうキノコヤロー、超怪しくね？ てゆーかマジキメwww 角が不愉快なんだよ近寄るんじやねえって感じwww」

マジキチ、マジキモ、マジキノ」……なるほど。モロバレルに、ウルガモス……それにワタツコもか。 ん、待てよ？ この3匹の

ポケモン……」

何か思い当たる事があるのか、スバルはライブキャスターのポケモン図鑑アプリを開いて何かを確認する

「ああ、やっぱりだ……そいつら、怒りの粉*1って技を使ってやがる。ブラックシテイの奴らか？ 私の育て屋で何のつもりだ？ いや、目的などどうでもいいか」

スバルはライブキャスターのトランシーバーアプリ起動した。

「……おい、お前ら。応答しろ……いや、孵化場はどうでもいい。それよりも大事なものは……ああ、そうだ。各エリアの管理人が誰も応答しなくてな……ああ、そうだ。

サイファーとタリズマンを連れて管理棟に来てくれ。卵も忘れるな……」

トランシーバー機能を使って他の職員と話すつもりだったが、応答が来たのは孵化作業場のみで、他の場所はいつまでたつても返信が来ない。

「くそ、エリアの奴らは応答しない！！ 考えてみれば当然か……育て屋がこいつら（杭奈達）の言うような事態になったなら連絡しないはずがない……

妨害電波でもないな、だとしたら孵化作業場とも通信できないはずだし。チイツ……そうだ、ケーブルなら」

独り言で毒づきながら、スバルは分厚い扉に阻まれた放送室へと赴く。乱暴に扉を閉めながら、すぐさまスバルは放送を始めた。

この園内放送は、ケーブルというレトロな方法で音声伝えるため、阻まれる事が無い

「え……育て屋園内放送を開始します。ただいま、この育て屋は非常に危機的な状況にあります。何者かが催眠術のようなものを使い、園内にいるポケモン達を喧嘩するよう仕向けているようです。

繰り返します。園内にいるポケモン達は何者かの手により怒りを刺激され……喧嘩をするように仕向けられています。その怒りはま

やかしです、ここは耐えてください。

全ポケモンはただちに喧嘩を止め、管理棟へ集合して下さい。さもなければ、そのポケモンの明日は全食抜きとさせていただきます。繰り返します。全ポケモンはただちに喧嘩を止め、管理棟へ集合して下さい。さもなければ、そのポケモンの明日は全食抜きとさせていただきます」

非情なまでの宣告。一日の絶食くらい軽く耐えるポケモンなどいくらでもいるが、それにしあって大胆な宣言である。

しかし、それよりも重要なのは、このイライラの原因が何者かの差し金であるという事実を告げた事であった。

憎み合って闘っているポケモン達も内心杭奈達のように、『何故こんなにイライラするんだ?』と、自分の怒りに疑問を持っている者達はあるにはいる。

自分の感情が偽りだと認識する事で、興奮したポケモン達もある程度だが落ち着きを取り戻すことを期待したのだが果たして有効なのかどうかは分からない。

「管理棟付近のポケモンに被害は出ておりません。故に、管理棟のあたりは比較的安全であると思われます。

繰り返します……管理棟付近のポケモンには被害が出ておりません。各自、管理棟に集まり安全を確保してください。繰り返します

――

園内放送を終えると、この数分の間に随分とやつれて見えたスバルが放送室から出る。

「どうするべきか……いや……おい、袴。ちょっと冷蔵庫まで付き合え。それと杭奈君は癒しの波導を使える?」

袴、杭奈ともに頷いた。

「よし、ならば治療室で待機していてくれ。怪我したポケモンがたくさん来るだろうからな……あとは……教官たちを園内の見張りに……いや、流石に危険か。

教官も管理棟に待機した方がよさそうだ……うん、とりあえず今はこれでなんとかするっきゃないようだな……行くぞ、袴」
一通り命令を下すと、スバルは袴を連れて走り出す。その手に握られたライブキャスターは、警察へとつながるダイヤルを刻んでいた。

2
1

「あの、さっきの放送なんですが……」

管理棟の一角にある治療室。杭奈を待ちかまえていたタブンネが不安そうな面持ちをしていた。

待機している人間の女性の看護師も、タブンネの様子が慌ただしいことには気づいているようだ。

「ああ、タブンネさん。あれは何と言うのか……ちょっと事情を説明し辛いのですが」

「理由とか事情はどうでもいいんです。やばい事は放送の内容から大体わかりました。で、でもですね。その肝心の放送が、管理棟近くにしか流れていないんですよ。」

特定エリアに向けての放送を流す事はよくありますが、あれって全エリアに流すべき内容ですよ？ 森林エリアがどうか、言っていましたし

ほら、私って耳がいいから分かるんですけど……スピーカーが壊れているのかケーブルや電線が切れているのか、この付近でしか放送されていませんでした」

「なんだって……？」

「言った通りですよ。この育て屋は広いから、何か声は聞こえるかもしれませんが……みなさん内容まで聞きとれるかどうか。」

特定のエリアに向けての放送だと思うと、聞き流す事もあつて頭に入らないと思いますし……」

「なんてこった……スバルさんに伝えてこなきゃ……いや、テレパシーも袴となら……早く済むかも」

杭奈は房を立て、自身の意思を遠くまで飛ばす。杭奈のテレパシーは精度も出力も悪く、訓練していない人間に対して行えるほどの力はないが、発信相手は親しい間柄同士。

しかも受信先がエスパークタイプである袴ならば、と望みをかけて杭奈はテレパシーを飛ばした。

> 袴！！ よく聞いて。何らかのトラブルで、放送はこの管理棟付近の平地エリアにしか通じていないそうだ。

だから、森林エリアとかにいるポケモンは放送を聞いていない可能性があるんだ。それをスバルさんに伝えて！！<

まだ、杭奈達とスバル達が分かれて1分も経っていない。だが、1秒さえ惜しいと踏んだ杭奈の判断は、果たして賢明だったのかどうか。

冷蔵庫で、ラムの実やオレンの実といった治療用の木の実を取りに行っていた袴は杭奈のテレパシーを受信して、すぐにその概要をスバルに伝える。

「くっ……私の育て屋を好き勝手やりやがって。なんだってんだブラックシティの奴らめ……生かしては返さんぞ。」

捕まえたら汚ねえ腸にまずい肉詰めて、血はケチャップ代わりにホットドッグにぶっかけて石灰捏ねたパン焼いてヤブクロンの餌にやらあ！！」

『ブラックシティの奴らか？』から、『ブラックシティの奴らめ』と、何故か断定する形になってスバルは吼えるように物騒な事を言いながら、冷蔵庫の外に走り出す。

「袴！！ お前は引き続き、治療室近くに木の実を運んでくれ……私はず」

言いながら、スバルはモンスターボールからサザンドラを繰り出した。

「育て屋全体に大声で直接呼びかける！！ このままじゃ、多分この育て屋そのものが危ない。糞つたれめ！！ もし捕まえたら、痔になってももう一つの穴でクソぶちまけられるようにケツの穴をもう一つプレゼントしてやる」

女性とは思えない汚い言葉を口にしながら、スバルはサザンドラを駆って空へと飛んでいった。

「トリニティ！！ 喧嘩をやめて管理棟に集まらないと、龍星群ぶち込んでやる」って大声で叫べ！！ いいな！？」

ガウツと、トリニティと呼ばれたサザンドラは頷いた。スバルが耳を塞ぎ、轟音に備えたことを確認すると、トリニティはハイパーボイスでスバルの命令通りに言葉を伝える。

「喧嘩を止めて、管理棟へ集合しろ！！ さもないと、龍星群ぶつ放すぞ！！」

森林エリアのポケモン達が一斉に氷ついた。皆、この育て屋の最強戦力の一角であるトリニティの強さを知っているのだ、そんじょそこいらのポケモンが逆らえるはずもないのだ。

だが、この事態は恐らく森林エリアだけではないだろう。杭奈達がいいた場所は森林エリアに最も近い場所であつたからこそ、袴が森林エリアに注目したというだけで。

事実、ライブキャスターを持った職員達は砂地、洞窟、池沼エリアと、全てにおいて応答が無かつた。

という事はそれらのエリアでも同様に殺し合いのような喧嘩が行われている可能性がある。この事態、思ったよりもやばい方向に進んでいる。

果たして、その勘は当たっていた。この育て屋の平地エリア以外は、全てのエリアが阿鼻叫喚の地獄のような光景が繰り広げられて

いる。

ポケモンが謎の集団に捕らえられていた。その異常事態を知らせようにも、他の地方から来たと思われるソーナンスや、黒い眼差しを使っているミルホッグ等、数々のポケモンが木々の隙間から見てとれる。

それはつまり、声をかけたところで、今は誰もこの森から脱出できないということだ。機動力の高い飛行ポケモンもこうなってしまうえば型なしであった。

もはやスバルに出来ることと言えば、直接降りてポケモン達を助けるしかない。スバルは燃えあがる木々の隙間から真っ先にウルガモスとオノノクスの二人組を見つける。

このオノノクスとウルガモスは、弱く幼いポケモン達を護っていたのが見て取れた。そもそも主人とは長い付き合いだ、そのポケモンを見間違えるはずもない。

スバルが森林エリアに来たのは、もちろんのこと管理棟から近いからという理由もあった。しかしそれ以上に重要なもう一つの理由があつて、それがこのウルガモスである。

怒りの粉で強引に喧嘩させ、その喧嘩で弱った隙に攫って行く。何とも単純な戦法だが、それ一つでこの育て屋が崩壊寸前に追い込まれるなんてスバルは予想だにしていなかった。

だが、スバルはプラス思考だった。それならそれで怒りの粉を利用してやろうと、モヌヲを助けるべく急降下。

「おい、ふじこ！！あの腐れた人間に向かって破壊光線だ！！肉塊にして殺す気でやれ！！ためらうな！！」

ふじこが高所から破壊光線を敵と思しき人物に向かって放つ。流石に距離の問題か、直撃は避けた。

しかし如何に直撃は避けたとはいえ、全ポケモン中最強クラスの破壊光線だ。気絶こそしなかったもののそいつは痛みで呻いていた。スバルは地上に降り立つとその人間の脚を踏み折り、機動力を奪

つておく。

「くそ、このポケモン達ダークポケモンか*2……トリニティ、こは私達がなんとかするから、お前は他のエリアのポケモンを救援に行け。」

一応、味方も呼んでおけ……管理棟に向かってハイパーボイスで叫べばタブンネが聞きとってくれる……多分ね」

そうして、トリニティを他のエリアに向かわせ、周囲のポケモンをゴツラやモヌラと協力して排除する。

破壊光線で薙ぎ払い、ハイヒールのかかとで突きさし*3、熱風で焼き、ハサミギロチンで引き裂き、とりあえず周囲の安全を周囲の安全を確保するとスバルはほっと息をつく。

「ゴツラ、モヌラ。無事だったか」

スバルは、必死で弱いポケモン達を護っていたモヌラとゴツラを労わるように撫でる。大丈夫だという風に二人は頷いた。

「モヌラ……一つ頼みがあるんだ。私に怒りの粉を使え……」

え？ と首をかしげるモヌラに、スバルは続ける

「……お前の主の住所も年齢も電話番号も全て知っているぞ。闇討ちの一つや二つをされたくないければ、言うとおりにしろ。

大丈夫だ……育て屋のポケモンには一切被害を及ぼさないつもりだ。だから私を信じろ」

黒い笑顔を浮かべて、スバルはモヌラに命令した。

トリニティに呼ばれ、杭奈達は平地エリアにいた無傷の強豪と呼べるポケモンの仲間を引き連れ、森林エリアに駆けつけようと平地エリアに行く。

と、森林エリアから次々と気づ付いたポケモンが逃げ帰ってくるではないか。

話を聞けばどうやら、今まで様々な手段で逃げることを封じられていたらしく、それがスバルとそのポケモンの活躍でどうにかなっ

たらしい。

今まだ戦える強いポケモン達は避難せずに抵抗しているのだと聞いて現場に行ってみると、森林エリアは死屍累々の惨憺たる光景が繰り広げられていた。

とは言っても文字通りの死体はないのだが、ポリゴンZにやられたものと、脚に妙な外傷を与えられた物と火傷に裂傷などで、そのすべてが重傷だ。

ポケモンの傷は戦闘不能に下時点で終わっているからともかくとして、人間の外傷は深く、特に妙な外傷を負わされえるものは酷い有様だ。

その妙な外傷というのは、全部スバルの与えた外傷であった。何故分かるのか？ それは実際に眼の前で明らかに正気ではない眼をしたポケモンをもともせずスバルが無双していることから容易に分かった。

どうやら妙な傷はハイヒールのかかとで踏み抜いた外傷らしく、この惨状はスバルが色々やってくれたようである。

「味方が……増援が来たのかと思って焦ったぞ」

デスクワーク用の服を着たままで、血まみれになりながらこの女は何をやっているのか。今も、逃げようとする悪党の服をひつつかみ、後ろから脚を蹴り飛ばしている。

他のポケモン達は怪我をしながら頑張って戦っているから仕方が無いとして、ふじこよりも多くの敵を倒しているような気がするのは気のせいだろうか。

掴んでいる悪党のふくらはぎには深い傷。このままでは、ポケモン達はハイヒールは武器だったのかと誤解しかねない光景だ。

「助けに来てくれたのは嬉しいのだが、ここは私達で大丈夫だからお前らは別の場所を助けに行ってくれ……ああ、そのウォーグル。お前は袴って名前のキルリアをここに呼んで来い。あの子に少々急ぎで用事があったな……」

ポケモン達はしばらく目の前の光景が信じられずに固まっていたが、とりあえず『ここは大丈夫だ』と分かったらしい。

杭奈はポケモンより強い人間は主人のおかげで見なれたつもりだが、む主人よりも強そうな人間を見てしまったような気がする。

他のポケモン達もハイヒールで踏みぬかれた悲惨な外傷を見てスバルに大人しく従った方が身のためであると、理解した。

スバルを助けに来たポケモンは、そのまま全員が池沼、砂地、洞窟へと散り散りに向かって行くのである。

程なくして、警察やシフトファクトリー*4に駐屯しているポケモンレンジャーが到達するまでに、スバルは逃げ惑う悪党を計6人を捕まえた。

平地エリアに居て無傷であつたために救援に向かった育て屋のポケモン達も、逃げ遅れた悪党を数人は捕まえたのだが全員でスバルと同じ6人という振るわない成績。

と、これだけ聞けばスバルの大活躍は素晴らしいようだが、悪党に数十匹のポケモンを奪われて、しかも悪党たちの大半が撤退されていたのでは割に合わない。

育て屋以外にもポケモン好きクラブや、その他ポケモンが集まる施設にも同様の事が起つたらしく、警察達は到着が遅れてしまったそうである

それまでに事態を収束で来たのはこの育て屋のみであつた。他の施設では、悪党は警察が来て初めて撤退したのだというから、スバルの優秀さが伺える。

「その状況というのはどのような……」

メモを取りながらの警察の質問に、スバルは舌打ちを鳴らす。

「くっ……どうもこうもない。いきなり現れて、何が起つたかわかないうちに預かつたポケモン達が根こそぎだ……」

杭奈達がいなかったらどうなっていた事やら……だが、襲撃され

たおかげで良い情報が手に入ったぞ。言ってやれ、ウジ虫！！」

スバルは捕えた悪党の折れた脚をさらに踏み砕く。骨が粉碎され、粉々になって筋肉に食い込んだその脚は間違いない切断することになるだろう。

「あ、あまり乱暴な真似は……」

警察の上司らしき人物が、やんわりと止める。

「仕方がないだろ？ 奴らが放った怒りの粉のせいで……どうしても甚振らずにはいられないんだ」

白々しい事をスバルは言う。ありがちな話、この地方でも麻薬や精神的な疾患などで責任能力が無い者は罪に問われない。

そんな理由で無罪となった判例の中には、怒りの粉によって判断力を著しく欠いていたという例もあり、尿検査すればスバルが怒りの粉を浴びていた事は明らかになる事だろう。

つまるところ、悪党を好き勝手甚振るために、この女は怒りの粉をわざと浴びたのだ。

もちろん、判断能力を意図的に失うために麻薬などに手を出していたとあれば、無罪を勝ち取ることは不可能なのだが。

敵が怒りの粉を巻いていたので、事故という風に言い訳はできる。万が一、『敵のウルガモスが使用した怒りの粉』ではなく、『モヌラの怒りの粉』を浴びていた事がばれたとしよう。

そうなった場合は、『弱いポケモンを庇うために怒りの粉で注意を引こうとしたモヌラに馬鹿な事はすると止めました』と言えば言い逃れは可能だ。

モヌラその他への口封じならばきちんとしている。

汚い、さすがスバル汚い。後で分かることだが、服が血まみれなもの、もはや計算の内である。

「ともかく、イライラしているのはこいつらが巻いた怒りの粉のせいなんだ……私に乱暴な真似はしないでくれと言われても言われても困る。」

それにだな……少々手荒にやったおかげで情報が手に入ったんだ

から安いもんさ」

スバルの味方になる条件はもう一つある。普通の街なら過剰防衛でなんらかの社会責任を問われてもおかしくない追い打ちだが、この街ではあまり問題ない。

なぜなら、この街。ホワイトフォレストの警察は、ブラックシティに応援を頼まれる事など日常茶飯事だ。

この程度の暴力を日常的に見なれた警察は、先程のように軽い注意を促すだけである。

スバルが最初に手を出したならともかく、悪党が最初に手を出してきたなら自業自得だし、酷い場合は賄賂を渡せば見逃す。

そして、この街の警察のそうだった体質を知っているスバルもまた、生粋のブラックシティの住人であるようである。更にスバルはぐりぐりと悪党を撈る。

「この派手な行動は……ダークライを、呼び寄せるための……布石です」

スバルに蹴り飛ばされた痛みで震える声で、悪党集団の幹部と思われる男はそう答えた。

22

「そういうことだ……。あのキルリアの子に嘘か真か調べてもらったから多分、事実だよ……。痛めつけると、人間だれしも感情はむき出しになるからな。」

ここまで痛めつけてやれば、相当な訓練をしていないとキルリア相手に嘘は付けない……。角に不快な感覚を味あわせてしまって、苦勞をかけてしまったな」

ペツと唾を吐き出し、スバルは続ける。

「ともかくだ……ホワイトフォレストにこれほど目立つ行為をすれ

ば、ダークライはその均衡を護るために必ず姿を現す。

それに、ビリジオンだって黙っちゃいない……誰だか知らんが、あの犯罪集団ども、ブラックシティで大人しくしていればいい物を

……

ダークライがちょっとやそつと出負けるわけないだろうが、ダークライを呼びだすつもりで狼藉を働く奴らの事だ。

伝説のポケモン達がこの事態を収拾してくれる……というわけにはいくはずもなからう。

この地方は、ハイリンクという夢の世界が存在していて、こいつらどうやらダークライを利用してハイリンクに対して狼藉を働くつもりらしい。

ハイリンクに何をどうするのかは知らんし、今の所はこいつから聞いたところですぐに対策出来るかもわからんからどうでもいい。

適当に尋問や拷問でもしていてくれ。

だが、ダークライがハイリンクに介入して何か悪い結果を残さない事を想像する方が難しいだろ？ 現に、こいつらが悪い結果を残すって白状もしてくれなした。

これは最早、育て屋がどうか街がどうかの問題じゃない……

下手すりゃプラズマ団以上の災厄が訪れて、イッシュが壊滅するぞ」

「おい……敵さんの目的を至急、本部に連絡しろ」

警察の上司と思われる者が部下に命令を下す。

「それでは、スバルさん。後は我々警察に……」

「断る」

ぴしゃりとスバルは言った。

「おい、ポリ公……！ 周囲の全戦力をここの街に集めやがれ。警察だろうとジムリーダーだろうと、四天王だろうと何でもいい。とにかく奴らを潰せ。」

それと、私もいく……やられたらやり返すのがブラックシティの流儀だからな」

育て屋として培った知識と、ブラックシティで培った勘と行動力

を原動力に、スバルは吼える。

「だから、ポケモンレンジャーが追跡したっていう奴らが向かった私に場所を教える。今すぐにだ。でなきゃ、お前らに破壊光線喰らわせて肉片にしてやる」

そしてポリゴンZのふじこを突き付け臆面もなく警察に命令を下しているあたり、スバルはかつては街で暴れまわっていたであろうトレーナーであったことも伺える。

それこそ、四天王と親交があり、彼がNと名乗る少年に負けた際に引退したバカラを譲ってもらえる程の実力を認められていたということだ。

「か、かしこまりました」

毒づいた後、スバルは近くに寄って来たふじこの方へ向く。

「……さて、ふじこ。仕分けは終わったか？」

警察との話をそれにて終わらせると、スバルはふじこの方へと向き直る。

ポリゴンZであるふじこは、ある旨のメールをメールアドレスを、現在メールアドレスを控えているトレーナーの数だけ一斉送信。

そして、その結果帰ってきた返信及び、預けられたポケモン達の中でやる気次第でポケモンを仕分けする作業を行っていた。

メールの旨は、現在の状況を連絡したのち『貴方達のポケモンをお借りして、警察に犯人を捕まえる協力をしますが良いですか？』という文面を送ること。

そして、帰ってきたメールが『OK』、『構いませんよ』など、了承する旨である場合は、ポケモン達にやる気さえあれば連れて行くというものである。

杭奈の主人であるオリザからの連絡はこうであった。『ジムリーダーはメールが苦手なので、代わりに返事をいたします。オリザさん曰く、存分に暴れてやれだそうです』。

警察への協力組の中には、もちろん杭奈もいた。その他、育て屋の中でも強豪と囁かれるポケモンも軒並み参加している。

「おい、お前ら。私は自分の子達に指示を出すので精いっぱいだが、お前らは昼食マツチで人間の手を借りずに闘ってきた凄腕の奴らばかりだ。」

「必ずや、攫われた同胞たちの敵討ちをやってくれるな？」

「親しい友人を攫われたもの。ただ単に思いつきり暴れたいだけの者。義憤に燃えている者。それぞれ、細かな動機は違うものの、心は一つに雄叫びをあげる。」

その雄叫びに満足して頷いたスバルは、看護師に用意させたボールの中に彼らや教官のポケモンを入れていく。

そして、最後に残した杭奈の前でスバルはしゃがみ、その頭を撫でた。

「杭奈君。キミと袴君のおかげで、被害は小さく食い止められた……とりあえずありがとう。」

だが、まだ事件は終わっちゃいない……生きていればお礼は必ずするが、今はまだお礼の方は待つてくれ……」

そんな事は構わない、とばかりに杭奈は首を振る。

「ああ、ありがとう、だが、ホワイトフォレストの流儀というものがある……受けた親切は返そうというな。私はホワイトフォレストの住人でありたいのだ……だから、な」

そうだな、お前の主人から許可が取れたら、お前のお嫁さんでも探してやるつか……育てやのお見合いサービスは充実してるから楽しみにな」

お嫁さんという言葉に杭奈は眼を見開いた。

「ふふ、嬉しいか？　しかしながら……今はとにかくにも、ブラツクシティのやり方に従ってやったらやり返します。付き合ってくださいね？」

スバルは杭奈に向かってウィンクをする。今まで険しい顔をしばなしであったスバルも、いつもの緩やかな表情に戻って力なく微笑んだ。

お嫁さんと聞いて黙っていられない杭奈は、この戦いにより一層

の気合いを込めるのであった。なんと現金な子だ。

「まずはそのためにも、この育て屋を舐めてかかった不遜にして不潔の権化たるインキンタムシ*5に劣るばい菌共を皆殺しだ!!
跡形も残さず死体にして、インキンタムシの製薬会社に売り飛ばしてやる、いいな!!」

かと思えば突然地に戻ったりもするが、別に総合失調症の気があ
るわけではない。この豹変ぶりには未だになれずに杭奈はビクツと
体を震わせた。

「それともう一つ、主人からお前に伝言だ」

杭奈をボールに入れる前に穏やかな口調になったスバルは、思わ
せぶりに言ってみせる。

「『俺も行く』。以上だ」

言い終えると、スバルは杭奈をボールの中にしまう。

「えっと、よろしいでしょうか？」

演説を終えた彼女に、通信を終えた部下が話しかける。

「奴らが向かったのは、大黒森の奥地……ダークライが住処として
いる場所にほど近い、ハイリンクの入り口です。

信号弾としてピンク色のスモークを焚いているので遠くからでも
すぐに分かるとのことですが、やっぱりここは警察に」

「知るか。てめーらが頼りにならない事なんぞ、ブラックシティで
嫌というほど学んでるんだよ」

苛立たしげにスバルは言った。まず、一般人に教えて良いもの
かどうかかわからない情報をペラペラと喋る時点*6でスバルの言う
『頼りにならない』というのももつともであった。

そうして、目的地を聞いたスバルは作業着と安全靴*7に着替え、
血まみれになったオフィス用の服は全て、下草刈りのキリキザンと
コマタナ軍団に細切れにさせ、シャンデラの二匹、サイファーとタ
リズマンに派手に燃やさせた。

何故かって、証拠隠滅のためである。服に付いていた怒りの粉から採集したDNAがモヌラの物だとか、そこまで細かい捜査をするのかどうかは不明だが。

ただ、そういう証拠隠滅のためにわざわざ大量の血を浴びたのだから。燃やさないともつたいない、という謎のポリシーでスバルは燃やした。

もちろん警察の目には触れないところで秘密裏にである。

「さて、と。私は行くよ……敵はオーレの技術*8を使っているよ。うだから気をつけないとな。」

お前らポリ公は、私のポケモンの安全を頼んだぞ……かならず、な。客からの預かり者なんだ……しっかり守ってくれ」

警察に向かってそんな事を言い残して、スバルはトリニティに乗って飛んでいった。

23

育て屋のポケモン達をつかまえていた悪党のボールは、ポケモン達をダークポケモンにし、戦闘マシーンと化させる力を持っていた。だから、今まで友達であった者が襲ってくるかもしれない。そう覚悟しろと言われて杭奈は内心びくびくしている。

喧嘩によって体力を消耗した所で攫われたポケモンの中には、ユウキ教官を始め強いポケモンも沢山いるのだ。

しかも、敵は伝説と呼ばれたポケモンを従えようという集団だ。いかなる対策を練っているかもわかったものではないのだ。

こんな育て屋に預けられているポケモン程度で抵抗できるものなのか……

しかし、敵に予想外な事があるとすれば、それは育て屋で手に入

ったポケモンが予想以上に少ないという事か。

杭奈と袴が一緒にいたことや、スバルの機転により、偶然発覚と対策が速まったおかげで、2分か3分か、悪党集団の撤退が早まったのである。

そして、その2分か3分の差は強力なポケモンが攫われるのを半分以上は防いでくれたと推測していた。スバルがお礼を言ったのは、そういう状況だからである。

目的地にたどり着く前に、杭奈達に下された命令はこうだ。

敵に捕まるな。

捕まる前に力を出し切れ。

余力を残すな。

操られても戦力にならないようにしろ。

置き土産が使えるなら使え。

大爆発が使えるのなら使え。

一大事の気配を感知して引き寄せられたダークライと警察、悪党集団との間で戦争さながらとなっていた渦中の手前で、育て屋に預けられていたポケモン達は一斉に外へと出された。

確かに、奪われたポケモン達が敵の手先となって戦っており、ダーク技と呼ばれるあらゆるポケモンに対して高い効果を持つ技を用いて抵抗している。

攫ったポケモンに加えて元々奴らの手持ちであるポケモンの抵抗に警察及びレンジャー側は苦戦を強いられているようで、すでに負傷したポケモンが溢れかえっていた。

その均衡を崩すべく到着した強力なポケモンを20匹ほど引き連れた育て屋連合。

モンスターボールから解放された杭奈は、一通りウォーミングアップの演武を行い、自身の攻撃力を高める。

そして形成した岩の刃を、跳躍して味方に当たらないように上空から、投げ付けた。

同じ育て屋でしのぎを削り合った友人含む敵の軍勢へと向けたそれは、着弾の確認もできず当たったかどうかは定かではない。

見えないから、というだけではなく、攻撃の密度が激しすぎて波導を感じることも不可能だ。

それよりも、ダークライの行動が杭奈は気になった。ダークライは先程からシャドーボールのような技を連続発射している。

これがダークホールという技だとは、杭奈に走る由もないのだが、禍々しいまでのその力なら相手のポケモンも一捻りだろうと杭奈は思ったのだが。

果たしてそれは効果が無かった。恐らく、敵はカゴの実をすでに服用済みなのであろう。

驚いたダークライもそれを理解してか、眠らせる小細工を排して攻撃技に切り替えようとしたのだが、次の瞬間彼は技を出すことすらできなくなっていた。

狼狽するダークライ。技を出せない原因は、もう一人のダークライ——杭奈は変身したドーブルだと判断した——の封印の技。

相手と自分が共通して使える技を一方的に封じる技で、ドーブルがそれを使用した直後に変身する。

そうすると、変身されたポケモンは一切の技が使えなくなる。もはやダークライは、逃げるか諦めて殴りかかるしか道が無いわけだ。形勢の不利を悟ったダークライは、逃げようと後ろを向いたが、デンチュラの拘束攻撃を受けて呆気なく捕まった。

「ダークライが捕まっただど!? ノコノコ出てきて、肩書きの割に役立たずなメイド服野郎!! ジジイの腰振りの方が気合い入ってるぞ、このタマ付いてんのかこのインポ野郎め!!」

慌てるよりも先に罵倒の言葉を出しながら、スバルが遠くで吼えていた。

せつかくスバルが巻きなおした警察側の形勢は、完全に覆ってしまった。ダークライがダークポケモンにされてしまった以上、ダークライを放っておけばハイリンクに干渉されて何が起こるか分からない。

放っておかないために警察がいるわけだが、警察達のポケモンはダークホールにより軒並み眠らされ、しかも悪夢でうなされ始める。だが、育て屋のポケモン達は違った。スバルが治療用にと冷蔵庫から引つ張り出したラムの実やカゴの実を、ついでだからとをあらかじめ全員に配っていたために、ポケモン達は誰一人として眠っていない。

大技を使い始めたダークライに対して、スバルの手持ちである教官勢は恐れずに接近。

ダークホールの連続発射で大きな隙を生んでしまったダークライに、スバルの手持ちのポケモン達 + α は接近戦を挑んだ。エルフーンのケセランが、トリニティに騎乗したまま綿胞子を見舞った。

そこに、いかなる原理か鯉のぼりのように空を浮かんでいるシビルドンのうな井が電磁波でさらに動きを制限する。

完全に機動力を奪われた所で、ケセランと同じく騎乗していたふじことトリニティがそれぞれ破壊光線と気合い玉を見舞った。

しかし、ダークライは耐え抜き、地面に堕ちない。

それも想定済みとばかりに、地上で待機していたスバルは杭奈に命令を下す。

「杭奈。やれ……波導の嵐……」

情けない事に、物理型の鍛え方をしながら接近戦ではなくストーンエッジを投げる事で精一杯であった杭奈は、ダークライがこちら側に乗っ取られた際に腰が引けてしまった。

だが、杭奈なら有効にダメージを与える技を持っていると踏んだスバルに捕まり、彼は半ば強制的に指示を下される。

その技の使い方は本能的に知っていた。けれど、使ってしまった自分にも甚大なダメージが降りかかるから……と、使用するつもりはなかったのだが、この場合は仕方あるまい。

杭奈は、必殺技の構えをとる。その構えは波導弾のそれに似てこそいるが、それよりもわずかに前傾姿勢の構えである。

さらには、スバルが杭奈の肩を押さえて支える体制となっていて、これから放つ技の反動が如何にすさまじいものを伺わせた。

『波導の力を見よ!!』

いわゆる波導の嵐と呼ばれる、公式戦では使えないし、腕を馬鹿みたいに鍛えていなければ放つと同時に意識を手放しかねない必殺技だ。

遠吠えしながら構えた腕より、破壊光線にも似た形の。しかし、ルカリオの毛色と同じく蒼に輝く光線がダークライを貫いた。

その光線は、数秒の間連続で発射され続け、最後のインパクトの瞬間爆発的な威力で敵を吹き飛ばす。

悪タイプであるポケモンがこれだけのコンボを喰らってしまったえば、例え幻と言われたポケモンといえど立っている、もしくは浮かんでいる事は不可能であった。

吹き飛ばされるがままに、ダークライが地面に落ちて転がっている。

それを見送りながら、杭奈の意識はゆっくりと閉じていくのであった。

「お疲れ様、杭奈君」

命令通りきちんと余力を使い果たしたところか、最後の一瞬で両肩と手首を脱臼してしまったようだ。

文字通り死力を尽くした杭奈の事を労わるように撫でながら、スバルはこの戦いの勝利を確信していた。

やがて、つばぜり合い的な均衡を保っていた戦況も、オリザ達ジムのメンバーやその他戦力の介入。

さらには遅れて現れたビリジオンの獅子奮迅の活躍により、戦況

は完全に警察側有利となり、勝利を飾ったのである。

第3話（後書き）

1 吸入した相手を怒らせる効果のある粉

* 2 心を閉ざし戦闘マシーンとなったポケモン。特殊な力を持つ
ダーク技を使用する

* 3 ！！？

* 4 他の地方からのポケモンの輸出入を行う施設。他地方のポケ
モンが生態系を乱さないようにポケモンレンジャーが駐屯している
* 5 皮膚系^{じしやう}状菌（多くは白癬 はくせん 菌）という一種のカビ
（真菌）によって生じる感染症が股に発症したもの。菌自体は水虫
と変わりない

* 6 探偵漫画ではよくあること。気にしてはいけない

* 7 足を保護するために鉄板が埋め込まれている靴。攻撃にも防
御にも役立つ

* 8 ダークポケモンを使用すること。

第4話

24

酷い熱が杭奈の全身を支配していた。燃やされる……草原が燃え盛り、その灼熱の中で杭奈は喘ぎ苦しんでいた。

一回だけ行った事があるドリームワールドのような夢だと分かる夢の感覚。

ダーククライは悪夢を見せると言うが、それが現実になってドリームワールドを変質させてしまったのかな？

そんな考えがおぼろげながらに杭奈の脳裏にちらつき、目覚めたいと切に願う。しかし、杭奈は長い間目覚める事は叶わなかった――

「起きろよ、杭奈」

懐かしい声に、夢か現実か、それとも天国か定かではない場所にある意識を杭奈は覚醒させる。

「ジョン！！ どうしてここに！！ あっ痛……」

驚きと喜びに満ちた声で起きあがろうとすると、杭奈は全身の痛み顔に顔をしかめる。そんな杭奈を、まだ安静にしていると、苦笑しながらジョンが諫めた。

「いや、俺はここにいるのはむしろ普通の事なんだがな。というかむしろお前、自分が今どこにいますかと思っっているんだ？」

あ、と気付いて杭奈はあたりを見回す。簡素なつい立てで仕切られた個室に、顔の部分が穴があいたベッド。

「そう言えばどこ、ここ？」

「ゴギョウ整体院。つまり、俺の家みたいなものさね……」

「え、しょ……勝敗はどうなったの？」

「それはもう、見事にお前らの勝ち。シラモリ育て屋本舗が協力しなかったら、イツシユ全体が危うくなっていたところさ……奴ら、

夢の世界に介入して、この地方の支配を画策していたらしくってね。よくわからないが、何でも夢の中じゃダークライに勝てるポケモンはいないのだと……よくわからないが、ダークライを奴らに使わせなかったことで、奴らの計画もとん挫した。

うん、そういうことだ。難しい事を考えるのは人間の専売特許さね……俺達は簡単に考えればいい。お前が、すごい事を成し遂げたってさ」

「は、はあ……」

ピンとこない杭奈は生返事でジョンに言葉を返す。

「よくわからないって顔だな。大丈夫だ、俺も良くわからん。だが、よくわかるのは。お前と袴が大活躍したってこと」

「そ、それ大げさだよ。戦闘じゃ強い人の尻に隠れて一発大技を放ったくらいだし……僕がしたことと言えば、ただのいいとこ取り」

「いや、おおげさじゃないそうだ……あの育て屋のポケモンは、お前達がいなければもつと大量に攫われていたそうだ。

もし、そうなっていたとすれば……最初の段階で警察の抵抗が押し切れ、敵さんがダークライをハイリンクに介入させる隙が出来ていたって話だ。

そうなってしまうえば、四天王が4人束になってもどうにもできない事態になったとか……どうか。俺の全く知らないところで随分と大変だったみたいだな。

戦闘であまり役に立たなかった……というのはまあ信じるとしてもだ。世の中、喧嘩の強さだけが強さじゃない。

お前と袴の感知能力は、立派な強さってことさね……まあ、ジムの中にいる分には必要のない、レンジャー向けの強さかもしれないが……」

ジョンは、仰向けに寝そべっていた杭奈に覆いかぶさるように抱きしめた。

「なににせよだ。お前が生きてて良かったよ……何でも、公式戦では使えないような大技を使って両肩と手首を脱臼したって聞いたけ

れどさ、そんな時は心配したよ。

でも、警察のやつらで柔道が得意なやつが骨を嵌めてくれたし、骨の歪みとかその他もろもろは……俺が治しておいたよ。

昨日の夜は、酷い熱にうなされていたみたいだけれど、もう熱も下がったし安心だ。

一応ポケモンセンターでレントゲンを撮ってみたけれど、酷い事にはなっていないってさ。

癒しの波導で取り急ぎ直せば、三日後には修行を再開しても良いとの話さね」

話を聞いていると、まだ実感に乏しかったが迷惑をかけてしまったという事だけはなんとなくわかった。

「あ、ありがとう……ジョンが治してくれたんだね」

反射的にお礼を言っ、杭奈は体が動かないので首だけ動かしてお辞儀の代わりにする。

「なあに、英雄様の治療を行えたんだ。俺の方が感謝したいくらいさ……それに、熱が収まったのはタブンネの癒しの波導のおかげだし……」

ジョンは喜びの感情を手放しに晒し、笑いながら杭奈の頬を両端に引つ張りつつそう言った。

「や、やっぱり大げさだよ。僕、そんなに大それたことしてないってば……」

「いいの。俺が褒めたいから褒めているんだ。それぐらい、いい気分らせてくれや」

そう言っ、ジョンは杭奈の顔を愛でるように撫でた。まだ照れの抜けない杭奈は、褒められる事を素直に喜べないままに、次々と見舞いに来た主人たちの称賛に戸惑うのであった。

静流までもが素直に称賛の賛辞を送ってくれた事が杭奈には嬉しかった。

そうして三日。久しぶりに会ったジョンといろんな話をした後、ポケモンセンターに場所を移されて過ごし、杭奈は再び育て屋に預けられる事となった。

なんだかんだで今回の件で被害を防ぐ事が出来た立役者である袴は、お礼と言われて大量の木の実を要求したらしい。

と、言うよりは毎日1個ずつ配給される木の実を2個にしろといっただけのようだ。

この三日間で、杭奈もイツシュ地方を救ったのは自分であるという事はなんとか納得できた。

自分はただ感情の揺らぎから以上を察知し伝えただけだと言うのに、不相応な待遇に戸惑っているのは袴も同じらしい。

身の丈に合った控えめな要求に終わったそうだが、せっくなので毎日特別に二つの木の実を配給される昼食を満喫しているらしい。

袴は毎日の食事が豪華になった事を嬉しそうに語っていて、杭奈は何を要求するのかと尋ねてくる。

「うーん……色々悩んだんだけど、スバルさんが推薦してくれたのがあるから……もう願いは頼んだよ。詳しくは秘密ね」

「……杭奈兄さん。流石にこればかりは僕も詳しい言及は避けませんが、いやらしいですよ。感情を無防備に晒すのは、恥ずかしいですよ」

袴は角を押さえて苦笑しながら小声で告げる。

「あははは……皆には秘密ね」

杭奈も、なんだかんだでこの三日間の間降って湧いた幸運を素直に享受することに決めたのだ。

「まったくもう。兄さんは元気すぎです……恥ずかしいなあ」

「いや、きっと袴もエルレイドに進化するところにはわかるよ……問題は、相手がいるかどうかでことだけれどね。流石に都合よく見つかるとはじゃないしねー」

苦笑する杭奈に対して、やれやれと袴は首を振る。

「ふふ、エルレイドに進化ですか。残念ながら、ご主人曰く私が催

眠術を覚えるまでは進化はお預けだそうです。まだ変わらないの石は外せませんね」

「そっか、じゃあこういう話をするのはもっと後になりそうだね…」

…」
楽しげに二人が話していると。ペテンが後ろから、ピョンと跳びはね袴の隣に座る。

あまりにも一瞬で終わってしまつて呆気なかったイッシュの危機だが、こうして戯れるうちに平和の価値を実感する。

杭奈は今、幸せであつた。

25

翌日の朝型。約束通り管理棟に訪れた杭奈は胸をわくわくと躍らせながら、尻尾でそれを表現してスバルの元に待機する。

「しかしまあ、なんといいですか……主人にお見合いを頼まれる事はありませんが、ポケモンにお見合いを頼まれるのは初めてですよ。それが杭奈君だとは何かの縁でしょうかね……貴方に、こんなチャンスを与える口実を与えられて私も嬉しい限りですよ」

パソコンを弄りつつ、スバルは笑っていた。

このシラモリ育て屋本舗では、自分の手持ち同士や、トレーナー友人であるポケモン同士で子供を作る場合ももちろんあるが、GT S*9のように互いの事を知らない相手のポケモンとも子作りが出来るようお見合いシステムというものが搭載されている。

このシステムは、姉妹提携を結んでいる育て屋間のネットワークでやり取りされるものもあり、例えばシラモリ育て屋本舗ならイッシュ地方にある他の三つの育て屋に対応している。

とは言え、そんな事は杭奈にはどうでもいい。杭奈にとって重要なのは、主人の了承が取れていること。そして、例の件のお礼でお

見合いの場を無料且つ優先的に提供してくれるということである。

「それでは、杭奈君。覚えていた技を確認したいので、一つずつ口述していつてくれるかな？」

ガウツと頷き、杭奈は列記する。

『まずは波導弾、ブレイズキック、悪の波導、ストーンエッジ、剣の舞、メタルクロー、インファイト、フェイント、電光石火、カウンター――』

杭奈の言葉が、太巻きの意匠を施したUSBポートを啜えたふじこを通じてライブキャスターに表示され、スバルはそれを次々とパソコンに打ち込んでいく。

「性格は少々寂しがり*10の気が強いか……で、えーと……素早さと攻撃力が素晴らしく高いようだね。

ふむ……一つこの条件で検索してみると……おっと3件のヒットですね。

おお、このドクログの順子ちゃんなんてどうでしょう？ フェイントを欲しがっているようですが、悪くない条件ですよ」

杭奈は困惑気味に肩をすくめる。

「かしこまりました……では、おや……ペテンちゃんのご主人も悪の波導とカウンターを欲しがっているようですね。

相手のポケモンに合わせて体格を調整するためかまだ変わらないの石をつけてこそいますが……すぐに進化は可能なようですよ？」

杭奈は知り合いという事で何かと気まづくなるような気もしたが、一応悪くないと感じて頷いて見せた。

「分かりました……保留という事で。では、最後にローブシンの……ウルキオラさんですね。彼女の御主人は杭奈さんの起死回生がご希望のようです。

イバンの実でも使うのでしょうか？ ……ああ、トリックルームという手もありますね」

ぶつぶつと戦略性を語るスバルに、ググツと唸り声を上げて杭奈は否定する。スバルはライブキャスターを覗くと苦笑した。

「なに？ 『そんなごつい女マジ勘弁』>< テラワロス』ですか……仕方がありませんね。」

そうなるとペテンちゃんが第一希望ということになりますが……ふむ、かしこまりました。少々お待ち下さい」

そう言つて、スバルはライブキャスターで電話を発信する。

「……さんの電話でよろしいでしょうか？ いつもご利用ありがとうございます。こちら、シラモリ育て屋本舗のスバルと申します。今回はお見……ええ、はい。」

お察しの通り育成ついでのお見合いの件でございますが……はい、相手の候補はルカリオの杭奈君です。後でそちらにメールでデータを送りますので……

はい、了承するか断るかの旨を返信して頂ければ……ん？ はい、ええ……数日前お送りいたしましたキルリアと一緒に映っていたあなたの子でございます。

は、はあ……OK？ と、言う事は……あとはポケモン達に任せる……と。かしこまりました……ええ、はい。

それでは、シラモリ育て屋本舗のご利用、これからもよろしくお願いします……失礼しました」

プツツと電話を切り、スバルはため息交じりに肩を下ろす。

「喜んでください、杭奈君。ペテンちゃんの飼い主は良いと言つておられますよ……あとの性格などの相性については貴方達次第ですので、任せましょう。」

うーむ、かしこういたしますかね。これまでの関係を見るに、貴方達はすでに親しいようですし……貴方達のおかしくならなければいいのですがね。

お見合いの件は私から話しておきましようか、それとも杭奈君が直接ペテンちゃんに話しますか？」

杭奈は胸に手を当て、ガウツと鳴く。

「分かりました。杭奈君が直接伝える……と。こういう事には相性がありますから、ダメでもめげずに頑張ってくださいね、杭奈君。ペテンちゃんは知つての通り、強い遺伝子を残すことを信条としております故、杭奈君はそういった意味では適任です……」

ですが、もう一つダブルバトルの相性がよくなくとも断られま
す故、そこら辺については……袴君がライバルなのでしょうかねえ
？」

これは大変だとばかりにスバルは肩をすくめて笑う。

「ま、なんにせよ、頑張りは無駄にならないでしょう。卵が出来る
までは無料で付き合ってあげますので、当たって砕けてきなさいな
……」

あと、飼い主曰く必要なら進化してもよろしいとの話ですので、
変わらないの石の取り外しはご自由に行ってくださいませ」

ガウツと、杭奈は力強く頷くが、その後何かを考え始める。

「小さい子が好きというのならゾロアのまま交尾というのも乙なも
のですね……どうしました？」

冗談を言っているスバルに対し、杭奈は何かを言いたそうに杭奈
は彼女の服をつまんで引つ張る。

スバルが顔を見下ろすと、杭奈はガウガウと鳴いて意思を伝えた。
「『棘つきの靴で戦う術を教えてちょんまげ』……棘つきの靴、と
いいますと、これ……ハイヒールの事でしょうか？」

スバルが靴を指し示して訪ねると、杭奈は頷いた。

「なるほど……君の武術は八極拳に近いものでしたね。ジョン君に
は教えてもらえなかった脚技があるのでしょうか……あの子とはスタ
イルが違いますから」

杭奈は頷く。悪い返事ではなさそうな雰囲気を目を輝かせ始める
杭奈の頭を撫で、スバルは笑った。

「いいでしょう。ですが、今日は社員と飲む約束をしております故、
明日にでも。朝と昼はデスクワークがありますので、明日の夜にで
もお願いします」

嬉しそうに杭奈は頷いた。その様子を微笑ましい眼で見ていると、ふとスバルは話をしたい衝動にかられて、育て屋に出て行こうとする杭奈を呼びとめる。

「待ってください、杭奈君。ちょっとの私の話を聞いて行って下さいませんか」

杭奈は怪訝そうな顔で首をかしげて見せる。

「いや、ですね。貴方はこの育て屋に来た時、雑魚だったではありませんか……今でもまだ、強さは不十分ではありませんがね。」

人間もポケモンも、強くなるには目的が必要です。貴方は明確な目的を持つと言う事でどんどん強くなっていきましたが、最近モチベーション下がってきてたでしょう？」

杭奈は凶星を突かれて気まずそうに頷いた。

「ふふ、やっぱり。私も、昔その日食べるにも困っておりましてね……その日の糧を得ると言う目的のために、私はひたすら強くなりました。」

その時は必死でしたともう……ここの昼食マッチの勝ち負けこの話ではなく、負ければ食事抜きという惨憺たるものでしたので、まあ、それはどうでもいいですか。昔語りは老化の証拠ですよ……まだ三十路手前だと言うのに恥ずかしい」

ふう、と溜め息をついてスバルは笑う。

「最近、育て屋のポケモンが強くないと示しがつかないという理由だけでポケモンバトルの勉強をしておりますね、モチベーション赤丸急降下です。」

貴方は、これからお見合いで引きあわせてもらった異性のために尽力すると言う目標が残されておりますが……それがちょっと羨ましいくらいですよ」

スバルは杭奈の顔をなでて笑う。

「さて、貴方はこれから、ペテンちゃんと言う女性を手に入れるかもしれませんが。それで、貴方は女性を手に入れるという目的を果た

したと思うかもしれませんが。

しかし、これは我儘な願いかもしれませんが……目的を果たしたとしても強くなる事を止めないでください。

次は子供が生まれるまで女性を守るために強くなってください。

それを目的にして、貴方はきつと強くなれます。

子供が生まれれば、女性を守るために強くなる意味を失うかもしれませんが。しかし、その時は子供を守るために強くなってください。そうすればきつと、杭奈君はまだまだ強くなるはずです。そして、強くなりましたら……あなたさえよろしければ、私のポケモンと戦いましょう

私がファンになった君となら、私のポケモンともいい勝負が出来ると思うのです……ですので、お願いします」

スバルは笑顔でお辞儀をする。杭奈は戸惑って頬を掻いていた。

「なに……今答えを出さなくともよろしいですよ。この育て屋を卒業する、半年契約の切れる日にでも。お願いします。

貴方さえよろしければ、貴方に私のすべてをぶつけてみたくなりました。

あなたのように恐ろしいまでの才能の持ち主が相手なら、私もモチベーションが上がリそうな気がしますので」

スバルの真剣な眼差しに見詰められた杭奈は、ガウツと鳴く。ペテンの手元のライブキャスターには、『考えてやんよ』と表示されていた。

実際には杭奈はそんな上から目線ではないのだが、相変わらずの通訳精度から繰り出される杭奈の前向きな答えがスバルは嬉しかった。

「杭奈兄さん、どうしたの？」

そわそわとしながら、いつも袴とペテンがたむろしている木の元

に訪れた杭奈に、袴が話しかける。

「いや、実はね……ペテンちゃんなんだけれど、お見合いのために来たって言うていたじゃない？」

「ああ、うん。確かに……変わらざるの石はチラチーノみたいに小さいポケモンとでも相手が出来るようにって付けていたような事を言うていたけれど……」

素敵な男性がいないとかで、ペテンちゃんあんまり乗り気じゃないみたいね。あと、ゾロアの方が皆ちやほやしてくれるから進化したくないとか言うていたなあ」

その時のしたり顔を思い出して、袴はクスクスと笑う。

「あ、それは初耳……やっぱり腹黒いね、ペテンちゃんは」

「まあ、悪タイプだし仕方ないのかもねー。悪タイプって結構みんながみんなそういう気質ですし……」

で、ペテンちゃんがどうしたのってえ……この感情。兄さんまさか……何か変なこと考えていない？」

袴は、頭に手を押さえながら苦笑して肩をすくめる。

「その……なんというかごめん。袴……その、僕がペテンちゃんとお見合いすることになってね」

袴は絶句。

「はああああ……そういう事ですか……」

そして、渾身の力を込めて大きなため息をついた。

「確かに、もう彼女は大人ですよ。オイラもその気になればいつでもサーナイトに進化できますし、彼女もいつまでも子供じゃいられないのは分かっておりますがね。」

そのペテンが、子供を卒業するきっかけが杭奈兄さんだとか……はあ、気まずいなあ」

再度の深いため息をついて、袴は頭を押さえる。

「そ、そんなに嫌？」

「……ペテンちゃんと親しくなかったら、嫌じゃなかったかもしれない」

ませんね。ルカリオとゾロアークって見た目悪くない組み合わせですし。

ですが、そんなことになったら僕は明日からどういう顔して袴君に会えばいいのだから……」

「ま、まあそんな事言わずに……って、袴は自分のことでしょ」

「い、今のは動揺して間違えただけです。そんな事より、杭奈兄さんを祝福したいところですが、今回はかりはね……祝福するべきなのでしょうが……あああんもう!!」

考えているうちに頭がかゆくなってきたのか、袴は良く整った髪をかきむしる。

「上手くやってくださいよ!! 友達なんですから、ペテンちゃんと変なことになったら僕は承知しませんからね。」

僕が格闘タイプになった暁には兄さんのことインファイトで仕留めますからね!!」

丁寧語のまま、宣戦布告のような脅しをかけられ、杭奈は肩をすくめた。袴と戦って負ける事はまずあり得ないが、戦い以外での強さを袴はもっている。

主に感情を感じる事で嘘が付きにくい事が原因か。

恥ずかしいことを赤裸々に暴露する罰でも与えられようものならたまらない。なんにせよ脅された事も加味して、杭奈は頑張る理由が増えてしまったわけだ。

ただ単純に異性を手に入れるとかそういう問題ではなくなりそうだ。

「大丈夫……初恋は失敗するっていうけれど……初恋は散っちゃったから今度こそ僕はペテンちゃんを物にしてみるから。」

ダブルバトルはやったことないけれど……僕だってやってやれない事はないよ」

「それは根拠のない強がりというのですよ杭奈兄さん。まったく、頼みますよ……ペテンちゃんを傷つけたら怒りますよ」

前回、静流という悪タイプに失敗した杭奈は、同じ悪タイプだけ

れど今度こそ射止めて見せると奮起した。

それに水を差す袴の言葉も、今は気にならなかった。

「で、彼女何処にいるか分かる？」

知りません、と袴は答えた。

26

「しかし……何処にいるのやら」

探し始めてから数分。あの彼女は自由に姿を変えられるので、実は見逃していただけかもしれないというのが性質が悪い。

「こうなったら房を使うっきゃないかなあ……あれ、袴？」

ふと鼻を動かして見ると、近くに袴がいるらしい気配を捉えた。

さっきまで平地エリアにいたというのに、何故砂地エリアに……と、杭奈は首をかしげる。

匂いに導かれるままついて行くと、そこにはバカラ教官に見守られながら足運びの練習を行う袴の姿が見えた。

「あれ、袴。何してるの？ さっきまで平地エリアにいたと思うんだけど……」

「ん？ 僕は今日、平地エリアには居ませんでした……それ、もしかしたらペテンの悪戯じゃないでしょうか？」

彼女、たまに性質の悪い悪戯をしますからねえ……ほら、僕は本物ですよ。嗅ぎわかるなり波導感知なり、やってみてください。

……って、なんというか兄さん酷い感情ですね」

「いや、もしかしたらとんでもない事をしちゃったかなあって」

「よくわかりませんが、ペテンに何か変なことしたら許しませんからね。一応、彼女は親友なのですから、傷つけたら兄さんといえど許しませんよ」

何だか、偽物と思しき（というよりはペテンの悪戯？）袴と似た

ような釘を刺されながら、杭奈は先程二セの袴がいた場所を目指す。

「いないなあ……」

平地エリアの木陰で休んでいたはずの偽袴は消えていた。

仕方が無いので房を立てて探してみようとすると、

「くおらっ!!」

——真上にいたペテンが襲いかかってきた。

「いべしっ!!」

そのまま地面に倒れ伏した杭奈に対して、憤慨の形相でペテンは睨む。

「悪戯で姿変えて立って気づけ、この馬鹿ちゃん。後に退けなくなつて結局変身解けなかっただろーが」

言い終えると、ペテンは溜め息を突きつつ虚空を見つめた。

「えと、ごめん。もう少し、きちんと伝えておきたかったんだけどさ……色々と浮かれていたかも」

「悪戯していたオイラにも非はあるから、それについてはお相子という事で良しとして……やっぱり良くないけれど。オイラのお嬢さんが杭奈君ねえ……」

ううん、もう子供っぽい口調も必要ない……か。私の、お嬢さんねえ……」

ペテンは杭奈から飛び降り、起きあがった彼を見る。

「見た目は合格。……性格も、実直でがんばり屋。素直で思った事が顔に出やすいって子供っぽいところはあるけれど基本的に善人」

突然、ペテンが値踏み始めて、杭奈は反射的に背筋を伸ばした。「まあ、悪くない相手よね。悪くない……最近、地道に強さを増しているし……でも、どうしたものやら。今までの男とどう違うかしらね……ってか、そうよね。」

貴方は私が今まで男とのお見合いを何人が拒んだこと、知っているわけよね？　なに、杭奈は自分なら私を満足させる事が出来るっ

て自信あるの？」

ペテンは大きいため息をついて首を振る。ヘタった尻尾は、彼女の気の滅入りを表していた。

「う、うん……僕、今はもう結構強くなつたし、守ってあげられると……ほら、今まで君と付き合おうとしたのって……」

「ええ、弱かったかし、ダブルバトルの相性も悪かった……確かに、貴方は強い。」

けれど、でも……ダブルバトルの相性はどうかしらね？ いや、分かったわ。

貴方は主人の理想に近いイメージだし、私も主人のために腹括つて見せる……結婚でも何でもしてやろうじゃないの。

だけれどね、レディ相手に労われないようなやつだったら、あんな噛み殺すからね！！」

「あ、うん……その、ごめん」

「あんな形で、貴方が婿候補だと伝わったのは私も悪いって言っているでしょ……！

これ以上ごめんとかすまんとかうだ言っていると、始まる前に噛み殺してやるわよ」

なるほど、彼女は物凄く怒っている。自分が悪いとわかっていても、正体に気付かずは無神経に話した杭奈の間抜けさには、腹が立つのも仕方が無い。

「これ以上……ヒステリックになっても仕方が無いわね」

「いや、その。別に断つても良いって言われているんだけど……スバルさんも相性があるって言っていたし」

「そりゃ、そうなんだけれどさあ。主人の期待って奴があるんでしょ？ 悪の波導を覚えたゾロアが欲しいとかなんだとか主人言っていたしねえ……」

まあ、いつかは誰かで妥協しなきゃならないとは思っていたし……変な男に捕まるよりかは、貴方になら悪くはないって思っていた

けれど……

でも、何故なのかしらね。実際に話があなたに決まると無性にむしゃくしゃしたのは……」

「うん……それは……分からないや」

何か気の利いた一言でも言ってやろうかと、前フリをした杭奈だが結局何も思い浮かばずに無様な言葉を吐いてしまう。

「まあ、一つあるとすれば、あの時に私の正体に全く気付いていなかったってことよね。その鈍ちんなどころかしら

べらべらと無神経に衝撃の事実を突き付けられりゃあ、私も苛立たしくはなるわ。それで、さっきはちよつと八つ当たりしちゃったけれど……

今はちよつとだけ落ち着いている。まだ少しはイライラしているけれどさ」

「そ、そう……それは良かった」

まだ、含みを持たせた言い方ではあるが、言葉通りの解釈をした杭奈はほつと息をつく。

「でも、このまま普通に体を赦すっていうのは、流石に無いわね……

…と、言うわけで」

「言うわけで……？」

「デートしましょ。今までは、変わらずの石仲間で袴君とイリユージョンで昼食マッチのダブルバトルを引っ掻きまわしていたけれど、明日からは……」

上目遣いで杭奈を覗きながら、ペテンは顎をくいくいと動かす。

「……ああ、うん」

何をしてほしいのか察した杭奈は、ペテンの変わらざるの石を外してあげた。これで、明日までには恐らく進化してしまうはず。

「貴方と一緒に、美味しい木の実をゲットして回りましょうか。その過程で私をメロメロにしてよね」

「あのー……今更こんなことを言うのも何なんだけれど。それでいいの？」

自分から出会いを棒に振るような事を言うのはあまりしたくなかったが、それでも杭奈は尋ねずには居られなかった。

「うん、さっきも言ったでしょ？ 変な男を掴ませられるよりかはずつとまし。でもまあ……体を赦すとなるとね。」

私の事を守れるくらい強いかどうか見届けさせてもらいたいし、私の事をよく知ってからにしてほしいな。

何がとは言わないけれど、私の性格を知っていれば色々円滑に出来るでしょ？ そりゃ本当ならもつといい男をえり好みはしたいけれどさ。

野性じゃもつと選択肢も狭そうだし、それに比べれば恵まれていると思つて……妥協する」

「一言多い気がするけれど……分かった。出来るだけ、君に気に入られるように頑張ってみる」

「決まりね。じゃあ、明日から昼食マッチタッグ……頑張るましよう。とはいえ、今日は袴君と一緒にすることになりそうね……」

さすがに昼前までには進化しないはず。ゾロアの姿を少々名残惜しく思いながら、ペテンはこれから先のことに不安と期待を緋い交ぜにしていた。

27

そうして昼食時。ペテン達と合流した袴は、開口一番戸惑いを隠そうともしない発言だ。

「あ、杭奈兄さん……ねえ？ ペテンの首にあるはずの物が見えないのだけれど……何の冗談、それは？」

袴は、ペテンが変わらずの石を外しているのを見て。そして杭奈がそれを持っているのを見て、杭奈をサイコキネシスで浮かばせる。「あ、いや……冗談とかそういうのじゃなくて。その……お見合

いね。お見合いの件で、とりあえずデートしてみる事が決まったわけ……」

「そう。お見合いでとりあえず付き合ってみましようってことになったのよ、私。だから、そんな風に邪険に扱ったら可愛想つてもよ」

「この感情……」

袴は角を撫でながら絶句する。急にサイコネシスを解かれた杭奈はバランスが取れずに尻もちをついた。

「中々の陶酔感、それなりの親愛に恋慕……ああ、もうダメだこれは、良い具合に出来あがってる！」

「いいの。これを陶酔じゃなく、確固たる感情にしてくわ……ほら、住めば都って言うでしょ？」

「え、なにそれ酷い言いよう」

杭奈は肩をすくめてペテンの言葉に突っ込みを入れる。しかし、袴は杭奈の言葉なんてお構いなしだ。

「出来あがってるってことは、これから僕は一人で昼食マッチ……寂しいなあ。僕一人じゃ勝てないかもなあ」

はあ、と袴は溜め息をついて意気消沈。

「えーと……そういうわけで、今日の昼が最後になるわね。だからえーと……袴君。今日の昼食マッチは悔いが無いよう頑張りましよう」

「分かりました……」

袴は妥協した。駄々をこねるほど馬鹿な子供でもないようだ。

それから数分。いつものように昼食マッチと相成った袴とペテンの二人は、対戦相手を見つけて勝負に挑む。

「キルリアが二人……相変わらずこいつら気味が悪いな」

「そんなこと」

「言ったって」

「イリユージョンは」

「「解かないよ」」

揃えた息もばっちり、二人は戦い前のデモンストレーションを行う。

もちろん杭奈も観戦しており、杭奈に見せつけてやろうという意気込みはもちろん、パートナーが進化前最後の戦いだという事で、袴は今日の勝負に背水の陣の覚悟だ。

食料全部賭けという、いわゆる負ければ昼食抜き勝負を挑みつつ、引き換えに望むのは木の実一個。

杭奈もびつくりの自身を追い込むDMな修行法を、絶対勝つぞという意気込みで袴は挑むのであった。

対する敵は、左からダルマツカとバオツプ。炎タイプ同士仲良くといったところだろう。こらそこ、劣化猿とか言わない。

バオツプは両刀が可能なので、どう攻めてくるか分からない初見は序盤手こずったが、今はすでに特殊型だと割れている。もちろんダルマツカは物理・近距離型。

対するこちらは、袴が教育方針のせいか物理・近距離に秀でており、ペテンはその逆で特殊技・長距離型に秀でている。

お互い型は割れてこそいるものの、袴サイドの見た目はぴったりと息の合ったキルリアが2匹。

イリユージョンの特性を生かし、なおかつシンクロする二人の以心伝心。厄介にも程がある。ペテンが袴を好む理由もそこにあった。攻めあぐねる炎二人組に対し、左のキルリアが走りだした。それを袴だと判断し、ダルマツカが左のキルリアに炎のパンチで飛び掛かる。

しかし、左のキルリアは急停止しダルマツカの攻撃を不発にさせる。なら、俺がやるとばかりにバオツプが火炎放射を左のキルリアに放つ。

その攻撃が掠めるようにヒットすると、イリユージョンが解ける。実はそのキルリアはペテンであった事がわかった。

右のキルリア、つまるところの本物の袴はどこに行ったのかと思えば、テレポートでバオップの後ろに回っていた。

テレポートで力を消費しているので、続けざまにPPを消費する技は使えない。例えば、ここで電磁波を見舞いバオップの動きを制限する事は出来ない。

だが、無属性の攻撃ならば速攻で放つ事が出来る。袴はバオップの膝の裏を蹴り飛ばし、強かに転ばせたところでペテンを追っていた火炎放射が地面に逸れる。

転んでしまったバオップのピンチを助けようと、ダルマツカが袴に向かって炎のパンチ。

なんとかかわした袴は、他の3人を視野に入れながら後退。ペテンは逆に前に出て、起きあがろうとするバオップに連続で引つ掻きを見舞う。

無防備な相手に対して瞬間火力を求めるのであれば、如何に非力でも直接攻撃の方が強いのだ。

バオップは右腕を犠牲にしながら、顔にひっかかり傷を作らないよう防御。左腕についてなんとかバオップが立ちあがると、ペテンとバオップは互いにバックステップで距離をとる。

ペテンは先程の火炎放射で少々ダメージを負ってしまったが、バオップは膝の裏が痛い上に腕も損傷している。

袴とダルマツカはノーダメージといったところで、挟み打ちという有利な陣形を得た袴達のアドバンテージは強い。

両手を燃やして、ダルマツカの炎のパンチ。大きく弓を引く動作をともなった、力づくの1点張りの心情を象徴するような右手のパンチは、すさまじい圧力だった。

防御をしても腕に大ダメージを負ってしまう事は覚悟するべきそのパンチを、袴は必死でいなす。

いなしてなお、肉がそぎ落とされるんじゃないかと思うほどのダメージを感じながらも、袴はそのままダルマツカに向かって電磁波

を見舞った。

ペテンはバオップと見合った姿勢からサイドステップで射線を合わせ、そのまま走りだしてダルマツカに特攻をしかける。

後ろからの不意打ちに加え、麻痺で防御も鈍ったダルマツカにシヤドーボールを当てるのなど、造作もないことだ。

シヤドーボールが直撃して吹っ飛ばされたダルマツカは、一気に戦闘不能。

仇を取るとでも言うように、バオップがペテンへ火炎放射を見舞うが、その火炎放射は袴の飛び蹴りで押し倒されて中途半端なダメージのまま中断された。

袴はすでに炎のパンチを受けとめた左手が赤くなっていたが、まだサイコネシスのような特殊技ならばなんとか使える。

そして、ペテンも軽く炎を浴びたくらいで、まだそこまでダメージを負っていない。残るはバオップのみ。

「後は僕に任せてください、ペテンー！ 杭奈兄さんもよく見てて二人掛かりでやってもつまらないと判断した袴は、そう言うて前が出る。というか、前に出ると言うよりはピッタリと密着している。エルレイドになれば杭奈のようにインファイトが使えるようになるが、その準備段階だとでも言うようにインファイトの間合いを維持していた。

「何あれ……」

驚嘆するべきは、ぴつたりとくつついたまま離れないことだ。袴は敵より一瞬だけ遅く動いているが、その一瞬が杭奈よりも遥かに短い一瞬だ。

杭奈はその事に対して、まさに表現する言葉を失って何あれ、と呟く事しか出来ない。

こんなに距離が近いと、バオップは火炎放射を放とうにも自身の炎で焼かれてしまう。タイプの上では袴と比べて小さなダメージ打破あるだろうが、それだけの問題ではない。

困窮極まって、バオツプが苦肉の策で噛みついてみれば、袴は耳に向かって素早く強烈なビンタを放つ。噛みついて動けない標的に当てるのは簡単なお仕事だ。

後ろから噛みつくならまだしも、前から噛みついたりなどすればこつなるのも当然の結果であつた。

三半規管と鼓膜をやられ、バオツプの眼前に星が浮かんでいるところで、袴はサイコキネシス。一度浮かせたバオツプを勢いよく地面に叩きつける。

まだ意識はあるようだが、戦意は完全に喪失しているようである。

「俺たちの負けだ……」

ダルマツカが敗北宣言をして、ペテンと袴は一瞬の空白。

「いいよっしやあ!!」

「やりいっ!!」

袴は右手で、ペテンは尻尾でハイタッチ。二人がダメージを負いはしたものの、戦略や連携の面では完璧の闘いであつた。

袴が、ペテン無しじゃ勝てないかも、と泣きごとを言ったのは、今回の戦いのように攻撃に特殊技をほとんど使わないせいである。

エルレイドになるために、という理由で自身に縛りを設けていたわけで、ただキルリアの身の丈に合わない闘い方の代償といつてよいだろう。

格下に挑めばいいだろうという提案をすれば、それは的外れな救済案になってしまう。小さい頃は格下 年下という図式が成り立つ。袴にだってプライドはあるから、年下に挑みたくなかったのだ。だから彼は自身を縛っても勝利を拾えるダブルバトルに逃げたのだ。とはいえ、これからは一人で勝つためには、流石にサイコキネシスに頼らざるを得なくなるだろう。

「また、新しいパートナーを見つけなきゃね……」

これで縛りも終了か、と。勝って嬉しい気分もそこそこに、しみりとして袴が呟く。

「大丈夫……お前は、サポートが上手いから。私に匹敵するパートナーだってすぐに見つかるさ」

筆のような頭の飾り毛を袴に胸に押しつけながらペテンは笑う。
「うん、ペテンは兄さんと仲良くね……一応、応援しているから」
袴はそう言っではに cand。

その後袴と別れた杭奈とペテンは、八つ時に進化を迎えることになる。ゾロアークになったペテンは、動きを確認するために軽く杭奈とじゃれ合って時間を費やした。

やがて日が暮れると、二人は明日また会うことを約束して別れるのであった。

本格的なデートという名のダブルバトルは明日から始まる。

さて、その夜の事だが。杭奈は約束通りスバルとの修行に勤しむことになった。

主人もジョンもバカラ教官も得意ではないインファイトを習う機会は今までに無く、杭奈の用いるインファイトに織り交ぜる技は色々不十分であった。

特に力不足を感じていたのは脚技。離れてからの脚技ならばジョンから一通り教えてもらったのだが、近づいた状態でのそれはジョンの対象外である。

ただ、スバルにはその技があった、ハイヒールで敵の脚を貫くという必殺技が。もしあれを物に出来れば、杭奈はもっと強くなれるという確信があるのだ。

御主人からは指導を受けた記憶はほとんどなく、実質これは杭奈が初めて人間からの指導を仰いだ日であった。

件のスバルはというと、安全靴に作業着という動きやすい格好で

その場に現れた。

流石にハイヒールのままで戦うのは無理という事だろうし、オフイス用の服を汚したくはないのだろう。

「では、今日からしばらく貴方の修行に付き合うことといたしますが……一つだけ、教える前に条件を守ってくださいませでしょうか」

何？ と首をかしげる杭奈に、スバルは笑いかける。

「貴方の所属する事務は格闘タイプのジム……これから多くのポケモンがインファイトを求める事でしよう。あなたの友達の袴君も合わせましてね……」

ですので、袴君はもちろん後輩の子達にも、きちんと技を伝えてくださいませ。そうしていただけると約束して下さるのであれば、私は喜んで技をお伝えしましょう」

もちろんだとも言うように、杭奈は頷く。

「ですよ。教える事には、楽しみや嬉しさというものがありますから……貴方も、袴君に色んな事を教えている間は楽しそうですね」

……

きつと、こうやって技は伝えられてゆくものなのですね……さて、と。約束も取り付けましたところで、早速以って技をお教えしましょう。

とは言え、私は尻尾がありませんから、バランスのとり方は違いますし、貴方と違って踵が地面に付く体ですので、貴方との違いは当然存在します。

ですので、あまり私の感覚を鵜呑みをしないよう……それが理解できましたら、まずは準備体操から始めましょう」

ジョンがそうしたように、二人は準備体操から。スバルも非常に体が柔らかく、股を180度開くことなど朝飯前といった様子でそれをこなす。

そして、いよいよ修行の段階というところになると、杭奈は今まで戦った相手の中で一番恐ろしい相手と感じるのであった。

言われてみれば当然のことだが、足技は使っている最中片足にな

るし、外せば大きな隙が出来る。

その分、型として足技を放つだけならともかく、戦闘中に織り交ぜるには拳を利用した技よりも遥かにリスクも多い。

だから、攻撃よりも先に足捌きを練習しようということになったのだが――蓋を開けてみれば、スバルは恐ろしいまでに距離を詰めるのが上手い。

いつ動き出したかもしれず、いつの間にか急加速して気づけば近づかれている。袴のような先読みにこそ秀でてはいないものの、それを素早さと技術で補っているようだ。

杭奈にとっては近距離は得意な領域なので万歳なのだが、彼女の場合は万を通り越して億の領域。億歳といったところか。

足捌きの勉強メインのために、攻撃は非常に軽いものだが、真面目に攻撃すれば威力は計り知れないだろう。

例の悪党が攻めて来た時に主人より強いのではないかと思ったが、対峙してみても分かる。

主人より総合的に強いという事はなさそうだが、逃げ腰の相手に対しての攻撃能力は主人を遥かに上回っている。

つまり、この足捌きは相当な武器になるということだ。バックステップ、サイドステップ、前へ出て体当たりなど、逃げ回ろうと色々な技を駆使しても無駄だ。

どうやっても技を返されるような気がしてくる。真似できれば心強い戦力となるだろうと考えて、杭奈は絶対にこの技を物にしてやると意気込んだ。

お見合いもそこそこに始まったこの修行。杭奈は強さを手に入れようと貪欲に技を吸収していくのである。

翌朝。4足歩行から2足歩行へと変貌を遂げたペテンは、身体能力こそ軒並み強くなったものの、戦い方は赤子のように右も左も分からないままだ。

杭奈や袴の戦い方を何度も見て来たから、ペテンも見よう見真似というのは出来るが、いかんせん足運びもお粗末ならステップの踏み方も無駄が多すぎる。

まだうまくバランスも取れずに転ぶことすら多いペテンに、杭奈は色々教える。

立ち姿から前後左右への移動。近づかれた時の防御の基本から迎撃の方法。それらを手とり足とり教えることに、午前中の時間は費やされた。

ペテンにトレーニングをつける間、杭奈は不思議な気分浸っていた。

以前まで、ずっと教えられる立場だった自分がペテンに対して技を教えている事が、今までの自分からは想像もできない出来事だったからであろうか。

「ふういいいい……つかれたあ」

女性だというのに、股を開け広げたまま大の字になってペテンは寝そべる。疲れたという言葉とは裏腹に、充足した表情の彼女は口元が笑顔で緩んでいる。

「お疲れ様」

そう声をかけながら、杭奈もペテンに倣って大の字になる。

平地エリアから隣接する森林エリアの木陰の下。柔らかな木漏れ日と時折吹く涼風を浴びて、二人は揃ってパンティング*11を始める。

そうして寝転んでいる最中、先程までのトレーニングを反芻していた杭奈は、胸の内に芽生えた不思議な感情について考察する。

「ごめんね。教えるのが楽しすぎてつい調子に乗っちゃって……」

その感情とは、ペテンが女性であるとか、そういうのを関係無し（だと個人的に思っている）に感じる言いようのない嬉しさや達成感だ。

自分が何かを出来るようになったわけでもないのに、教えた通りに動作を行えるペテンの姿がとても嬉しい。

次々と動きを吸収していくペテンを見て、そんな感情が杭奈の胸の中に芽生えたのだ。

「ペテンがどんどん動きを覚えてくれるものでさ。辞めどきも分かんなくなっちゃった……学習能力半端ないね」

「それはあれよ。ゾロアークは幻影を見せるために、動きや風景を記憶する能力が非常に優れているの……どんな相手も一度顔を見れば忘れないようにね。」

名前を覚えるのとかは苦手だけれど……うん、教えるのが楽しいあなた好みの能力でよかったわ」

「そうなの……ゾロアークが相手でよかった」

きっと、ジョンもこんな気持ちで自分に色々教えていたのだろうと考えると、ようやくジョンと同じフィールドに立てたような気がして何だか胸が熱くなる気がした。

とはいえ、まだ満足に物を教えられる程強くなったつもりはない。きつとまだ、ジョンや静流のように強くなれてはいないが、杭奈は教える楽しみというものを知り、もつともつと教えてあげたいと思うようになる。

また一つ、杭奈に強くなる理由が出来た。

同時に、改めてジョンに感謝せずには居られなかった。『貴方が強くしてくれたおかげで、今はペテンに基本的な動作を教える事が出来ます』と。

「これからはもうちょっと押さえることにするよ」

杭奈は謝って、肩をすくめてみせた。

「いいって。私もゾロアークの体に早く慣れたくって張り切っちゃ

「つたんだから……むしろこっちが付き合わせて悪かったわ」

寝転がりながら、杭奈はペテンの方に首を向けて微笑む。

「そう……それならお相手ってことにしようか」

「そうしよう。謝り合うのも疲れるわ。……疲れたから昼食マッチの時間まで……ずっとこうしてようかあ？」

「うん……そうしよう」

風と陰に包まれて、互いに少しばかり体温が下がってきたら、ふーっとして長く細く息を吐く。こうすると、少し落ち着いた気分になった。

「うーん……やっぱりね」

「何が？」

と、杭奈は横を向く。

「杭奈君なら、上手に私をエスコートしてくれると思っていただけけど、大体予想通りだったなって。だから、進化して良かったと思うの」

「……そう。褒めているんだよね、それ？」

「当たり前よ。少なくとも昨日と今日は上手くエスコートしてくれたじゃない」

杭奈の方を向きながら、ペテンはクスクスと笑った。

「ありがとう……感謝するばかりだったけれど、僕は初めて自分の努力で感謝された気がする」

「感謝された事に感謝って……それ、無限ループになっちゃうじゃない。感謝されたことに感謝されたことに感謝されたことに感謝されたって言う風に……」

これ以上疲れたくないから、そんな馬鹿みたいなことやめてよ。もう」

ペテンはおどけて笑って見せる。無垢なるままの自然なその仕草は、静流のようなあくどい女性と違って杭奈を素直に笑顔にさせる。「はあい……」

と、はにかみながら口にして、木漏れ日を見上げながら杭奈はゆ

つくりと目を閉じる。ペテンに比べると、運動量は少なかったのだが、昨日の疲れが残っていてすぐに眠ってしまった。

起こしてしまうのも何なので、ペテンも一緒に眠ることにした。ただ、起こすつもりはないが一つだけちょっかいを出さずには居られなかった。

投げ出された杭奈の手をペテンは優しく包み込み、指同士を絡ませ合いながら二人は眠りにつく。

昼食が始まる放送を聞いて目覚めるまで、二人は心地よい夢を見ていた。

眠りから覚めると、時刻はちょうど昼時であった。今日の食料を受け取った二人は、早速対戦相手を探しに周囲をうろつくことにする。

「さて、昼食マッチだけれど……ダブルの相手って結構少ないんだよねあ……」

「兄さん、そこはまあ気長に探すっきゃないわけで……」

杭奈とペテンと袴の三人は、森林エリアの奥地から行ける洞窟エリアを回っていた。

「えり好みはあまり出来そうにないね……あ、あれなんてどう？あそこのギガイアスとドリユウズ。相性的にもそこまで極端な有利不利はないし……誘ってみない？」

杭奈が指さし、提案するとペテンはうんと頷いた。

「なるほど、良い考えね。ねえ、そこのお二人さん……私達と、木の実の等価交換で昼食マッチをやらないかしら？」

決断したら即行動。ペテンはギガイアスとドリユウズに交渉に出る。相手に二人組は顔を見合わせ二言三言の会話をすると、互いに納得し合ったようだ。

「良いだろう。ダブルバトルでいいんだな？」

ドリユウズの男が尋ね返す。

「ええ、望む所よ」

「うん、僕も」

杭奈とペテン、共に頷きあつて、ダブルバトルのカードは組まれた。

「よっしや、始めようぜえ」

ペテンと杭奈が頷くと、戦いたくてうずうずしていたという風に、ギガイアスが仕切る。

「ちよつと待つて」

と、ペテンが手で制すと、彼女は杭奈と瓜二つのルカリオに変身していた。そのまま、彼女は自分達を幻影の壁の中に包み込み、自身をシャッフルする。

幻影の壁を消して再び姿を見せた時には、傍目にはどっちのルカリオが杭奈なのか全く分からない状態で戦いがスタートすることになった。

「よっし、頑張つて。杭奈兄さん、ペテン」

29

種族を考えれば、相手は恐らくどちらも物理型。こちら側の方を考えれば杭奈を前衛に、ペテンを後衛にというのが普通である。

しかし、まず最初に二人は波導弾の構え。ゾロアークは戦闘中でも、自分の身長分くらいの範囲には非常に精度の高い幻影を見せる事が出来る。

今の状態では、どちらが本来使えないはずの波導弾をチャージしているのかわからない。

そもそも、ゾロアークの技構成など詳しく知っているわけでもない、相手二人はどうすべきか考えるのに忙しい。

しかし、着々とチャージされる波導弾を指を咥えてみているわけ

にもいかず、もうそんなの知った事かとばかりに敵の二人も攻撃に転じる。

ギガイアスは眼前に出現させた大岩を、逞しい前脚で砕きながら弾き飛ばした。

岩雪崩がドリュウズの背中に当たってしまったが、それを気にするほどドリュウズは柔でもないし、タイプ相性的にも岩雪崩なんて小突かれたようなもの。

左のルカリオが斜め前方のドリュウズに向かって両手を突き出し、波導弾を放つ。

ドリュウズは波導弾を真っ向から受け止めてやろうと鋼の爪で防御をしようとして、しかし突き出した左のルカリオの手から放たれた波導弾は数十センチ進んでふっと消える。

代わりに、ギガイアスの脚元から蔦草が伸びた。と、同時に左のルカリオは迫りくる飛礫から顔面の急所を守る。

正体がさらけ出され、左のルカリオがゾロアーク——ペテンと確定した。さきほどの波導弾を放つモーションはもちろん幻影だった。波導弾を使っている風な幻影を見せつつ、実は草結びでした——など彼女には造作もないことだ。痛みか何かで気を散らさなければ……ではあるが。

右のルカリオ。つまるところの杭奈と確定した彼は、ドリュウズが走りだした早い段階から波導弾のチャージを中断。

敵の巨大な爪がペテンに届かないよう、ドリュウズに向かって岩の飛礫の痛みには耐えながら突撃した。岩雪崩は効果はいま一つとはいえ、やっぱり痛い物は痛い。

ぶつかり合う巨大な爪と鋼鉄の棘のメタルクロー合戦。体は大きい線が細い杭奈と、その逆である体は小さいががっしりとした体格のドリュウズ。

2匹は臂力において互角。互いの鋼同士が火花を散らして大きく弾かれた。

杭奈はスバルから習った足捌きで素早く体勢を立て直し、一瞬早く脚を踏み込んでドリユウズの懷に踏み込む。

ドリユウズが今度はドリルライナーを放ってやろうと頭、のリーゼントと両腕の爪を合わせて巨大なドリルになろうとしたところで杭奈は相手の頭と爪の間に自身の腕を挟んで相手の構えを止める

ドリユウズのリーゼント状の頭部に付いたかぎ状の刃の後ろ側からドリユウズの首を抱き、右腕でしっかり頭部を固定。

杭奈の残った左腕はドリユウズの右腕を掴み、ついで右足でドリユウズの右足の甲を踏み潰してダメージを与える。

それから、勢いがついたままの右足で無防備な腹に向かって何度も何度も膝蹴り。

体重が乗りきつてはいないため、その膝蹴りで大ダメージを与えることは難しいが、ドリユウズは長すぎる爪も、掴まれている頭突きも全く使えない事を考えれば十分だ。

ドリユウズは地震もドリルライナーも放てず、ペチペチと杭奈の尻を叩くので精いっぱいだ。

ペテンは、草結びによる拘束がギガイアスに働いている一瞬の間に、組みつきあっている杭奈とドリユウズの元に走り、右腕を押さえられて防御できないドリユウズの脇腹に体重を込めたローキックを繰り返す。

ぐはあつと、眼が飛び出るような表情をしてドリユウズが唾を噴き出す。それを好機とみた杭奈は、首に巻き付けた腕を離して背中に強烈な右肘打ち。

決まれば必殺の一撃であるそれを喰らって、ドリユウズは強烈な痛みを覚えながら倒れ伏した。

波導で形成した仮初の草はいずれ消える。ペテンが攻撃している間に、ギガイアスは草結びによる拘束が解け、再び岩雪崩を放とうとするが――

「くそっ」

ギガイアスは毒づいた。ペテンは髪を盾に、杭奈はドリユウズを盾に、岩雪崩に対して鉄壁の構えで挑む。

これでは岩雪崩で攻撃したところで、与えられるダメージはたかが知れている。それどころか味方を巻き込みかねないと来たものだ。どうするべきかと悩んでいる一瞬の間に、ペテンはステップを踏んで杭奈の後ろに隠れて気合い玉をチャージ。

すさまじい力がペテンの掌にチャージされるのを見ては、頑丈なギガイアスも冷や汗ものだ。

「勝てるわけがないな、こりゃ……降参だ。木の実もって行け」

杭奈はドリユウズを下ろし、ペテンはチャージしていた闘気を周囲に散らして肩を下ろす。

「僕達の勝ちだね」

「私たちの勝ちね」

勝ちを確信しあつた二人は、ハイタッチを交わす。高らかに響く乾いた快音と、それに負けない快の感情が袴の心の内に強く響いて余韻を残した。

「今日のダブルバトル……二人とも……楽しそうにしていたね」

木の実を食みながら、少しものさびしい口調で袴は呟いた。

「初めてにしては息が合っていたからね」

「うん、楽しかったわ……すつごく。これなら杭奈君は私の理想かも」

同時に答えた杭奈とペテンの言葉に、袴は納得する。

「これ以上、僕が邪魔する余地はないみたいね……うん、ペテンは進化して良かったよ」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。私達お似合いかも」

「袴の事を思うとちよつと複雑な気分だけれどね……まあ、でもそうだね」

見下ろすペテンに、杭奈は肩をすくめながらはにかみ返す。

「あの、僕……昼食が終わりましたら、催眠術が得意な人見つけて……ちょっと徹底的に鍛えてきます。」

それで、催眠術を完全に物にしましたら……杭奈兄さん。あなたとも、いつかダブルバトルを組ませてください。

ジム戦は、ダブルじゃないけれど……今日の試合を見て、ペテンちゃん以外にも、杭奈兄さんと組んでみたくなりました」

「うん、いいよ袴。お互い頑張ろうね」

杭奈はにっこりと微笑み返す。

袴と杭奈は拳を合わせて誓いあう。真ん中に座っていたペテンは邪魔くさい二人の手に苦笑するばかりであるが、その光景を見る目は穏やかであった。

そして、その日の夜。

スバルの厳しい修行が終わり、二人は昨夜と同じく木に腰掛けて呼吸を整えていた。

「なるほど……ダブルバトルは大成功というわけですか……。それはそれは、喜ばしい事ではありませんか……」

しかし、修行とデートの両立とは、中々にハードな毎日を送っておりますね……杭奈さんも」

しみじみと溜め息をつく、杭奈は大したことないよとばかりに笑う。まったりとした雰囲気です。1人と1匹は木の下に寄り添った。

「君は、良い眼をしていますね。強くなるわけです」

何故だか思いたせないが、とても聞きたかったような言葉を聞いて杭奈は尋ね返そうとスバルの服を引っ張った。

「な、なんでしょう？ 良い眼をしているって褒めただけですよ？ 視野が広いとか、相手の攻撃をよく見えているとか……あと、記憶力も良いですね。」

みた事を忘れないと言いますか……ちょっと褒めただけなのに、

そこまで大きな反応をしてみました？」

と、スバルに言われて杭奈はこの言葉が喜ばしい理由を思い出し、それをスバルに話すことにした。

ハーモニカの意匠が施されたUSBポートを咥えたふじこ越しの会話で、通訳精度には少々難があつたが、話して行く間にもさらに嬉しさも込み上がってくる。

この育て屋に訪れた当初、静流に見る目が無いと言われて以来、見ることにについては真面目にやってきたつもりだ。

見て真似することの重要さはジョンを相手にするとき、教えられた時も常に実感していて、集中力が途切れないように注意したものだ。

切っ掛けが、静流の一言であるのは今の今まで忘れていたが、スバルに言われてみると、色々な事が蘇ってきた。

「ほう、ここに来た当初に、静流ちゃんに見る目が無いと言われた……ですか。それで、貴方は眼を鍛えていたと……感心ですね」

スバルに褒められると、杭奈は嬉しそうに鳴き声を上げる。

「嬉しいですか？ では、更に喜んでもらいましょう……貴方の足捌き、この2日で見違えましたよ……貴方が私の動きをよく見ている証拠です。」

その眼の才能を、きちんと貴方は生かしておりますよ……とても優秀な生徒ですので、教える私としても嬉しい限りです」

杭奈は照れたように顔を伏せ、しかし嬉しそうに喉を鳴らす。

「でも、恋愛の方はどうなんでしょうね？ 静流さんに惚れるあたり、あまり女性を見る目はないと思いますが」

クスクスと笑いを交えながらスバルが言うと、どういことだと杭奈は唸り声を上げる。

「あの子はですね、君の事をまぎれもなく大切に思っておりますよ。ただ、恋愛感情ではないと言っただけで、ですね。」

なんせ、あの子も貴方と同じ。群れで生きるポケモンなのですか

ら……ズルズキンの女の子が、年下を大事にしないわけはありえま
せんよ」

スバルがしみじみと言えば、杭奈は罵倒されたわけではないと分
かって唸るのを止めた。

「それで、ペテンちゃんの方はどうなっています？ 上手くいきそ
うですか」

杭奈がまだ分からないと苦笑して肩をすくめるので、スバルは微
笑んだ。

「ですか。あの子はダブルバトルの相性を重視する事ですからね。
これまでシングルばかりだった貴方には慣れない事も多く、辛いも
のがあると思います。」

ですがね。これから先貴方の眼は学ぶことにも戦うことにも大き
く役に立つでしょう。特に、ダブルバトルの際にはその視野の広さ
は何よりも大切な武器となるはずでございます。

ですから、その眼を大切にしてくださいませ。貴方を強くする武
器であり、手段となりえますので」

分かっていますよ、とばかりに杭奈は頷いた。

「そうか、なら良いですが、なんというべきでしょうか……ペテン
ちゃんが強い相手を求めているとはいえ、もう少し身だしなみを整
えた方がいいですよ。」

今日は特別に私が梳いてあげますから、毎日夕方はきちんと職員
に梳いてもらってからこちらに来て下さいませ」

全く、と溜め息をつきながらスバルは杭奈の毛繕いを始める。久
々の毛繕いがよほど気持ち良かったのか、杭奈はいつの間にか眠っ
てしまった。

夏だし風邪もひかないだろうと、杭奈はそのまま木の下に放置さ
れて夜を過ごすのであった。

第4話（後書き）

*9 Global Trade Stationの略。世界中のトレーナーとポケモンの交換が出来るシステムである

*10 防御が低くなる代わりに攻撃が高くなる。元々防御性能が紙であるルカリオには両刀向けの悪くない性格

*11 動物が体温調節のために行うあえぐような呼吸。汗をの代わりに舌で気化熱を奪ってもらうための行動

第5話

30

ペテンと共に、昼食マッチのダブルバトルに挑戦し始めてから5日。

杭奈はスバルの足捌きに加えて、袴がバオツプとの戦いで見せた相手の動きを読む秘訣を探るべく、袴にやり方を聞いたのだが……

「僕の場合……角で感情の動きを察知するのですけれど。ほら、杭奈さんがさんざんやっているように、近づかれた時の対処って難しいですね。」

だから、兄さんみたく有効な対処法があるポケモンならばともかく、そうでないポケモンは選択肢が狭まるのです。

そうになると……角で行動を読むのもた容易いというわけです。杭奈さんも、その房を上手く使えば*1出来ない事ではないと思いますよ?」

「……房。どうやって鍛えればいいのかな?」

「さ、さあ……僕は進化と同時に力が強くなりましたので、鍛えた覚えが無いのです……うーん……ちよつと待っててください」

と言つて、袴は小石を拾つて杭奈に手渡す。

「感情を読むっていうのは、こうやってコツを掴むことが何より大事だと思えますので……その小石、左右どちらかの手に掴んで下さい」

言われるがままに、杭奈は手の中に小石を隠し、袴は的確に左右どちらの手に小石が握られているかを当て続ける。

同じ事を杭奈にやらせて見ると……

「もう、無理……」

「まだ3回目ですよ杭奈さん……」

一応、正解を当てる事が出来るのだが、とてもじゃないが房の集中力が持たない有様であった。

「ともかく、続けていけばいずれは慣れると思いますので……僕にはルカリオの事なんてわからないので何とも言えませんが、頑張ってくださいね……」

「うん……とりあえず、今日は色々ありがとう」

集中力が切れて焦点の定まらない目のまま、杭奈は気の無い声で感謝の言葉を贈る。

これが夕方頃の出来事。

そういつたいきさつで、杭奈は房をもつと積極的に戦闘に取り込もうとしたところなのだが、アレはかなりの集中力を要する技術だ。

長い時間使っていると確実に頭が疲労を起こして、集中力が長くは持たない。と、夜になってスバルに話してみたところ、帰って来た答えはこう言うものであった。

「そうですか……それについては、比較的簡単に房を強化する方法がありますよ」

にこりとスバルは笑う。それはなんだと言いたげな杭奈に対して、スバルは言う。

「子供を産ませる事ですねー。自分と少し似た匂いの赤ん坊の匂いを嗅ぐと、房の力は大きく強化されるのですよ。

子供を守るために、房が感知できる範囲が広がるそうです。ふふ、子供が出来れば強くなるだなんて、いい事ではないですか」

そう言うて、スバルは杭奈の頭を撫でまわし、てスバルは笑う。

「後は……まあ、気の持ちようですね。懐く事で進化するルカリオは、愛する者がいればそれだけで力を強く出来ます……」

まあ、数値で実証された変化があるのは房の感知能力のみですが、今添えを所望している貴方にはもってこいですね。

そうですね……では、今日は課外授業と行きましようか。

具体的な技術を得るための修行ではなく、精神的な修行ではあり

ますが……房の力を高めることは可能なはずです」

何をやるんだとばかりに首をかしげる杭奈の頭を撫でて、スバルは笑う。

「なに、貴方にとっては簡単な仕事ですよ。野性では、殺し合いなど当たり前のことだったのでしょ？」

ん？ と、杭奈は頭をかしげる。

「人間の世界ではですね。誰かに残業を頼む時は追加給金を出すものですよ……でも、思えば杭奈君からはまだ何も貰っていないと気付きましたね。」

ですから、杭奈君には修行ついでに体で払ってもらおうと。そういうわけですよ。まさしく一石二鳥という奴ですね」

キョトンとする杭奈に、スバルは笑って見せた。

「ですから、私と一緒にブラックシティに出張しましょう。場末のクラブハウスに行けば、賭け試合の一つや二つ当たり前のように行われておりますよ。」

そこで勝てば、それなりの賞金がもらえます故、そこで課外授業といたしましょう……」

流石にこれはやばい雰囲気がぶんぶんしたのか、杭奈は手を振って嫌だとアピールする。

「強くなりたくないのですか？ 大丈夫です……私はそこまで鬼じやありませんので、嫌というのであれば無理強いはしませんか……しかしながら、強くなるためと割り切って騙されたと思って付いて来てみませんか？ きっと、貴方にはよい経験になると思うのです。」

大丈夫ですよ。あなたの大ファンである私が、あなたを危険な目に合わせると思いませんか？ そんなことありえませんか」

単純な思考の杭奈でも、この提案には首をひねっていた。だが、『騙されたと思って』というフレーズに押されて、スバルの提案に従う事を選んだ。

スバルは杭奈との修行を終えた後、厚化粧のあばずれ*2風の女性に変身していた。何でも、その方がブラックシティを歩きやすいとのこと。

そんな理由でまるで別人になって、杭奈は変化に戸惑いながらの課外授業の舞台へ向かう空の旅へと赴く。

スバルは化粧の匂いを振りまきながらスバルはトリニティを駆り、彼女は風を浴びながら唐突に口を開いた。

「杭奈君……強くなるためには、目的が必要という事は前にもお話いたしましたね？」

ん？ と顔を上げるとスバルは神妙な顔をしている。

「強くなるための目的というのは当然のことながら食欲や性欲・睡眠欲の他にもまだまだあるんです……それは、以前にもお話した通り、大切なものに対しての感情です。」

先日は、自分の子供が生まれたら、その子に対して愛情を注いで上げると言いましたが……それ以外にも感謝という形で誰かに報いると言うのも大事なことです」

首をかしげる杭奈に、スバルは続ける。

「以前も言いましたよう、貴方は食事も住処も十分に与えられています。それはとても幸福なことなのですよ。」

そうしてもらえる自分の運命と、自分の主人に感謝しませんといけませんよ」

よくわからずに頷く杭奈をスバルは指でつつく。

「こう言った理由はですね。昔は私、ポケモンは道具って思っている時期がありましたね……」

健康管理のためにも、そんな扱いこそしてはいませんでした。が、ポケモンとの繋がりは絆ではなく完全にギブアンドテイクの関係だったのです。

いつだったか、プラズマ団……と言っても貴方には分からないで

すか。とりあえず、とある集団にポケモンとの関係のあり方を問われた時……

私は自身のあり方を見直し、ポケモンに感謝しながら生きることが心がけたのですよ。

その時から、ポケモンの士気も自分の士気も上がって勝率が上がりましたね。

ですから、貴方もこれから御主人や自分たちの周りにあまねく多数の人間やポケモン達へ向けて感謝できるようになって欲しいのです。

私は、かんしゃすることが強くなる秘訣の一つだと思っておりますから。

貴方がもしルカリオでなくとも、感謝の力はきつと役立つはずですよ。ですから、今日の課外授業は真面目にやってくださいね」

やっぱり杭奈はピンとこない。

「今は分からなくても、いつか分かります。自分のために頑張るだけでも強い貴方が、誰かのためにも頑張れる。それこそ、強さの秘訣だという事です」

そう言って微笑みながら、スバルは杭奈の肩を抱きよせ乱暴に横顔を撫でる。武骨な男性のような可愛がり方で杭奈に嫌そうな顔をさせるが、スバルはむしろそれを楽しんでいる風であった。

「ブラックシティが見えてきましたね……降りまじょうか」

そう言って、スバルは短い空の旅を終える。

降り立った場所は、ブラックシティではありふれた退廃的な歓楽街である。

大きなお店はないものの、所々にあるクラブ店では他では手に入らないモノが手に入るともっぱらの評判である。

警察も、この街ではそう言った小さな犯罪の取り締まりなどバカらしくてやっていたいられず、人身売買などもっと大きな犯罪にかかりつきりである。

また、この界隈のクラブでは、ポケモン同士を戦わせて賭けを行う店が多く、表に出るような綺麗なバトルではなく死者も出るような凄惨な戦闘が行われる。

悪く言えば凄惨で残酷。よく言えば刺激的だと言われている。

「とまあ、貴方にこれから出て貰うのはそういう試合なわけで……でも、貴方より強い子なんて、こんな酒場でドサ周りをするような輩ではありませんから」

そう言ってスバルはクラブの安酒を煽り始める。ホワイトフォレストのそれと比べると、炭酸もアルコールも匂いもきつい刺激的な酒の匂いに杭奈は眉を潜めた。

その様子に気づいたのかスバルは杭奈をボールの中に入れ、出番を待つ。場が盛り上がってきた酒場では、深夜0時を過ぎたところで例の試合が始まる。

表の試合よりかはレベルが低いものの、流血沙汰が日常茶飯事のこの試合では刺激が違うとかで、ブラックシティの裏の名物として不動の地位を占めている。

だが、それはポケモンの意思をないがしろにした戦いに他ならない。

「杭奈、よく見てみる？ 野性のポケモンの生活の厳しさも大概だが、ここの奴らもそう良いものじゃない……」

なぜなら、野性では勝てないと分かったら逃げることも降参することもできる。なのに、ここで戦う事を義務付けられた者は……あなる。

結構大差の付いた試合ならば、優しく終わらせてもらえるが……泥仕合となると酷いものだからな」

金網で仕切られた空間で戦い合っている二人は、いつの間にかブラックシティモードとなっているスバルの言うとおり凄惨な光景を繰り広げていた。

普通は相手が立てなくなれば終了だが、対戦者は立てなくなってもはいつくばってでも噛みつきに行っている。

「ああでもして戦わないと、賭けに負けた観客や飼い主からさらにひどいリンチの憂き目にあうものでね。言い訳のために傷つかなきゃならないんだよ……」

まったく、酷いものさ杭奈。お前はああいう風に生まれなくて良かったなあ、おい？」

スバルは杭奈の首筋を軽く叩いて力なく笑う。スバルは、酒を飲みつつ昔はあんなふうに戦わせたりのものだとうそぶきながら幾つかの試合が消化される様を見る。

「さて、お前の他の試合も終わった。私たちの番のようだよ……優しく終わらせてやれ……」

相手は、酷く酒に酔った人間の手持ちで、ムシャーナ。相手とは相性としてはどちらも悪くないはずだが、ムシャーナは今までの戦いを見て酷く怯えていた。

「杭奈。誰かから指示を受けて戦うことには慣れていないだろうが、今日は私の指示に従ってくれ。お前がどれくらい動けるのか、確認したいんだ」

そう言われて、杭奈は戸惑ったような複雑な表情をする。

「私の指示に従っていては負けそうだと思ったら、自分のやりたいようにやれ。大丈夫、相手は格下だ……私が保証する」

格下とかそんなの関係無しに杭奈は気が進まなかった。あんなに怯えている相手を甚振るのは、杭奈の趣味ではない。

野性時代に母親達が弱らせた獲物を捌った時は、腹が減っていたせいか気分が高揚していたが、同じ弱い者いじめでも必要に駆られていない今と昔では事情が違う。

そんな事を思い出し、もやもやした想いを抱えながらあれよあれよという間に杭奈は金網のケージの中へ、これが閉じられたら試合開始だ。

「難しく考えるなよ杭奈。とにかく、特殊型のポケモンには暇を与えずに突っかかるしかない。特に、サイコキネシス使いには後手に

回ればやられるぞ。

試合を開始したらとりあえず何でもいい、適当にやり易い攻撃を試してみろ――」

スバルが下した指示は、具体的なモノではなかった。杭奈にとってはむしろこちらの方がやり易くて助かるが。

杭奈に命令が下された後に、金網はすぐに閉じられた。具体性の無い杭奈への指示に対して、敵の指示と言えば――

「ジャック!! サイコキネシスだ」

と、分かり易いもの。まず、杭奈が接近しようとして、サイコキネシスの見えない手に飛ばされた。

杭奈はそれを気合いで振り払って、吹っ飛ばされた先にある金網に対して受け身をとる。サイコキネシスは一度振り払ってしまえば数瞬再発動する事が出来ない。

その僅かな間を、エスパータタイプは逃げ回るなり出来るだけ遠くに吹っ飛ばすなりで時間を稼ぐのが主流だ。

だが、この狭い金網の中ではどちらも難しく、哀れムシャーナは杭奈の攻撃は真っ向から受けて立つしかない。

杭奈はまず金網を蹴って摩擦を無視した神速のスタートダッシュ。サイコキネシスの再発動に向けて集中力を高めているムシャーナに抱きついた。

浮力では支えきれずにムシャーナが落ちる。杭奈の胸の棘がムシャーナの首に刺さり、声にならない悲鳴を上げた。

「ほう……あのしがみつく攻撃はコマタナの技じゃないか。杭奈め、いつの間に覚えた？」

呑気にスバルは独り言。下草刈りに雇っていたキリキザンと、その部下のコマタナ辺りから習った技だろうと推測する。

杭奈に攻撃された相手のトレーナーは、それどころではなさそうな気配だが。

「おい、振り払えジャック!!」

ムシャーナのトレーナーが言うが、杭奈は気にすることない。そのまま抱きしめる力を緩めないで噛みつき、更なる苦痛を相手に与えた。

普通に戦っても勝てるのだが、サイコキネシスで戦うエスパータイプには、この抱きつきというのは非常に効果が高い。

サイコキネシスで四肢を引きちぎるような桁外れの力を持っているポケモンならばともかくとして。

普通のポケモンがサイコキネシスを使う場合は、相手を飛ばして何かに衝突させてダメージを与える必要がある。

その攻撃方法の都合上、今杭奈がそうしたように抱きつかれると自重も加わって加速度が半減されてしまうのだ。

如何に対象との距離が近ければ近いほどサイコキネシスは強くなるとは言え、スピードが無ければ何かに当てる前にサイコキネシスを振り払われてしまう。

「いいぞ、杭奈。そのまま首を振れ！！ 女犯す時腰を振るように、だ！！」

何やら酔って興奮しているスバルは相変わらずのブラックシティモードで杭奈を応援する。

「そうすれば痛みで相手は集中できないはずだ。その状態でサイコキネシスを放つても威力はたかが知れている。

敵は密着されても使える電気技なんかを持っているわけでもないからな。そのまま振り払われるまで、離す必要はない」

と、スバルの言う通りムシャーナは杭奈を振り払おうとする事に夢中で、まるで攻撃をする気配が無い。

抱きつかれては催眠術もまともに使えず、恐らく持っているであろうシャドーボールも暴発して自分自身もダメージを食らうだろう。タイプ相性の関係で杭奈の方はダメージ少ないだろうし、技を放った後の隙に何をされるのか分かったものではない。

体をぶんぶん振りまわして、やっとムシャーナが杭奈を引き剥がした時にはスタミナの差は歴然であった。棘が食い込んだ傷も痛

々しい。

「杭奈、ムシャーナの血は呑み込んでないか？ その血で眼潰しをしてやれ」

痛みと疲れて集中力が切れかけのムシャーナは、念を実体化させて金網の中で念の飛礫を降らせる。

不覚にも背後から来たそれを喰らってしまった杭奈だが、房を逆立て前後左右に注意を配ればそう難しいものではないし、数秒ならば房の集中力も持つ。

空中に飛礫が形成され、向かって来るまでの間に杭奈はきつちりと避け、飛礫の雨が止んだと同時に杭奈は口の中の血を手塗して投げる。

惜しくも眼には当たらなかったが、眼を瞑って出来たムシャーナの隙を突き、杭奈はムシャーナの腹にアッパーカット。

最後の一発で、ムシャーナは綺麗に沈んだ。杭奈、余裕の勝利である。

勝利した後も半ば放心状態のまま、杭奈はそのクラブを出た。

金が手に入った瞬間は嬉しそうであったスバルも、店を抜けると憂いげな表情で溜め息をついている。

「勝つても楽しくなかっただろ？ お前が育て屋で戦う時は勝つても負けても楽しそうだったのに今日の浮かない顔といったらないな」訪ねるスバルに、杭奈は短く答える。ふじこを外に出していないため、通訳は出来ていないが、スバルはああと頷いた。

「楽しめるわけがないって顔をしているな……いいんだよ。楽しまなくって。ああいう環境に生まれずに済んだこと。

自分を強く育ててくれたこと。そういった事をしてくれた者達に感謝し報いらせるために、あの光景を見せたんだ。

今回の経験が感謝に繋がり、強くなるきっかけとなってくれれば……。

例えば杭奈、もしもお前がジョンに出会っていなかったら多分あのムシャーナには負けていたぞ」

ハッとして、杭奈は自分の手を見た。

「ジョンがどうしてお前に強さを与えたかよく考えてみるよ……そして、そのありがたみを再認識するんだ」

しみじみとスバルは連ねて微笑む。

「ジョンがお前に強くなつて欲しかったからだろうな。お前は、ジョンの気持ちを感じて理解して、感謝するんだ。」

そして、感謝するジョンのためにも更に強くなつてやれ。もちろん、お前を野性からこちら側の世界に引き込んだ主人に対してもな」
せつかく杭奈はスバルのあり難いお言葉を賜ったというのに、言われた言葉の意味を考えるよりも、戦わされていた悲惨な境遇のポケモンについての事へ考えを張り巡らせながら、帰り道に行くこととなる。

空の旅の最中、ボールに入れられて中で眠るうにも、その事ばかりが脳裏に浮かんで中々離れないのであった。

次の日の昼前、あのポケモン達の事をなんとなく考えながら、杭奈はペテンと合流する。

昼食マッチの時以外は、お互い別の教官やライバルの元で修行していた二人は昼前の時間は貴重である。

「どしたの？　なんか元気ないね」

しかし、少々浮かない顔の杭奈は、ペテンにいとまたやすく浮かない気分を見抜かれてしまう。

「あ、いや……」

昨日の個人的な課外授業の内容を話すのも少々面倒なので、杭奈はこう尋ねる。

「ねえ、ペテンは戦う事って楽しい？」

「うん」

ペテンは笑って即答した。

「野性の頃は殺伐としていてそこまでの余裕はなかったんだけどね……うん、でも今のうちに競い合う戦いは好きよ」

「だよ、僕も大好きだ……」

結局は、そういうことなのだ。自分よりも遥かに酷い状況に生きるポケモンを見せつけられ、深く考えてしまった杭奈だがペテンの言葉で吹っ切れた。

こんな楽しい状況に居られる自分の運命は貴重なものなのだ。そのために導いてくれたモノにはひたすら感謝するべきなんだと。

「で、それがどうしたの？」

杭奈の気も知らずにペテンは首をかしげる。

「いや、ありがたいことだなんてさ」

主人が野性からこうして生きられる道を示してくれた。手持ちの生活も、あんなブラックスティの底辺じゃなくまともな立ち位置だ。そうしてくれた主人が自分に強くなる事を望んでいるというのなら……頑張ろう。

今までおぼろげながらに思っていた感情が、杭奈の中で確かなものとなる。

その想いがまた、杭奈の房の感知能力を高めるのだ。

杭奈が頑張ろうと思ったところで、ペテンはにこやかに話を切りだす。

「あのねえ、杭奈君」

31

「あのねえ、杭奈君。今日から、負けても良いから強い相手に挑んでみないかしら？」

ペテンが進化してから、8日目。まだ袴は催眠術を習得しきれておらず、10数回に1回相手がウトウトしてくれるくらいである。それでも、成果があった方なわけで、早く進化できる日を心待ちにしている袴には日ごとに成長する感覚が嬉しかった。

杭奈とペテンの二人はというと、これまでの戦績は5勝2敗であった。

杭奈と比較して僅かに実力が劣るペテンが微妙に足を引っ張ってしまう事はあったが、杭奈は常にペテンを護るように意識した立ち回り。

それでいて、ペテンを過小評価したりせず、出来る事はさせてくれる気遣い。

ペテンによる杭奈の評価は、リスクの高い戦法を有効利用できる技術と経験と、それを振るう雄姿に改めて感心しているといったふうである。

元々嫌いではなかった杭奈を無理矢理好きになろうとしていたペテンの気持ちも、今では無理が無くなっていた。

気がつけば、身長差を気にしながらも、二人は手をつないで歩く事が多くなる。

朝夕で個別の教官の元で修行していても、昼食の時間だけは絶対にそばにいて共に闘うのが随分前からの当たり前のような感覚だ。

しかし、杭奈がブラックスティのクラブで課外授業を終えた翌日の6日目からペテンは酔狂な事を言い出した。負けても良いから強い相手に挑もう——と。

杭奈に対してかなり気を許しているペテンだが、杭奈の強さがどれほどのものかを見極めたくなくて、ついつい無茶な戦いを挑むことを提案したのだ。

負けても良いから頑張ろうと。そんな試合でも、杭奈はいつものように動けるのかと、杭奈を見極めるかのように強引に対戦相手を

決める。

そして、瞬く間に5勝0敗から5勝2敗に。

今日もまた、なんの間違いか、ウルガモスとオノノクスの二人組。モヌラとゴヅラというこの育て屋でも最強クラスのペアに勝負を挑んでしまった。

二人は当然苦戦を強いられる事になるが、今日の戦いがペテンにとってはトドメというべきか。ペテンの恋心を完全に射止める結果となる。

開始早々、泥を浴びる事で炎を防ぐ二人。しかし、杭奈はそれで弱点をカバーできるからともかく、ペテンはモヌラから弱点タイプの攻撃を見舞われる。

池の上に大きく飛び上がって蟲のさざめき、直接攻撃に秀でたオノノクスことゴヅラが後ろに下がるという奇妙なフォーメーションから繰り出された攻撃は音。

攻撃力は低く、連続で当て続けなければ多くのダメージは期待できないが、音はどうにも防ぎようがないし、しかもタイプのペテンの弱点だ。

開始早々幻影が剥がれて正体がばれてしまい、杭奈は最早正攻法で倒すしかないと察する。

蟲のさざめきの大きな音に顔をしかめながら、杭奈はモヌラへ向かってストーンエッジを投げるが、距離が遠くて避けられる。

接近すれば、恐らくゴヅラの地震が放たれる。

なかなかム力つくフォーメーションであった。耳を塞いで防御。一辺倒のペテンはかろうじて口から炎を吐き出す。

意識をもろろとさせながらモヌラへ向かって吐いた火炎放射は、さざめきながらさっと避けるのも簡単だ。優れた複眼ゆえの視野の広さで、同時に杭奈が放ったストーンエッジもかわした。

体重が重い上に尻尾が巨大なゴヅラは、この沼地の中でも安定した立ち姿。地震を使われれば恐らく下手な地面タイプよりも的確に放ってくるだろう。

近づくのは非常に危険だが、杭奈は接近戦に賭けた。

「地震なんて知った事か!!」

と叫び、モヌラに突進する。タイプの構成上、蟲タイプに対しては非常に強い杭奈は、モヌラのさざめき攻撃は難なく突破できる。

ゴヅラの地震が怖いが、行くっきやなかった。

手にはストーンエッジを構え、足でメタルクローをスパイク代わりにして、足元が不確かな場所でも早い走行を可能にする。

杭奈は飛び上がり、手に持った小さなストーンエッジを投げる。当たって出来た隙に翅に掴みかかった。モヌラも翅を掴めば蟲のさざめきは使えない。

着地の際、地震を使われる恐れがあった。だが杭奈はモヌラを下にして落下。地震を使えるモノなら使ってみるとばかりに沼に沈める。

高温の体温によってして沼の水が沸騰してはぜる音が響いた。

絶好の地震のチャンスだったが、仲間想いのゴヅラにモヌラごと巻き込む地震を使うなんて事は出来なかった。

作戦というには単純だが、一か八かの杭奈の賭けは成功であった。怯ませること重視であったストーンエッジは、サイズも小さく威力には乏しい。

出来そこないの威力のためにやられてこそいないモヌラだが、泥で重くなった翅はもうさざめく音を奏でてくれないだろう。

モヌラにトドメを刺したかったが、それよりも先に、今は襲ってきたゴヅラをなんとかしなければ。

ゴヅラはよくしならせた尻尾を振り抜く反動で、首をギロチンの如く時計回りに振り抜いて、トマホーク*3のような牙を用いた瓦割り。

杭奈の脇腹を狙ったそれは、タイプの関係もあって杭奈にとって

は文句無しの一撃必殺級の破壊力で。

杭奈はモヌラの体の上に伏せ、それを避ける。ゴツラは回転の威力を殺さないままドラゴンテールを続けて繰り出す。

横たわったモヌラの隣に寝がえりをうつように転がって、杭奈は避けた。

沼に顔を浸しながらドラゴンテールをやり過ぐすと、ようやく杭奈は立ち上がった。モヌラを掴んだ拳は少々火傷している。

一連の動きの最中に、翅が泥で汚れて炎も虫も、ついでに飛行技も使えなくなったモヌラは残された攻撃手段として、四つん這いになって杭奈へサイコネシスを見舞う。

そのサイコネシスで杭奈を拘束。更なる一撃を見舞わんとするゴツラの補助に入った。

これまで乱戦の様相を呈し、誤射を恐れて攻撃をためらっていたペテンとて、何もしていなかったわけがない。

悪の波導がナイトバーストが使えれば、杭奈に多少のダメージへ目をつぶってらって誤射も恐れず攻撃出来たのが齒がゆかった。

だが、ようやく攻撃のチャンスを見つけてペテンの心は小躍りしている。小走りで接近していたペテンは、ゴツラをサポート中のモヌラの背中を踏みつぶす。

沼に四つん這いだったモヌラは再び顔を沼に沈められ、サイコネシスが途切れた。泥で体温が落ちていたおかげか、踏みつぶした足は火傷はしない。

サイコネシスを解かれた杭奈はしかし、遅すぎた。空中に浮かされた杭奈は、すでに自由落下ではかわしきれない間合いまでゴツラの牙が迫り来ていた。

杭奈の脚がゴツラの下顎を掠める。ずるりと僅かに滑るゴツラ。杭奈の脚も滑ってゴツラの顎から離れた。

ゴツラは尻尾の慣性で回転を続け、転びながら杭奈に技を見舞った。これが、平地エリアでなければ勝負は決していただろう。

もっとも、池沼エリアは重量と飛行で足場の影響を少なくできる

ゴツラ側に有利に働いていたので、それに負けずに戦いぬいた杭奈の起こした偶然は運の良さよりもむしろ称賛に値した。

足で突き離し、沼で滑り、それによって殺された瓦割りの威力を、杭奈はなんとか手の甲に生えた鉄の棘で防御する。

杭奈とゴツラの巨体が沈み、派手に飛び散る泥飛沫。転んだゴツラの脇腹には、ペテンのシャドーボールが突き刺さる。

泥の中でグハアッと息を吐いたゴツラは、誤って泥水を大量に飲みこんで大きくせき込んでしまう。

せき込んでいる間に、杭奈は泥から躍り出て、モヌラにストーンエッジを突き付ける。ペテンはゴツラにのしかかってシャドーボールを構えた。

「俺達の負けだな。まさかこの場所で負けるとは……」

「あちゃー……こんな調子じゃ地下鉄で勝ち抜けないよ」

モヌラとゴツラは素直に負けを認める。まさかまさかの杭奈とペテンの勝利であった。

当然、その時の二人はハイタッチで互いを称えあいながら喜び合った。

戦利品はたかが木の実一個だが、強敵から勝ちを拾えたというのは何物にも勝る美酒なのだ。

そしてペテンは、この戦いは無茶な要求を叶えてくれた杭奈の評価を大幅に高めることになる。

今まで、『頼りがいのあるポケモンかもしれない……』程度であったペテンの杭奈に対する評価は、『この人になら体を委ねても良い』と思えるようになる。

その心情の変化を伝えようと、昼食の最中も、『子供が出来たら名前はどうしようかね?』とか『今日は貴方の穴倉に泊まっても良い?』とかそれとなくそれらしい事を言ってみたのだが、杭奈は鈍い。

更に続けて『素敵だったわ』とか言っても無駄。『貴方に子供が

出来たら強くなりそうね』でも、駄目。

『私のわがままに付き合ってもらった分、貴方のわがままも聞いてあげなくっちゃ』でも効果は無いようだ。

ペラップのお喋りがゴーストタイプに効かない事はあるが、ペテンの言葉は毒タイプではないはずなのだが。

杭奈の方は言えば、『焦ったら失敗する』と言う神の声と、『良いから犯っちゃえよ』という獣の声の板挟みにあっていた。

どうすればいいのかとやきもきしててたまらない。そして、ペテンの言葉が耳に入りにくくなったせいで、言葉の裏に含まれた意味に気付く事が出来ない。

そんな風に、微妙な温度差のある二人だが、その温度差は互いの心ひとつでどうにでも覆る微笑ましい温度差で。

もじもじしている杭奈を可愛いと思える心さえあれば、しばらくはこのままというのも面白そうな関係であつた。

しかし、それではこの夏の季節、バニリッチが溶けてしまう。攻撃が効かなくなる前に、殴って砕かなければなるまい。

夜になると空は暗かった。月齢は新月だ。思えば、静流が去ってからもう一ヶ月半も経っているというわけだ。

ジョンなしでの物足りない修行を続けていると、突然育て屋が襲撃されたかと思えば、全く意味の分からないままにイッシュ地方を救ってしまったと告げられた。

そして、そのお礼にとお見合いの場をとり持つてもらったら、よく知っているペテンを紹介される。

少し強引なところもあったけれど、結局は良い関係に収まる事が出来た。ペテンと全く会話をせずに、空を見上げながら杭奈はそんな事を考えていた。

「今日は月が出ていないわね……」

「ん……ああ、そうだね。そう言えば僕は波導で周囲の状況が分か

るから大丈夫だけれど、ペテンは前見えてる？」

「ちよつときついけれど……走らなければ大丈夫」

「そう、でも……転ばないように気をつけてよね」

そんな事を言った杭奈に、気にするなとばかりにペテンはちよつかいを出す。

「ふにゃあ」

そんな風に情けない声を出してしまったちよつかいとは、後頭部の房を揉みほぐすこと。

「転んだ程度じゃ問題ないでしょ？ 私は、それなりに強いんだから……貴方には、勝てないけれど」

「……ごめん、気に障ったなら謝るよ」

「気に障ったけれど、氣遣われている事がそれ以上に嬉しかったからいい」

ペテンはツン、とつつくように言って鼻で笑う。やがて洞窟入りアにある、寢床として与えられた岩屋へ2人はたどり着いた。

7月の始め。昼間は暑いが、夜は流石に涼しい。それでも、風通しの良いところが恋しくはなるもので、2人は寢床に入らずひんやりとした岩に肩を並べて腰掛けた。

「新月はね」

「ん？」

「ダークライが活動をする時間帯……」

「うん……それで？」

「ホワイトフォレストに流れる、黒い夢の気というかパワーというか、そういうものからダークライが守ってくれるの。」

逆にブラックシティは、ビリジオンがブラックシティに流れる白い力から守ってくれるんだけれどね……」

唐突に、とりとめのない事をペテンは話し始める。

「そんなの、誰から聞いたの？」

「主人から」

最低限の応答をして、ペテンは言葉を切った。

「貴方はダークライを救ったわけだし……今宵、新月の日。お礼代わりに素敵な夢が見られると思わないかしら？」

「例えば？」

「……素敵な夢を見るには、素敵な経験をしなきゃ」

ペテンはそつと杭奈の顔を寄せて口付けを交わす。

「これが？」

ふわりとした、まるで池沼エリアの沼に脚を置いたような頼りないキスの感触。

杭奈の言う『これが？』とはあんまりな言い草だが、ペテンも実際そう思っている。

「そつよね。物足りないわね」

物足りないから、もつと素敵な事をしようよ、と流し眼でペテンは誘う。

「その経験つて、せつかく涼しいのが台無しになるような事？」

「うん、私はそれがいいと思う」

しばしの無言。ひねった表現というには少し安直過ぎるが、杭奈の言葉はペテンにがつついていいるとは思われなかった。

興奮しちゃダメだなんて思いながらも、激しくなるうと呼吸が急かす。気を抜いてしまえば、呼吸はきつとハアハアとパンティングと変わらない様相を呈す。

杭奈は繋いでいた手を離し、ペテンの腕を首の後ろに回す。自身はペテンの腋に挟まれる形となってそのぬくもりを享受する。

腋に挟まれたら、ペテンの心音が聞こえてくる。興奮しているのだと丸わりのリズムを刻むその心音は、杭奈を後押ししてくれた。

「僕のこと、魅力的だと思ってくれてる？」

「ええ、もちろん」

その言葉に促されるように、杭奈はペテンに口付けを求める。

先ほどとは打って変わって、ゆっくりとマズルが動き、重なり合

うまでには時間がかかった。

その夜、二人は激しく愛し合い、卵を作り合った。

第5話（後書き）

*1 ルカリオの房は周囲の状況のみならず、鍛えれば相手の感情も感知可能

*2 悪く人ずれ^ずしていて、厚かましいこと。また、そういう女。すれ^ずっからし。もとは男女い^ずれにも使った。

*3 斧の一種。刃先が反っている

第6話（前書き）

3 2 3 4 が存在しないのは全年齢版の仕様です。

第6話

「孵化作業員から聞きましたよ、身籠っているそうですね。卵が産まれたら、管理棟の孵化作業員に何なりとお申し付けくださいませ」にこりと笑って、スバルはパンフレットの写真を見せる。

「我が育て屋の、孵化メニューの中でも最高品質の徹底健康管理コーナーも、貴方への恩義として無料でご提供させていただきます。もしも子供の顔が早く見たくて見たくて仕方が無いのであれば、シヤンデラのサイファー・タリズマン兄弟が取り急ぎ孵化をしてくれますよ、どうでしょう？」

そんな必要はないと、杭奈はガウツと鳴く。スバルはパイプの意匠が施されたUSBケーブルを啜えるふじこを通してその鳴き声の意味を文字にして表示する。

「『マWジWイWラWネWーW』分かりました……ですよね。やっぱり自分の卵は自分で温めたくなりますよね。ですが、母体の健康については一応お気を付けを。」

ペテンちゃんにはしばらく戦いは控えて、よい食事をとってくださいと伝えてくださいね……

うん、こういう時こそ昼食マッチで夫が餌を運んであげると格好良いですね」

そんなに僕を戦わせたいのか、と杭奈は肩をすくめる。

「いいではありませんか……交尾して終わりなんてのはルカリオの男がすることじゃないですよ。」

戦って餌を勝ち取り、女性を保護してあげる。それも中々乙なものだと思いますよ。それに、子供を持ったルカリオは房の力も強化されるではありませんか」

杭奈は分かっているという意思を込めて鳴き声を上げる。

「『んあこたあ、テメーに言われなくても分かっているだよ』……は

は、ですよ。杭奈君もペテンちゃんも子供は大事にする種族ですし、本能的に分かっておられるようで」

微笑ましそうにスバルは笑い、期待を込めた眼差しでスバルは杭奈を見る。

「親が子供のために強くなるというのは良いものですね。今の貴方は、私と似ているけれど、違うところも多いものです。」

親がろくでもないせいで強くなった私にしてみれば、貴方の子として生まれる子供は羨ましい限りですよ……。

さて、貴方にこんな言葉を教えましょう。鋼の刃というものはですね、自分よりも固い槌によって鍛えられ、柔らかな砥石によって研ぎ澄まされるものなのです。

貴方は、目標に出会い師匠に出会い、戦いのノウハウを叩きこまれて鍛えられました。

私は、親に盗みを強要され、社会の厳しさを叩きこまれて鍛えられました。

貴方は、ペテンを得て強くなる意欲を得ました。

私は、自分より弱い子供を拾って強くなる意味を得ました。

きつと、ペテンの子供が生まれれば、貴方はまた強くなるはずですよ。

キリキザンの刃のように、自分の刃よりも柔らかな石によって研ぎ澄まされるはずでございます。

あなたに更なる切磋琢磨と研鑽がありますよう、頑張ってくださいませ。私も、応援しておりますよ」

杭奈は、スバルが何故自分をこれほどまでに気に入っているのか、あまり理解はできなかった。

しかし、強くなる事を応援され、子供が出来たことを祝福されていると思うと悪い気はせず、はにかみながら頷いた。

スバルが言った、『貴方はまだ強くなるはず』という言葉は、その言葉通りというべきか。

子供が出来たとわかってから、杭奈の房の力は知らず知らずのうちに強化され、徐々に戦闘中も無理なく連続発動できるようになる。そうして、杭奈は気のせいでは説明がつかない割合で多くの勝利に導かれたようである。

一日に複数の昼食マッチを行い、安静にしているペテンに木の実を届ける毎日。

無敗ではないけれど、刻々とその開催日が迫るダークライ・ビリジオン感謝祭に向けて、杭奈の動きは日ごと確実に強くなっていた。

35

断続振動孵化法*6により、珠のようなゾロアの子が生まれてから数日。

その子供をファントムと名付け、手がかかる時期を抜けないうちから戦線に復帰したペテンと共に、杭奈は子供の分の木の実を勝ち取る毎日だ。

ペテンはまだまだこの子が育つまでは現役を止められないと、育児と修行の二足の草鞋は履き続けるつもりらしい。

まあ、無理しないように、と人間の職員から注意され、それを最優先にしてペテンは日々を過ごし、ペテンとの初体験を迎えてから1ヶ月。

ジョンと再開の約束をした日であるダークライ・ビリジオン感謝祭が開かれる日が訪れた。

開催場所は、普段は閑散としているブラックシティとホワイトフオレストの境界点。

夢の世界、ハイリンクの影響が最も強いとされるこの土地は、夢の世界から流れ込んだ欲求が人々の潜在意識に夢や幻覚という形で

非常に強く作用した。

かつては、その影響が町の各所に点在しており、まさしく混沌とした状況。

いかなる聖人でさえも、黒の影響を受ければ刺激と変革を掲げ、暴力的になり、いかなる悪人も白の影響を受ければ平穏と保守を掲げるようになる。

夢の影響による神のみぞしる運命の悪戯の心ひとつで被害者と加害者が入れ替わるこの土地。

ある意味では釣り合いが取れているが、心を壊す者も少なくなく酷い有様であったという。

開拓時代も終盤を迎えた頃に貿易商がこの国に連れて来た、悪夢を操るポケモンであるダークライ。

そのダークライが街の半分から黒い夢をその身に取り込み、ホワイトフォレストを作ったとされている。

そして、ホワイトフォレストの空気に惹かれたビリジオンが、ちやほやされるダークライに嫉妬して、自分もちやほやされようとブラックシティを作ったと言われている。

ダークライはクリスマスが終わってすぐに現れ、新年の11日までの間にホワイトフォレストを形作つたので、この街では悪い子に悪夢を届けるダークライの意匠を施した黒いサンタクロースやダークライサンタなどの名物がある。

その他、もう一つの名物として知られるのが、ビリジオンがブラックシティを作り終えた日。今日から二日間行われる感謝祭であった。

このお祭りは、ブラックシティに住むビリジオンに対してホワイトフォレストの酒を。ホワイトフォレストに住むダークライに対してブラックシティの酒を奉納する祭りである。

その奉納の儀式は、ビリジオンに対する奉納の儀式に格闘タイプ。ダークライに対する奉納の儀式のために悪タイプのポケモンが人間の介添えを担当するのだが、その介添えのポケモンは祭りの1日目

に闘って決めるのだと。

自分の肌に合わない街に暮らす事で弱り切った二種のポケモンの格闘もしくは悪の力。

それを補給するべく、大会で勝ち抜いた最も強いポケモンが御神体に向かつて最高の技を放ち、砕け知った御神体を大地にばらまくのだ。

去年はスバルのトリニティがダークライのために御神体を噛み砕き、噛み千切り、悪の波導で粉々に粉砕した。

格闘部門の方はと言えば、ピジョットを思わせるオールバックの髪形をしたトレーナーのエルレイドが格闘の御神体を跡形もなく切り裂いて終了したのだとか。

今では観光客を呼ぶために興行の意味合いが大きいその祭り。この日ばかりはブラックシティも全力で犯罪を監視され、安全が確保される。

ジョンは去年の祭りで好成績を収めており、惜しくも優勝者にやられて3位に甘んじたものの、今年こそはと意気込んでいた。

さて、この祭りと育て屋の関係だが、この日ばかりは主人と共に一時的に預かりを解除するトレーナーが多く、育て屋のポケモンが4分の1ほど消え去る日だそうだ。

杭奈の主人もその口で、一人のトレーナーが一部門に一匹ずつ出場できるように静流を悪タイプ代表に。杭奈を格闘代表としてに連れて来ている。

本来なら、ジムのエースであるエンブオーを出場させるつもりだったのだが、スバルの強い推薦があったために杭奈を出してみることにしたのだとか。

もちろん見学はいくらでも可能なので、催眠術をようやく覚えた袴も訪れているし、静流などジムのポケモンも多数連れている。

杭奈はペテンと一緒にオリザに連れられ祭り会場に付いて早々、杭奈は波導を感知してジョンを探し当てた。

杭奈とジョンはこの祭りで約束通り会えた事に小躍りしながら、この1ヶ月と数日の間に起きた事を得意げに話した。

ジョンが育て屋を卒業する前は袴と仲の良かったペテンと紆余曲折あって結ばれ、子供まで生まれたという事を説明するとジョンは自分のことのように喜んで、その親子を見せろとせがんだ。

顔を見せてやれば、可愛い子だとお決まりの褒め言葉を言って頭をなでる。

人見知りするフロントムはジョンの事を怖がっていたが、ジョンは気分を悪くすることなく杭奈をひたすら褒めていた。

ペテンはというと、本来の主人が来ていないためか出場する事はせずただの見学扱いで、杭奈を強く、魅力的にしてくれたジョンに感謝しつつ、喧騒の中で不安そうな子供をひたすら愛でている。

主人のオリザは、パイプを組んで作られた粗末な金属製の足場に腰をかけて、観戦モードに移っており、ジョンの主人と一緒に自分のポケモンや仕事に関する話をぎこちないながらに話していた。

ポケモン達が勝手に仲良くなったせいか、主人同士はまだまだ表情が硬い。

それと引き換えポケモンの方はジョン自ら気軽にパシリを申し出るくらいには仲がいいといった感じた。

「はい、杭奈。後ペテンにも……袴君は綿あめだったね」

大量のお菓子を抱え、ながらジョンは笑う。

「あ、ありがとう……」

杭奈にチョコバナナを。ペテンとその子供で、ペテンの主人が名付けてくれたフロントムという名のゾロアには杏子飴を。

袴には綿をそれぞれ渡してジョンは座りこむ。自身はソースせんべいを買っており、座りこむと同時にガリリと豪快に齧りついた。お金の使い方をよく知らない杭奈と違って、ジョンは身振り手振り

だけで買ひ物が可能なほど人間社会に順応していて、こういったスキルはレンジャー時代に付いたものだ。とジョンは笑顔で語る。

強さの面ではともかく、ジョンの器用さにはやっぱり敵わないなと杭奈は思ふのであった。

強敵と思われる者もちらほらと見かけられる中、ジョンもやつぱり強敵というカテゴリに位置するようだ。

なんの間違いかトーナメントで最初に当たった相手のポケモンも性別が違つとはいえコジョンドだった。

いわゆる同族対決と言えば白熱してしかるべきだが、ジョンはと言えば腕から伸びる体毛でパシパシとはたいて苛めぬき、それだけで勝利をもぎ取ってしまう。

この試合は、トレーナーかポケモンの降参及び、戦闘不能に場外負けで勝負がつくのだが、ジョンの場合はポケモンの降参負けである。

傍目には大した傷は見えないが、毛皮の下の皮膚相当な痛みだったようで、負けを認めた頃には痛そうに顔をゆがめている様子が見て取れた。

少々やり過ぎたかとジョンは苦笑していたが、女性相手に傷をつける事は最小限にした上での完全勝利、見事なものである。

杭奈の印象は、昔と変わらず『強い』というもの。とは言え、何のこと無いとばかりに涼しい顔して帰ってくるジョンは前よりも少し勝てる気がして見えた。

杭奈は『きつと自分が強くなったのだろっ』と考えて、自身を奮い立たせることにした。そうでも思わないと、尻ごみしてジョンには絶対に勝てない気がしたのだ。

ともかくにも、全てのポケモンが弱点タイプを使って来るこの戦いで、どこまでいけるかは不安であった。

でも、きつと大丈夫さと気合を入れて、杭奈は順番が回ってきて

舞台に飛び降りた。

36

相手はダゲキ。このイッシュ地方ではよく見かけられる真つ青な人型のポケモンである。胴着のような物を蔓草を編んだ縄で縛っており、それを縛り直して気合いを入れる習性をもっており、試合に望む彼もまた図鑑通りの動作をした。

対して杭奈は、静流がそうしていたように一瞬の呼吸で気合いを込める。今となっては、もう長く息を吐いてどうのこうのという気合いの込め方では、思わぬところで隙が出来ると悟ったようだ。

更に今までの違いを上げるとすれば、後頭部では最初から房に力を込め逆立ちというほどでは無いが重力に逆らって浮かせているところだろう。

自分が育て屋を卒業したところとは別物である杭奈の様子にジヨンは目を見張った。

さて、審判の試合開始の合図で試合が始まると、杭奈はダゲキと距離を詰める。

杭奈は、育て屋での戦いが板についてしまったせいか指示を受けるのが苦手な反面、命令無しの分だけ行動が僅かに速い。

そして、命令されない方が強い理由の一つとして、杭奈の戦闘スタイルと能力のシナジーである。

敵に合わせて動くと言う杭奈の闘い方は、いちいち指示に従ってなんていられないのだ。接近した杭奈は、ダゲキが攻撃を出しにくい位置へ。

「おい、ロッキー。距離とれよ!!」

なんて、ロッキーという名前らしいダゲキに命令が下されダゲキ

は後ろへ下がるが、そうはさせるかとばかりに杭奈は前へ詰める。

左へ動けばそれに合わせて杭奈も動き、杭奈とダゲキは一向に距離が離れない。

「くそ、それならインファイトだ」

ダゲキの主人は再度の命令。ダゲキがインファイトが使えるとは知らなかった杭奈だが、彼は戸惑うよりも先に動く。

ダゲキが下段へ手刀を突きだす前に、杭奈は身を低くしていからせた肩口から体当たりをぶちかました。

杭奈の体当たりを食らってダゲキの体勢が崩れかけるが、大したダメージではない。杭奈は更に後ろに下がろうとしたダゲキを執拗に追い、体当たり。

バックステップの最中で後ろに重心がかかっていたダゲキはついに転んでしまった。杭奈は素早く側面に回り込んで、斧刃脚。

というよりはそのままスタンピングといった方が正しいか。杭奈は相手に対して情けをかけてわざと外したものの、次は当てるだろう。

結局、圧倒的な実力差を理解してしまったダゲキは、トレーナーの意向を無視して降参してしまった。

ジョンと同じく初戦で圧倒的な実力差をアピールした二人は、前回優勝者が参加していないことも相まって、大会の優勝候補と観客に囁かれるのであった。

「杭奈……なんなんだ、あの戦い方は？ 相手が下がったと思ったら、自分は進んで……そのまま何度もピツタリくつついてさ」

杭奈が帰ってきてても勝つて当然と言わんばかりに、ジョンは祝福ではなく質問で杭奈を迎える。

「前から房は鍛えていたんだけど……僕、子供が生まれてから波導を感知する範囲が広く正確になって……相手の動きや考えもある

程度読めるようになったんだ……

スバルさん曰く……子供が生まれると、子供を守るために自然に
そうなるものなんだって」

「ついでに、私の幻影も強化されたのよ」

ルカリオとゾロアークの熱々な夫婦はそう語って笑う。

「へえ、アタイらズルズキンにはそういうの無いから羨ましいわ。
アタイも子供産んだら酸が強くなるかしら？」

「ふふん、静流。羨ましいでしょ。せいぜい酸を強くすることだね」
僅かに鼻息を荒くして、得意げに杭奈は言う。昔は静流にからかわれてばかりだったが、今となつてはその面影もなりを潜めている
ようだ。

「ま、いくら相手の動きが分かるつたって、戦闘中は相手の動きが
速過ぎて普通に戦っていると相手の動きが読めてもあまり意味が無
いんだけど……

ああやって、ピッタリくつついているとポケモンによつては何も
出来なくなる。だから、僕は移動するだけでいいの。って言っても
これは袴の受け売りだけれどね……

ともかく、相手の移動に合わせて移動するだけなら相手の動きを
読む能力も楽に、有効に使えるんだ。組み技を持っていない奴が破
れかぶれで掴んできても怖くないしね。

袴も角で相手の考えが読めるから、同じ事を出来るの……まだ、
格闘技の方はお粗末だけれど、いずれはね。

そうなつたら、袴は練習相手としてもライバルとしても気をつけ
なきゃね」

静流に対して得意げに語る杭奈には、かつてのような弱々しさを
感じなかった。ここにきて静流は、自分が育て屋を卒業してからの
2ヶ月半の月日の重さを実感する。

「ええ、相手に合わせて動くだけなら出来るようになりましたので
……来年は僕が出場出来るように頑張らせてもらいますよ」

そしてその自信というのは杭奈だけでなく袴にも備わったようで

ある。自信たっぷりな杭奈と袴の会話を聞いて、恐ろしいその内容にジョンは肩をすくめた。

「お前らは感情が読める技を戦闘中に有効に使える……しかも、ルカリオは裏拳、エルレイドは肘打ち。近距離^{インファイト}で使える技が非常に強力だ。

まさしく、お前ら二人はインファイトを行うためだけに生まれたようなポケモンなんだよな……反則だよ、俺にもインファイトの才能を分けて欲しいものだね」

「ふふ、今日こそジョンに勝って見せるからね。覚悟してよね」

杭奈はそう言って得意げに胸を叩いて見せる。

「杭奈の自信……こりゃ、予想以上だな」

負けるかもしれないな、とジョンは苦笑した。

「随分と遅くなっちゃってね……年上だったら、アタイも惚れていたかもね」

クスクスと静流は笑う。

「はいはい、年上じゃなくって残念でした」

以前まではからかわれていた静流に対しての応対も、やっぱり成長していた。

そんな杭奈を見て、ジョンは彼の成長を感じて嬉しい反面、やっぱりまだ自分より弱く合って欲しいと感じる。

ジョンは不思議な寂しさを感じながら食べかけのソース煎餅を食べるものだから、せつかくの味が分からないまま全てを食べ終えてしまった。

「あら、アタイの定番だわ」

ちなみに、静流は言うまでもなく悪タイプ相手に有利な悪タイプである。

久しぶりに静流の闘いを見ることになる面々は、如何なる戦い方をするのか興味深々でそれを覗く。

静流は2ヶ月半の間に主人の指示に従うことにもだいぶ勘を取り戻したそうなので、静流の出番は主人が赴く。
のはいいのだが。

「二人があまりに格好良いから、アタイも魅せる勝ち方をしたくな
つちやつた……」

黒い笑みを浮かべて、不穏な事を言う静流。これでは、主人の命
令を聞いてくれるのかどうか。

格闘タイプも悪タイプもルールは同じ。とりあえず勝つ方法など
いくらでもあるということだ。

試合開始から、まず主人から下された指示は『とりあえず、適当
にあしらってやれ』というもので、皆相手が格下というのはなんと
なくわかつているらしい。

敵はワルビアル。赤銅色と黒の虎柄模様が非常に強い警戒色とな
ってあたりに存在感を振りまいている。

突き出た大顎は、遠く離れた地のオーダイルよりも相対的に巨大
であり（全体のサイズが違いすぎるが）、眼の隈取り模様と相まっ
て子供が泣きそうな見た目である。

奇しくも同じく砂漠出身のポケモンであるが、果たしてその実力
は如何に。

「一飲みにしてやらあ！！」

口を大きく開いて威嚇する敵に、静流もまんざらでもない様子で
肩をすくめる。

「おお、怖い怖い」

なんて、おどけた様子で無駄口を叩いている間に、静流は常に曲
がっているワルビアルの膝に注目。とあるプロレス選手が、膝をつ
いたまま攻撃してこない相手にとどめとして使ったらしい技を思い
出す。

早速、魅せる技を思いついた静流は相手に対して、平均台の上を
歩くように両腕を広げたままがらあきの腋を晒して接近。

相手トレーナーの命令でが掴みかかって噛みつこうとした所を、
静流は相手の体の外側に向かってかわし、腕を取って関節を決める。
そのまま押し倒して関節を決めてギブアップを誘うの出来るのだ
が、それでは地味な戦いで面白くない。

静流は相手の腕を外側から掴みながら膝を踏み台にジャンプ。
後頭部に強烈な膝蹴りを加えつつ、自身は受け身を取りつつ地面
に落ちる。

もちろんのこと、効果は抜群だ。

「ありや、シャイニングウイザードじゃねえか……ポケモンバトル
で使われる*7の初めて見た」

あまりにも見事な静流の技の冴えに、ジョンが苦笑していた。

「何それ、すごいの？」

杭奈が尋ねる。

「見ての通り、うん……飛び膝蹴りの変形なんだけど、恐ろしく
魅せに特化したためったに当たらない技。当たれば威力は強いけれど、
興行の決め技以外で使うものじゃないさね」

「あらあら、私は決め技として使ったわよ？」

一通り解説を終えたところで、悠々とした足取りで戻ってきた静
流が得意げに微笑んでいる。

「そりや、最初からクライマックスって奴は決め技には含まんさね
いや、静流が敵じゃなくてよかったね。あんな戦い方、俺には真
似できないさね」

「私も悪タイプ代表に参加しなくて良かったわね。あんな技喰ら
いたくないわ」

ジョンに追従するようにペテンが笑う。こうして、初戦は全員余
裕で突破を決めた。

しかし困ったことに、この祭りは参加人数無制限であり、エント

リーした順番がそのまま戦う順番にされていたおかげだろう。

次の対戦はあろうことか杭奈とジョンが相まみえることになってしまっているのである。

杭奈とジョンのどちらか一方が変に強い相手と当たって、負けな
いまでもスタミナやダメージに差がついた状態で戦うよりはいいと
も言える。

しかし、優勝候補がこれほどまでに早い段階であたってよいもの
かと言えば微妙ではあった。

37

一回戦の試合がすべて消化され、杭奈とジョンの試合開始。

ジョンは、レンジャー出身という事もあり、また今の主人が戦い
についてはからっきしという事もあり、指示は必要とされない。だ
から、指示を必要としない条件は一緒だ。

一回戦のように房を重力に逆らわせてふわふわ浮かせながら、杭
奈はジョンを睨む。

「負けないよ」

「今のお前になら負けるかもな……」

強気な杭奈の発言に対して、ジョンは弱気な発言で返す。しかし、
声は絶望とか諦観というよりも、とても楽しそうな声。口元には笑
み。

余裕の笑みではないだろう、当然のことだが杭奈は楽に勝てる相
手じゃないと感じる。

ジョンのはたく攻撃。腕から伸びる長い体毛でリーチを稼ぐその
攻撃は、杭奈の射程外から攻撃できる。

ノーマルタイプであり、音は派手でも衝撃力には乏しいそれは、

鋼タイプの杭奈には今一つだ。杭奈はそれを肘で受け止め間合いを詰める

ジョンは振り抜いた勢いをそのままに回転しながら体を浮かせ、のけぞるように頭を後ろ。頭上から見て反時計回りに体幹をひねって左踵で飛び回し蹴り（ローリングソバット）。

杭奈はのけぞって避ける。飛び回し蹴りでバランスを崩し、受け身をとりつつ倒れたジョンに杭奈が間合いを詰めた。

そのまま、杭奈は踏みつけて攻撃を仕掛けようとするが、そんな事はさせてなるものかと、ジョンは寝転がったまま足を杭奈に向けてオープンガードポジション*8を取る。

波導弾を撃ち合ったりできない人間同士の戦いなら、この体勢だけでも十分な威嚇になるのだが、残念ながら杭奈はポケモンだ。

遠距離攻撃が標準搭載されているポケモンにとって、ジョンのこの体勢だけでは威嚇としては力不足。

更なる威嚇のために、ジョンは遠距離攻撃対策に波導弾をチャージ。寝転がったままの相手に攻めあぐねる杭奈。

この状態から直接攻撃による対策法が見えない杭奈は波導弾やストーンエッジなどで攻撃するしかないが、杭奈は特殊技をあまり鍛えていないし、そもそもジョンにはストーンエッジは効果が今一つだ。

対して、特殊技をきちんと鍛えたジョンは、寝転がったままでも特殊技の威力が大して変わらないことを考えれば、中々にいやらしい。

ジョンは寝転んだままのキックと、寝転んだままの飛び道具のどちらも強力だ。どちらも十分な威力を持つ両刀ならではにして、両刀にしか出来ない杭奈対策である。

しかし、寝転がったままでは攻撃を避けるのも難しいはずだ*9と判断し、杭奈はバックステップで下がって波導弾の準備。

自分は相手に波導弾を当てて、ジョンは寝転んでいるから逃げられないように、という青写真だが生憎ジョンはそんな状況を許すほ

ど親切ではない。

杭奈が自分から離れたのを確認すると、ジヨンは波導弾の構えをチャージのために崩さず、尻尾と足だけで杭奈から眼を離さないように立ちあがった。

そうして放たれたジヨンの波導弾は両刀に鍛え抜かれているだけにきわめて強力。

相殺しようとして咄嗟に放った杭奈の波導弾を呑み込んで、勢いが衰えないまま杭奈へと真っ直ぐ向かう。

波導弾が迫ってきたせいで、地面に手を突くように大仰な避け方をせざるを得なかった杭奈は、無理にその場で立ち上がるうとしない。

後ろに手をついた勢いそのままに、1回後方受け身を取りながら転がって距離をとりつつ体勢を立て直す。

ここで膠着状態に陥った二人は、荒く肩で息をついて呼吸を整える。

「やっぱりジヨンは一味違うね……全然近付けないや」

「お前こそ。俺とて近づかれても対応できる技はもってるが、お前相手じゃ役に立つかもわからんから……近づかせたくないんだよ。」

近づかれたら負けるなら、近づかせなければいいってね」

「それ、近づけば僕が勝てるってこと？」

「ああそうだな。俺が負けるかもな」

二人とも、呼吸を整えながらの膠着状態から一変。同時に動き始める。

完全に房を逆立てた杭奈は、立ったままぐるりと時計回りに一回転して右回し裏打ち★10を放つ。

体を伏せてそれを避けたジヨンは、そのままでは胸の棘に頭突きをしてしまうことになる。

そこでジヨンは、更に身を低く。杭奈の左脚を刈り込みに行く。脚をとって、肩口から体当たりをしてシングルレッグテイクダウン

。

ジョンは地面に寝かせた杭奈の上に馬乗りになって、マウントポジションを取った。

そのポジションにつけば、後はやることなど決まっている。ジョンは手に体毛を巻き、拳を痛めないようボクシンググローブのようにする。

その状態から、瓦割の要領でひたすら杭奈の顔面を下段突き。否、ひたすらというには回数は少ないか。

杭奈は4回まで殴ることを許してしまったが、5回目殴ってきたジョンの右腕の緩んだ体毛を掴みとり、暴れるジョンの右手に、杭奈は右手の棘で裏拳を見舞った。

棘が手首に突き刺さり、腕に走る激痛でジョンは咄嗟に杭奈から腕を剥がそうと立ち上がろうとする。

ジョンが立ち上がろうとして体を杭奈から浮かせた瞬間、杭奈はブリッジを組み、ジョンの踏みつけによる攻撃を避ける。

杭奈のブリッジでバランスを崩したジョンは尻もちをつきかけたが、なんとか隙を見せずに立ち上がった。そうして両者、再びの膠着。

杭奈の棘にやられて右腕の攻撃が難しくなったジョンと、裏拳を腕に見舞う最中にも顔面をやられ、戦意を削られた杭奈。

攻撃に使う部位がやられていない分、精神力の強い杭奈有利か。

「ジョンには全く近付けない上に……倒されるなんて、不覚だなあ」

「お前に近づかせたら負ける。俺はただ負けたくないってことさね

……大人気ないんだよ、俺は」

「なら……僕は勝ちたいね」

「勝ってみろよ……その権利は誰にだってあるさ」

「そうだね……その右手はもう物を握れないはず……肩を掴めない飛び膝蹴りなんて、怖くない!!」

杭奈は唾液混じりの血を手に掬い、それをジョンに向かって投げ

る。ブラックスティでの課外授業の最中にスバルから教わった眼潰しの応用だ。

違いは、あの時は敵の血を利用していたが、今回は自分の血を利用しているということくらいか。ジョンは右腕から伸びる体毛でそれを弾き飛ばす。

腕そのものを攻撃に使わなければ、まだ何とか右腕も動かせる事を再確認した。

ジョンが腕を振る際に手首の怪我から血飛沫が飛んだ。図らずも眼潰しを返す形になったわけだ。

しかし、杭奈は飛んできた血しぶきを見て、あの軌道なら眼には当たらないと踏んで避けなかった。そして、そのままジョンへ接近して間合いを詰める。

大股の一步で間合いを詰めたところで顔面へ向かって左掌底フツクと見せかけ、その手で隠した蹴り脚をジョンの右太ももに見舞った。

掌底のフェイントを織り交ぜたせいで少々無茶な体勢から放たれたその蹴りは、威力が乏しいがしかし、痛みによって生まれたジョンの一瞬の隙。

ダミーの掌底に使った左腕を折りたたみ、勢いそのままにジョンの首筋に向かって肘打ち。杭奈はそこから更に前へ出て、間合いにもぐりもつとする。

ルカリオのお家芸、インファイトだ。その間合いでは膝蹴りを放つのも難しく、相手を押すなどして距離を取らなくてはジョンはまともに攻撃出来ない。

杭奈の言うように掴んで蹴るのが一番威力の高くなる方法だ。その最も威力の高い膝蹴りも、今の片腕しか使えないジョンでは少々難しいだろう。

このまま、裏拳、肘打ち、斧刃脚、体当たりなどより取り見取りの近距離攻撃で蹴り殺しにしてやれば勝ちを拾えると、思っていた。だが、ジョンは左腕の肘打ちを喰らいながらも、その痛みに顔を

しかめつつ杭奈対策を発動する。

「な、そんなのあり……」

ジヨンは杭奈の左肘打ちを喰らう前から受け身をとるように寝転がり、杭奈に向かって足を向ける。2回目のオープンガードポジションだ。

ジヨンが倒れながら喰らった肘打ちも、杭奈には大して手ごたえが無かった。

「お前が俺に対策法を考える時間をくれたお陰で思い浮かんだのさね……急ごしらえだからこんなのしか思い浮かばなかったけれどな」
ダゲキとの試合で、一度だけ見せたピッタリと間合いを詰める技の対策。

ジヨンの対策は、この試合が始まるまでという文字通りの急ごしらえではあったが、悪くない。

序盤で同じ体勢をして見せたのは、杭奈がこの体勢の敵に攻撃する術をどれほど持っているか調べるための行動であった。

試した結果、杭奈は正しい対策法を取れなかった。下がって波導弾を撃つという行動は、苦肉の策として寝転がったジヨンが立ち上がって向き直るチャンスを与えてしまうだけだ。

序盤と同じ体勢になり、今回も杭奈は波導弾を出そうと思った。しかし、最初の時と同じパターンになってしまっただけで、かく距離を詰めた行為が無駄になってしまった。

何か別の方法はないものかと、一瞬のうちに杭奈は考える。直接攻撃をしようとすれば、ローキックで対応。遠距離攻撃をしようとすれば、ジヨンは立ち上がってしまう。

ならば、直接攻撃せずに近距離物理攻撃する手段があればいい。それが出来るのはローブシンやドテッコツのような武器を持ったポケモンだ。

ルカリオは武器を常に携帯こそしていないものの、幸運なことに杭奈は武器を生み出し殴る技、ボーンラッシュを覚えていた。これ

だ、と杭奈は閃いた。

杭奈はここまでの思考を論理的に考えたわけではなく、ローブシンのウルキオラちゃんにジョンを叩き潰す映像が脳裏に浮かんだだけだ。

戦いの中の刹那の一瞬でジョンの対策の対策を見つけた杭奈は、武器にするのに十分な長さの骨を作り出す。

骨を出す間に僅かな隙があったはずなのに、ジョンはいつまでも波導弾の構えを取らない。

杭奈がそのジョンの動作に違和感を感じた時にはもう遅かった。異様な恐怖感を覚え、すぐに離れるべきだと悟ってバックステップをする前に、杭奈はジョンの草結びで右足が絡め取られる。

その隙に地面を這って接近したジョンのローキックが杭奈の右太ももにヒットした。杭奈はやり返すように片手に持ち替えた骨でジョンの左ふくらはぎを打ちつける。

ジョンの蹴りは草結びの草が消えるまでもう1回。

2発のローキックを喰らい、気が遠くなるような鈍い痛みにやられ、杭奈が右手右膝を地面についた。

ローキックを放つ間に3回骨で左脚を殴られていたジョンも、直立すれば足がおぼつきそうにない痛みを抱えている。

ジョンは左ふくらはぎに走る鈍痛をこらえて杭奈の右腕をひつつかみ、右腕ごと首を股で挟みこむ。

杭奈の右腕は左腕でホールド。首に脚を巻き付けて三角締めを持ち込んだ。

三角締めは完全に決まった状態からでも、杭奈の体型ならば抜け出す方法はある*11技だが、ジョンには杭奈がその方法を知っているとは思えなかった。

脚に噛み付けもしないこの状態では、残された左腕で引つ掻くくらいしか杭奈に抵抗の手段はない。

手の甲の棘を利用したメタルクローがジョンの体を執拗に引つ掻

いたが、抵抗むなく杭奈の意識は落ち、白目を剥いてジョンに覆いかぶさる。

審判から勝負ありの採決を下された後、ジョンは這って杭奈の下から抜け出し、痛む足をおしてしてうつ伏せに倒れた杭奈のに近寄る。

杭奈の無防備に晒された首に対して下段突きを寸止めしてやっと自身の勝利を確信した。

起きあがって攻めてくるかもしれないという恐怖を感じていたジョンにはそうしないと勝利を確信できなかったのだ。

それが済むと、ジョンは下半身から力が抜けて、杭奈に重なるように倒れ込む。

勝者の彼は決勝戦を勝ち抜いたかのような倦怠感と共に、荒く息をついていた。

38

気がつくと杭奈は星空を見ていた。

「目覚めたか？ 杭奈」

心配そうなジョンの声がまず耳に付く。

「僕……」

周りを見渡してみても、杭奈はとりあえずみんなに心配されていた事だけは分かった。試合の内容は思い出せないが、きっと負けたのだという事は分かる。

「頸動脈を絞めたんだ……苦しいって思う間もなく、倒れたと思う」

「負けたんだ……」

眼に大粒の涙をためて、杭奈は泣き始める。

「正直、あのダゲキとの戦いで前が自分の戦法を見せなければ……」

…俺は負けていたよ。

……なあ、杭奈。どうしてダゲキとの戦いで、あの戦い方を俺に見せてしまったんだ？」

思えば、杭奈はあまり自己主張の激しい方ではないので、敵を舐めきったようなダゲキとの戦いは少々違和感のあるものだ。

「僕は、あの技の弱点を知りたかった……から、だと、思う。ジョンなら、あの技を破る方法を……知っていると思ったから。案の定、寝転がられると対応が難しいんだね」

間合いを詰める技は優秀だ。しかし弱点もあるだろうとは杭奈もうすうす感づいており、その弱点を杭奈は知りたがっていた。

今でもジョンが育て屋にいたのであれば、きつと指摘してくれたであろう間違いを教えてもらえると信じていたのだ。

「なるほど……いや、技を破る方法はしらなかったよ。あんなふうに寝転がって見せるのも一か八かだった……うん。

終盤に一か八かの勝負に出たら、瞬く間にやられる可能性があると思ったから、いの一番に、戦闘中にインファイトへの対策法を練習してみたら……確信したよ……対策法。

人間だったら、銃を持っているから通じない戦法さね……けれど、覚えておけば何かの役には立つもんだ」

「でも……やつぱり、ジョンには負けたか」

「大丈夫だって。お前は強い……待ってろ。後で寝っ転がった相手に対する対策法を教えてやる……波導弾やボーンラッシュで戦おうとしたお前は間違っていない。

だから、その……なんだ？ お前、もうちょっと経験を積み……今の俺と杭奈じゃ体力も技術もそんなに差が無い……多分、お前は経験の差で負けたんだ。

ジムバッジ検定のために戦う機会は、きつといくらかでもあるはずだろう。だから来年はきつとお前が勝つよ……な、杭奈？ 来年に俺を負かせられるように頑張ってみろ」

一通り言い終えると、ジョンは黙って杭奈を抱きしめる。すつか

り小さくなつてた杭奈は、すがりつくようにギュツと抱き返した。

「はぁ……そういう、臭い会話は決勝戦でやってほしい物だわね」
雰囲気ぶち壊しに、静流が聞えよがしに言う。

「そんだけお涙ちょうだいしたなら、責任とつて今年はおんたが優勝しなさいよ？ ジョン」

「ああ、そのつもりだ。今年は、何だか負ける気がしないものでね……こんなにテンションが上がってきたのは初めてだ」

ジョンは杭奈を抱いていた腕を解いて強気に笑う。

「ふふ、そう。それじゃ明日の夜に、あそこの社でデートでもしましょう？ お互いキャンセルは嫌よ」

明日の夜とは、酒の奉納の儀式の時間である。お互いキャンセルは嫌よとは、もはや言葉通りだろう。

「いいぜ、静流。俺には妻がいるけれど、お前とデートの約束つてのも悪くない。だが、お前準々決勝でスバルさんのサザンドラに当たるから気をつけろよ。」

そこでデートのキャンセルする必要があるかかもしれないぜ？
なんせ強敵だからなあ」

ジョンは杭奈を抱いたまま拳を突き出した。話においてけぼりの杭奈は戸惑うばかりである。

「アタイなら大丈夫よ」

静流は突き出されたその拳に自身の拳を合わせて誓いの証を立てた。

「じゃ、行つてきまーす」

軽いノリで静流は舞台に降り立った。静流がいなくなったところで、ジョンは杭奈の顔を起こす。

「さて、杭奈……ちよつと頼みたい事があるんだ」

「ん……何？」

「聞いてたろ、さっきの話？ 静流ちゃんと優勝する約束しちゃったものでね……この傷、治しておきたいんだ」

先程の試合で、杭奈の棘を突き刺されて傷つき血のにじんだ右手首を見せてジヨンは苦笑する。

「再生力の特性持ちの俺とて、脚の腫れも腕の傷も次の試合までに治るか分からないんだ……俺に癒しの波導、使ってくれないか？」

「分かった……任せてよ、ジヨン」

杭奈はジヨンの手を取り、傷口に肉球をそつと当てる。波導使いの所以とも言える波導を存分に用いた癒しの力で杭奈は今までで最高の感謝をするのであった。

一方その頃人間はというと……

「お久しぶりです、オリザさん。今の試合どうでしたか」

杭奈とジヨンのビデオを取り終えたスバルは、満足そうな顔で杭奈の主人、オリザへと話しかける。

彼は祭りで振る舞われた、ブラックシティのビリジオンへ奉納する物と同じホワイトフォレスト産の濁り酒をちびちびと飲んで、ほろ酔い気分で血色も良い。

対してスバルはというと、同じくホワイトフォレストのダークライへ奉納するブラックシティ産のカクテルやビールを大量に煽っているらしく、すでにして異臭が発生している。

「どう、という……素晴らしい試合としか言いようがありませんでしたが……？」

その匂いに動じないよう努めながら、オリザはスバルの質問に答える。どうやらその答えが不満だったのか、スバルの顔から愛想笑いが消える。

「では、質問を変えましょうかね。ジヨン君が行った、あのオープンガードポジションによる杭奈君のインファイト対策はどうでしたかね？」

質問を変えると、そうだな……と、オリザは顎に手を当て考え込んだ。

「人間同士、リングの上での戦いなら、アレはほぼ満点の選択だと思います……しかし、なんと言いますか。

飛び道具が標準搭載のポケモンバトルでは、寝転がるのはあまり得策ではないと思います。

ルカリオならボーンラッシュや波導弾、エルレイドならサイコカッター、ゴウカザルなら火炎放射……ついでに格闘タイプはほぼ全員ストーンエッジが使えます。

ですので、寝転んだ側のローキックがギリギリ届かない位置でストーンエッジや岩雪崩を繰り返してやれば、両刀のポケモン以外は不利な状況を作り出すだけですな。

以上の事を踏まえて考えれば、ジョン君が取ったあの対策は点数をつけるなら75点くらいでしょうか……

逆に言えば、両刀のジョン君ならオープンガードポジションで何とか対応できるわけですから、そういう面も踏まえて言えば85点くらいですね。

他にジョン君と同じ対策が出来るとしたら、バシャーモとエンブオーくらいでしょう。

ゴウカザルやルカリオも両刀ですが元々インファイトが使えますのでインファイト対策は不要という事で」

「85点とは……恐らく100点満点は滅多なことじゃつかないのだとは思いますが、それに近い対策はおもちで？」

感心するようにスバルは尋ねる。

「貴方の言う通りで、もちろん完璧だとは思いませんが、コジョンド以外でも90点はあげられる対策法を……実は、インファイト対策は、すでに静流には仕込んでいるのですよ。

静流は昔、サザナミタウンで強いルカリオにこっぴどくやられた経験がありましてね、それをバネに習得させた技が」

「それはそれは……準備がいい事で。しかし、対策しているのは静

流ちゃんだけでしょうか？」

「え、ええ。ズルズキンは、格闘タイプに弱い格闘タイプ……その格闘タイプの中でも特別強力なインファイトは、事前に対策するべきだと思ひましてね。」

ルカリオの杭奈は、インファイトに持ち込まれてもインファイトし返せばいい話ですが、ズルズキンともなるとそうはいかず……。

まあ、対策とは言ってもローキックの防御と同じく言うだけなら簡単*12なものですよ。咄嗟に出すには経験が必要でしょうが」
「ふむ」

と、スバルは前置きをしてオリザに対して笑いかける。

「それ、教えてもらえませんか？　ウチにも、格闘タイプに弱い格闘タイプのズルズキンがいるものでして。」

いつかインファイト使いと当たった時にも対応できるようにしときたいのですよ」

「あ、はい。構いませんよ……静流が帰ってきたら実際にやらせてみます」

杭奈と同じく、スバルもまた努力の人。同じ状況になっても対応できるよう、格闘のスペシャリストから教えを乞うのであった。

祭りの2日目。ホワイトフォレストとブラックシティのちょうど中間に立てられた社の中に、二匹のポケモンが放り込まれた。

「よう、トリニティさん。やっぱりあんたが優勝したなあ。静流ちゃんも頑張ってたけれど、地力が違うさね」

「お久しぶりだなジョンさん。俺は杭奈が勝つと思っていたよ……大番狂わせだねえ」

奉納の儀の準備段階。育て屋で知り合った教官と研修生の二人は、ポケモン用の服を着せられる最中に笑って挨拶をしていた。

去年は再生力の特性でも回復が追い付かずに、去年オールバック

の執事が使役するエルレイドに負けたジョンも、杭奈の癒しの波導のおかげでなんとか勝ちを拾う事が出来た。

今年は都合がつかなかったのか、前回の優勝者が参加していないことがそもその幸運であった

対して静流であるが、彼女はトリニティの波乗りと気合い玉の波状攻撃に耐えられず、準々決勝で沈んでしまった。

この大会、悪タイプに有利な悪タイプであるズルズキンの出場率は異常で、トリニティが決勝戦で戦った相手もズルズキンであったのだが。

静流と比べれば少々呆気なく終わってしまい、杭奈とジョンの戦いも相まって今回の大会は何とも尻すばみであった。

言ってみれば、2回戦の敗退者である杭奈が準優勝で、8位入賞の静流が準優勝といったところか。

「杭奈って言ったっけ。あの子、ご主人のお気に入りだね……ご主人、きっちりとビデオを撮っていたぜ。課外授業って事で、ホームページに掲載するみたいだから……機会があったら見てみるよ」

「いや、俺さすがにパソコンは使えないや……すまんね。御主人に頼めば見せてくれるかねえ……」

「そうか、残念……とりあえず、なんだ。俺のご主人、スバルからの伝言なんだが、杭奈君を鍛えてくれてありがとうだってよ。

いやー、それにしてもあれだね。主人は特等席で見たいとか言っていて、俺もわざわざ空から観戦させられたが見事な試合だったな」

「そりゃどーも。俺もあんたも静流との試合は……燃えたねえ。飛び膝蹴りを受けても耐えられるもんだな、そのでかい図体だと」

「危なかったがな……あの一発で意識が飛ぶ所だったぜ……」
二人とも早くも話題が無くなって、黙りこくってしまった。

「お互い、お世辞合戦も苦手なようで……口の数は三つあるのに口数は多い方じゃないんだよな」

「同じく。俺は口は一つだけれどな」

トリニティとジョンは互いに苦笑する。

「俺は、この後もらえるポフィンとやらが欲しくて頑張ってきたが、あんたはどうだい？」

「うーん……杭奈に対する示しって奴かな？ あいつのために、勝つてあげたかったんだよ……だから勝った」

「そうかい。大切な者を持つと大変だな……俺は、主人が賞品の酒を欲しがっていたから、主人のために……なんて頑張らされたから、よくわかるよ」

夕暮れに行われたその会話のあと、その日の夜に酒を奉納する儀式が始まる。

ホワイトフォレストには黒装束をまとった集団が闊歩し、ブラックシティはその逆に白装束集団が闊歩する。

奇しくもそのままでも大丈夫そうな色合いのサザンドラとコジョンドであるが、彼ら二人もきつちりと極端な色合いの服を着せられ行列の先頭を歩くのであった。

そして、ご神体に攻撃を加え、二つの街を作りこの地に均衡を与えてくれた神へ向けて力を送り込むのだ。

ジョンは、ブラックシティにて、ビリジオンの御神体に向かって飛び膝蹴りをして砕き、キックと波導弾で完膚なきまでに粉々にして、御神体に格闘の力を送り込んだ。

トリニティはホワイトフォレストにて、三つの顎で御神体を噛み砕いて、悪の波導で消し炭にしたあと、更にまくし立てるような暴言を振りまくバークアウト。

前回よりも更にパワーアップした破壊力で御神体に悪の力を送り込んだ。

すでに育て屋へ帰っていた杭奈は、その夜具体的にどんな事が行われたのかを見ることなく夜を過ごした。

寝ころんだ相手に対応する方法を袴と一緒に反復練習する傍ら、ジョンに想いを馳せながら夜は更けていく。

第6話（後書き）

* 6 卵を素早く孵化させる方法。同じリズムで繰り返し振動を与えることにより、胎児の細胞分裂のペースを速める方法。

現在ではトレーナーが自転車によって振動を与えるのが一般的であり、この孵化方法に関しては数多くの論文が書かれている

* 7 プロレスでよくつかわれる技である

* 8 いわゆる『猪木アリ状態』。地味にローキックが痛いので、現実ではこうなったら武器を持つか、石などを投げるのがもっとも有効だが、総合格闘技などのリングの上では武器は使えないため膠着状態になりやすい。

* 9 波導弾は命中率100%の設定はアニメよろしく忘れてください

* 10 裏拳

* 11 杭奈がジョンの尻のあたりに膝を当てて、脚の皮を掴んで押せば外れる。むしろ肛門にメタルクローすればジョンは即死

* 12 脚上げるだけでOK

第7話

39

「いよっし。今日も大勝利!!」

強い相手をインファイトで下して、杭奈はガッツポーズをとる。

平地エリアにて、杭奈はペテンやファントムと共に休憩の最中。

最後の昼食マッチで得た、戦利品を親子そろって食べている。

可愛らしい子供は目も開いて、母親の後について行くスピードも随分と速くなった。

育て屋出身のために危険を知らないせいか、ファントムはじつとしているのが非常に苦手で、母親が闘いに赴く時に押さえつけていると自分もついて行くと行ってきかない。

押さえつけていると狂ったようにわんわんと鳴き出すのだから手を焼くが、それも今日終わりだと思つと何ともさびしい気がして、杭奈はいつもよりも執拗にファントムを抱く。

あんまりにベタベタされてうつとおしかったのか、ファントムは鳴き出してしまい結局ペテンがあやす羽目になってしまう。

親の心子知らず、今日でお別れで寂しいというのに父親へサーブスしないダメな息子だと、杭奈は苦笑する。

「よしよし、眠たいのにお父さんがうつとおしくて仕方ないのね」
鳴けるという事はそれだけ元気な事だから良しとするかと広い心を持って杭奈はペテンがファントムを抱く様を眺めた。

杭奈は鳴きやんで眠るまで口が止まり、手に持った木の実は一向に減らずに時間が流れる。

否応なしに時間の流れを意識したのは、袴が食べかけの木の実を杭奈から奪い取ってかりりと齧つたその時だ。

「兄さん、来ましたよ。僕達の御主人です」

「……袴、それ僕の木の实」

「食べてないから、いらないのかと思ひましてね」

につこりと袴は笑つて、悪びれずに杭奈の頭を叩いて立つ事を促す。

「それに、寂しくつてそれどころじゃないんじゃないんです？ フ

アントム君、可愛いですものね」

「……行くよ」

杭奈は自分が感情を読まれ易い事は自覚している。角の感覚が鋭い袴の事だ、どうせ強がることは意味が無いけれど、杭奈は強がらずには居られなかった。

管理棟には、杭奈と袴。そして見送りにペテンとその子供ファントムが見送りに訪れる。

ペテンはこのままあと数週間育て屋に滞在し、子供と一緒に元の主人の元へと帰るらしい。寂しいが、これもまた仕方のないことだ。父親にもきちんと懐いているファントムには少々酷であるが、別れはきつちりと済ませておきたいからと、預けることなくこの場に連れて来たのである。

「さて、今日を以つて貴方はこの育て屋を卒業いたします。思えば、この育て屋に来た頃は……頼りないお子さんでしたね」

「ですね。本当に、この子をよくまあここまで強くしてもらえました……なんといつてよいのやら」

腰をかがめて杭奈を撫でるスバルに、主人のオリザは謝辞を述べる
「ちがいますよ」

スバルは微笑む。

「この育て屋は、基本的に放任主義でございます。育つポケモンは大きく育ちますが、育たないポケモンは全く育たずそれがクレーム

の元になることも度々あります」

「とどのつまり、強くなったのは杭奈の頑張りってわけかですね……それが極端に出るだけと」

「ええ、私はその場所と、切っ掛けを与えただけですよ……無理矢理強くならせようとしたって強くはなりませんから」

そう言って、スバルは笑う。

「そもそも、主人の所でぬくぬくと、ただなんとなく強いポケモンになることを強要されても育たないというのが私の持論でしてね……強くなるには理由があればやり易いと思うのです。

例えば、野性のように食欲とか、性欲とか、縄張りとか……昼食マッチというのも、食欲に根差した強さへの欲求を奮い立たせるためのもの。本当は、昼食マッチはもう少し厳しめにしたかったのですよねえ……勝者と敗者では食料に倍くらいの差があるように」

「そりやまた、随分とまあ極端といえますかなんといえますか……それだと流石に負けっぱなしのポケモンはたまったものではないでしょうね」

「ですよ。しかし、ブラックシティではもつと極端ですので。敗者は残飯漁り、勝者は高級料理店で嫌いな食べ物を残して下げさせる……」

それが悔しいから私も強くなろうと思ったのですよ。そして、その幼少時代の経験が、この育て屋のコンセプトでございます。

目的を持たせて、育つ意欲を持たせるという。やはり、目的なくしてポケモンは育ちませんしね」

「なかなか、響きのいいコンセプトですよ、目的を持てるってのは……自分から強くなりたいと思う子でなければ、伸びてくれませんし……その点杭奈君は優秀ですね」

「ええ、当育て屋自慢のコンセプトでございます……杭奈君は、最初静流ちゃんと交尾したいという原始的な欲求から強くなりました。しかし、私も食欲から強くなった……そんな杭奈君を見て、私の人生は間違っていないのだと、何だか再確認できた気がするのです。

杭奈君と一緒に強くなってみたら面白かったらうなあ……と、ふ
と思ってしまったのですよ」

「そ、それはまた光栄ですね」

突然話を振られてオリザは困惑しつつも頷いた。

「それで、ですね」

と、言ってスバルは真面目な目つきでオリザを見る。

「はい、何でしょう？」

「この子を見ているうちに、私はすっかり杭奈君がお気に入りにな
ってしましまして、この育て屋を卒業する前に、一度私のポケモン
とガチで戦わせて見たいのです」

「いずれ、ジムで連日戦いの渦中に放り込まれるわけですし……練
習試合くらいはいくらでも構いませんが……」

「ええ、ありがとうございます。しかし、傲慢ながらただの純粹な
試合なら了承して下さると思っておりまして……ここからが本題な
のです」

ただ戦っても面白くありませんし、勝てば商品、負ければペナル
ティを与えたいと思っていますのです……具体的には、杭奈君が勝
ちましたら、このがんばりボンをプレゼントいたします」

「えーと……これは？」

指輪などを入れるような紺色の小箱に入ったりボンを差し出し、
スバルは笑う。

「遠く離れたシンオウ地方では、頑張ったポケモンに対して勲章代
わりに贈るリボンでございます……ただし、装飾の部分が純金製で
ございますがね。」

時価にして25万ほど……丁度、中型サイズ人型・陸上ポケモン
予防接種料金込み、半年預かり代金とほぼ同じでございますね」

「あ、あの……こんなものもらえませんか。確かにジムは開設にお
金を使ってしまったので財政は厳しいですが……ん？」

腕を引っ張られる感覚でオリザが見下ろすと、杭奈は首を振って

いる。

「杭奈君はやるつもりの方ですよ。どうでしょう？ 杭奈君の意思を尊重しませんか？」

「えと……ならば、商品とかペナルティは無しという方向で……」

杭奈はオリザの服を引っ張り、首を振って『それはダメ』とアピールする。

「ガウッ」

そして、任せてくれよとばかりに、杭奈は腕を振り上げる。

「杭奈……お前、そんなにリボン欲しいのか？」

元氣よく杭奈は頷いた。

「仕方がない……なら、好きにしろ。しかし……ペナルティというのは？ それしだいによつては流石にお受けしかねますが……」

杭奈がどうしてもリボンを欲しいと言うので折れたオリザだが、今は財政が厳しいので1円でも惜しいところ。こつちもお金を出せと言われたのではたまらない。

「なに、オリザさん自身が経済的にダメージを負う事はありませんし、負けたら好きなポケモンの交換などもしない所存です。」

いえ、ね。私は昔、ポケモンバトルで賭博をしておりましたが……ある時賭けごとで大負けして、服を下着以外すべてはぎ取られてしまった事がありましてねえ。

その時の私の気分を杭奈君にも味わっていただきたく、その体毛を刈ってプードル刈りにします。ブラと下着だけ残すというのはいい羞恥プレイとなりそうですね」

ニコツと笑ってスバルはバリカンを取り出す。

「く、杭奈……この人、結構とんでもない発想だ。止めるなら今のうちだぞ？」

何とも個性的なペナルティに、オリザは言葉を失いかけながら杭奈に諭す。しかし杭奈は、負けてなるものと首を振った。

「どうやらやる気の方ですね……では、刈る部分を具体的に言いますと、腹と、太ももと、上腕あたりの毛を綺麗に刈ります。あと、

首の毛も涼しく刈りましようかね。

流石に、生殖器は大つぶらに見えると見苦しいと思う挑戦者さん
もいるでしょうし、私も髪の毛までは刈られなかったので生殖器周
辺と顔は無しですね」

杭奈の体に触りながら、嬉々としてスバルは説明した。

「杭奈君、それで構いませんね？ 負けて羞恥プレイになる覚悟が
おありでしたら、賭け勝負をしましょう」

真っ黒い笑顔を浮かべるスバルに対し、杭奈は躊躇いがちに、し
かし確実に頷く。

40

「くつくつく……」

どうやらスバルは、杭奈の態度のせいでブラックシティモードに
突入してしまったようだ。

「ははは、やっぱりこの感覚がいい。負ければ何も残らない屈辱の
戦い…… お前も感じるだろう？ この高揚感…… そうだ、杭奈！！
お前は今まで様々な戦いを経験してきたが、たった一度として負
けたら酷い目に合う戦いは経験していなかったはずだ。

いや、ブラックシティでの課外授業は酷い目に会うが、実力が違
い過ぎて相手にならなかったものなあ？

性欲のため、女のため、子供のため、勝利の高揚感のため、主人
への感謝のため…… そのために勝つのも悪くないが、やはり必要なの
だ。

敗北した時の屈辱、敗北した時の空腹、敗北した時の非リア獣＊

13、敗北した時の痛み、敗北した時の寒空というものがな。

祭りでジョンと戦い負けた時は、悔しい思いこそすれ屈辱はなか
つたろう？ 負けても称賛の拍手が響いたろう？

ダメだ、そんなものでは。私がブラとパンティー以外をはぎ取られた時は性犯罪から人浚いまで危険に満ちたブラックスティを闊歩せざるを得なかったものさ。

その屈辱と恐怖と寒さ……二度と感じたくないと言った私は、自分のポケモンを必死で鍛えて強くなったぞ。

私と同じく、敗北の屈辱を存分すぎるほど知ることになりかねない今回の戦い……この戦いで杭奈。お前はもう1段階成長する……確実にだ。

その時こそ、この育て屋に足を踏み入れた時は両生動物のクソをかき集めて出来た聳え建つクソの塔ほどの価値もなかったお前が、聳え立つ美しき象牙の塔と見まがうばかりに強く、そして価値のポケモンとなるはずだ……あつ」

言い終えて、スバルはあたりを見回す。

「申し訳ありません、地が出てしまいました……ブラックスティではああでも言わないと舐められてしまいますが、こちらでは本当にお恥ずかしい……」

オリザはスバルの雰囲気圧倒され、苦笑していた。

「スバルさん……ブラックスティではいったいどういう生活なさっていらしたんでしょうか？」

「それはもう、悪い事を色々……コホンツ。その遍歴のせいでジムリーダーになれなかったのですから、酷いものですよ。」

公僕である警察が市民をきちんと守るといふ義務を果たしていないというのに、私が人間としての義務を果たせというのですからねえ。

コホンツ……さて、そんな事はどうでもいいでしょう。ではルールを説明します」

咳払いを挟んで、スバルは育て屋内の地図が記されたポスターの前に立つ。

「ルールですが、まずは挑戦者である杭奈君が戦うエリア、もしくは

は対戦相手を指定します。戦うエリアは、平地、森林、砂地、洞窟、池沼の5つ。

このエリアの好きな場所を指定する事が出来、また対戦者がこのエリアから出れば負けとします。

対戦相手は、ポリゴンZのふじこ、ズルズキンのバカラ、アイアントのユウキ、サザンドラのトリニティ、エルフーンのケセラン、シビルドンのうな井、シャンデラのサイファーの7匹です*14。

杭奈君がエリアを指定した場合は、こちらがポケモンを指定させてもらいます。あなたに対して有利なポケモン、例えばサイファー君など。

逆に、杭奈君がポケモンを指定した場合はこちらがエリアを指定させてもらいます。もちろんのことですが、貴方が戦にくい場所を選ぶつもりですね。

試合におけるルールは、制限時間無制限の一本勝負。どちらかが戦闘不能になるか降参した時点で負け。また、前述したとおりエリアを出ても負けでございます。

と、ルールはこの辺で終わり……ルールはシンプルに行きましょう。では、杭奈君はどういたしますか？

誰を対戦相手に選びますか、もしくは何処を対戦場所にいたしますか？ ご自由にお選びくださいませ」

言い終えると、手元に集合させていた教官と、卵孵化場から連れて来たシャンデラ。全てを繰り出す。

可愛いポケモンからいかついポケモンまで様々に杭奈の眼前に繰り出され、一気に受付は狭くなった。

「もし、貴方が対戦相手を選びたいのであれば、この子達を指さしてくださいませ。

そして、エリアを選びたいのであればこの地図を指さしてくださいませ……何を選ぶのも、ご自由にどうぞ」

そう言って、差し出した地図とポケモン。杭奈は迷いなくバカラ教官。静流と同じズルズキンである彼を指さした。

スバルは感嘆の声を漏らし、そして笑い出す。

「ほう……よっぽどブードル刈りになりたいと見える。なるほどなるほど……」

ブードル刈りは水の抵抗を抑えるための刈り方と聞くが、水タイプのポケモンが波乗りを放って来ても水の抵抗を押さえるようにという算段か？

両生動物のクソの塔から両生動物になりたいとは、杭奈君も中々に感心な心構えだ……」

またもやスバルがブラックスティモードに移行していると、オリザの腰に下げたモンスターボールから静流が飛び出し、わんわんと自己主張。

「ほう、『杭奈。お前ごときがバカラに勝てるわけねーから、マジバロスｗｗｗｗ』だそうだ。静流ちゃんの言う通り、勝てる戦いではないぞ？」

杭奈君も意地を張らずに他の相手を選んだほうが良いのではないか？

私のお勧めはアイアントのユウキ君だぞ。目覚めるパワーは雷、特性は虫の知らせの物理速攻型で……」

みなまで言うなとばかりに杭奈はスバルの言葉を制する。

「なるほど……だが、そのバカラはもともと私の手持ちではない。縁あって四天王のギーマさんから譲り受けたポケモンでな。」

だから、自分で育てたポケモンで参加したくて、祭りにはバカラではなくトリニティを出場させたのだ。

いいか……その子を越えるという事は四天王を越えるということだ。その意味が分かるな……？ 名誉はもちろんだが、難易度も折り紙つきだ。

一応我が育て屋の最強戦力だ。生半可なことでは突破させんし、出来んぞ。それでもいいのだな？」

採算の確認にも、杭奈は躊躇い無く頷く。

「ククク、そうまでしてプードル刈りになりたいか……いいだろう、その狂犬のような心意気が気に入った。」

では、バカラよ……愚かな挑戦者に戦うエリアを選ぶがいい。氣遣う必要はない、全力で戦える場所を選んでやれ」

バカラに地図を差し出すと、彼は迷わず砂地を選ぶ。これにはいよいよ静流も焦り出す。

「ふむふむ『砂地でのズルズキンは2倍強えーのよ。チミなんかマジ粉碎玉砕大喝采w』と、静流ちゃんも言っているようだが？」

「そのふじこちゃん……さつきから相変わらぬ翻訳精度ですね……そんな事はともかく、杭奈。」

静流の言う通りだぞ……砂地でのズルズキンは非常に強い。それでもやるのか？ 毛を刈られても俺は知らんぞ」

それでもなお、杭奈の心は変わらなかった。ジョンに対して勝ちを拾えていないが、思えば静流に対しても勝ちを拾えていない。

バカラならば、静流の代わりになるだろうと、杭奈はバカラに挑もうと決めたのだ。

プードル刈りは確かに嫌だったが、負けないつもりで挑めば負けないと、根拠のない自身を持って杭奈は戦いを望む。

「いいだろう。よもや砂地で臆病風に吹かれる事はあるまいな？」

そんな不拔けた玉無しの態度を取ったらプードル刈りを通り越して頭以外のすべての毛を刈り取ってやる。

では、ついてこい……このシラモリ育て屋本舗（有）（ゆうげんがいしゃしらもりそだてやほんぽ）代表取締役、兼牧場管理責任者のスバル。及びそのポケモンが、全身全霊で以ってお相手しよう」

まるで悪役のようにスカした口調で宣言して、スバルは歩きだす。もう後には退けない。

「たかが半年程度の修行で、舐められたものだな……」

バカラ教官は憤っていた。確かに、自分はNという少年に負けた後、雌のブルズキンにレギュラーの座を奪われてしまった身だ。

しかし、彼とてレギュラーの座を奪われようと四天王の手持ちとしてのプライドと強さを失ったつもりはない。

「舐めているつもりじゃないよ……ただ、なんとなく君に勝ちたいと思っただけで……ほら、お互い格闘タイプに弱い格闘タイプで、条件は互角だし」

杭奈はそう言って納得させようとしたが、バカラ教官は高笑いでも返す。

「フッフ……ハツハツハ！　条件が互角だと！？　言っただろう、戦う場所は俺が選ぶのだ……条件など、地形の如何によって変わる。俺の得意なフィールドを選ばせた時点で、互角の条件は有り得ないんだよ……それで戦うとは、笑わせる」

「不利なのは分かっているさ……でも、不利だから格好良く負けようなんて思っているはいない。その鼻面、へし折ってやる」

「デカイ口を叩くなよ、死ぬか？」

「僕は、自分よりも強い敵とだって戦ってきたんだよ……何回も、何回も」

「そのたび負けて来たんだろう？　何回も何回も」

「たまには勝ったさ」

「その『たまに』が……今日来るといいな」

ふんつと鼻で笑ってバカラは杭奈から踵を返して前を向く。

絶対に勝つ。杭奈の勝ち方は万が一の確率しかないと、公開処刑のような勝ちの見た勝負にバカラは怒りすら感じている。

「まーまー、バカラ。熱くなりなさんな」

エルフーンのケセランは背負った綿毛で風にのって、ふわりふわりと月面を歩くように跳びはね笑う。

「アタシも何度か沼地でバランスをとる練習に付き合っただけだけれど……杭奈君は強いわよ。ガチで戦うなら舐めてかからない事よ

ん」

シビルドンのうな井教官は月面どころの表現ではない。彼女は少しばかり宙に浮いて、すべるように砂地エリアへと向かって行く。

「くぁwせdrftgyふじこlp」

ふじこに対しては最早何も言うまい。

「そうそう、そうっすよ。ケセランやうな井の言う通り、張り切っ
ていってやりましょー。舐めてかかって鬨り殺しにするよりも、一
撃で決めて気持ちよくさせてやるのが男の道っすよ」

アイアントのユウキはなんだかんだで杭奈との戦いを楽しみにし
ているのか陽気に笑う。

「祭りの時の戦いを見ていなかったようだから言っておくが……杭
奈は強い。舐めてかかると即死するぞ？」

サザンドラのトリニティは、威厳のある声でバカラへとアドバイ
ス。

「ふん、あのジョンとかいうやつに負けたんだろ？ あのジョン
ならば、一度戦って勝っている……相性だって、ジョンと杭奈なら
こっちの方が楽だ」

「男子三日会わざれば刮目して見よ、なんて言葉もあるけれどなあ
……杭奈君は、その言葉がよく似合う子さ。足を掬われるなよ」

トリニティは鼻息を強く吐き出し、じと目でバカラの方を見る。

「そんな事があつたら、裸踊りでも何でもやってやるさ」

「ほへー……そんなことして、顔がオーバーヒートしても知らんよ
ー」

シャンドラのサイファーは間の抜けた声でバカラを煽りたてた。

砂地エリアに移動する間、杭奈は思いだす。負けた直後は自己嫌
悪でどうにもならなかった3ヶ月前の戦いだけれど、あの戦いはス
バルの言うとおり勝てない戦いではなかったのだ。

「杭奈、私の得意技覚えてるかしら？」

だから、静流にこう尋ねられた時の杭奈の答えは決まりきっている。

「うん、それはもちろん……ジム時代は結構酷い目にあっただからね……飛び膝蹴りも痛かったよ」

杭奈は肩をすくめて苦笑する。

「バカラ教官は私よりも強い……勝ち目はないと思うけれど、やつちやっただからにはもう勝ちなさいよ？」

「大丈夫だよ静流」

「怪我にだけは気をつけなさい……」

静流は後ろを向きながら杭奈の前を歩き、眼を見て念を押す。

「静流姉さん、以外と心配症なんだね」

杭奈が頷く前に、袴が横から割りこんで茶化す。

「でも、強い教官相手じゃ心配する気持ちも分かるわよ。杭奈、頑張つてね」

そして、怪我しないようにという静流の言葉をつやむやにするように、続けてペテンが割り込んだ。

「えーと……怪我もしないし、頑張るよ、うん」

確かに、静流の言う通り絶望的な状況かもしれない。バカラは平地エリアで戦っても十分に勝てると踏んでいるのに、わざわざ得意なエリアを選ばれては万が一にも勝てないかもしれない。

だが、杭奈はブードル刈りになる気はないし、負けたくないという気持ちを奮い立たせるには、スバルの言う通りこういう経験も必要なのだと杭奈は思う。

てくてくと歩きながら砂地エリアに向かうまでの間、杭奈は敵であるバカラの動きを予想し、勝つための道筋を考える。

静流の動きを参考に、より鋭く、より重く、よりテクニカルになったズルズキンの動きと、それに対する対策法を思い描く、イメージトレーニングなんて安いアイデアかもしれない。けれど、ジョンだって杭奈に勝つためにオープンガードポジションを思いつくまでにした事だ。

たかがイメージトレーニングとは言え、勝利を左右する事は十分にある。

今まで偶然も含めて自分より強い相手に勝って来たのだ。バカラを倒すことだって、今の自分に出来ないはずがないと、杭奈は自らを奮い立てた。

砂地エリアの中心にたどり着いて、スバルは周りを見渡し宣言する。

「先ほども言いました通り、試合は時間無制限一本勝負。どちらかが戦闘不能になるか、降参する。もしくはエリアを脱出した時点で敗北とさせていただきます。」

トレーナーの指示は、受けるか受けないかは好みで。杭奈君は指示を受けるのが苦手なようですし、無理せずやってあげてくださいね、オリザさん。

そして、試合開始の合図ですが……トリニティの龍星群が地面に着いた瞬間とさせていただきます」

「りゅ、龍星群とは豪勢ですね……」

「なに、卒業の記念なのですからこれくらい派手にぶっ放しましょう」

朗らかな顔を振りまいて、スバルは杭奈とバカラをみやる。

「さてと、準備はよろしいでしょうか？」

きつちりとビデオを構えながらスバルが尋ねると、視線に気づいた二人はコクリと頷き、バカラはうんこ座りから。杭奈は柔軟運動から立ちあがった。

「では、トリニティ。派手な龍星群をお願いします」

周囲に甚大な破壊を振りまく龍星群も、砂地エリアならば破壊する対象が無いので遠慮なしに使えるという事か、トリニティは三つの口から計3発の凶弾を放つ。

すでに周囲のポケモンは避難済み。観衆達が呆れかえるほどの破壊の雨が降り注ぎ、砂埃を巻き上げて戦闘が開始した。

41

杭奈はまず地面を蹴り上げる。3ヶ月前の戦いで初弾が眼潰しであつた静流に対する当てつけのような行動に、バカラは驚いて砂から眼球を守りつつ後ろへ下がった。

「ほう、杭奈君はなりふり構わないようだ」

続けて右掌底によるストレート攻撃。杭奈は柔軟運動の際に砂を握っていた。否、掌に吸着させていた。

鍛え抜いたルカリオは、短時間ならば壁に吸着が出来る*15。

同様の事が出来るほどの実力こそ杭奈には無いが、質量の軽い砂でなら彼にも真似出来た。

バカラは杭奈の掌底こそ弾いていなかったが、くっつけていたことすら悟らせなかった砂をともに食らってしまう。

瞑ってしまった目の苦し紛れにバカラは左足でローキック。杭奈は右半身を向ける形で半身になって、右足を上げ相手の脚に膝を当てカット*16。

ローキックをカットした体勢から、更に腕で上体を守りつつ防御の体勢から間合いを詰める。

「間合いに入られ……あの馬鹿。すぐ離れるバカラ!!」

杭奈は自分の支配する間合いに入り、バカラの胸に肘打ち。杭奈は肘打ちが当たるや否や、肘を僅かに引いて棘の裏拳を顔面に見舞う。

鋼鉄の杭が相手の額に突き刺さり、バカラの額が割れて血液が漏れだす。

近すぎてまともに掴むことすらできない杭奈の間合い。無理して

体のどこかを掴めば確実に手痛い反撃を食らうであろうから、バカラは距離をとるっきゃない。

だが、距離を離されることを防止するために、杭奈は房を浮かせ、波導からバカラの意思を感知し始め、間合いを取るステップの効果を失わせる。

杭奈のこれは、懷に潜り込めさえすれば、きちんとした対策を立てなければ無敵の戦法だ。

しかしバカラも馬鹿ではなく、きちんとその技術に対する対策はとっている。そう、祭りの日にスバルが聞きだしたあれである。

「あ、アレは……」

ジョンがそうしたように寝転ぶのもある意味では有効だが、寝転んだままで敵の攻撃に対処するのは、ジョンの特攻があつて初めて可能な方法である。

寝転んだままボールを投げても遠くに投げられないのと同じ。ストーンエッジを寝転んだまま放つても大した威力にはならないため、物理型のポケモンはジョンの真似は難しい。

バカラはジョンのような両刀のポケモンでもないの、同じ戦法が使えるわけもなく、改良型として後ろに転がる事を選んだのだ。

後方回転受け身で回避されれば、攻撃するには低すぎる。でんぐりがえし

薙刀か槍のように長いなら別だが、杭奈のボーンラッシュでは体重を乗せた有効な打撃を与えるのは難しい。

「あの後ろに転がる奴……俺が祭りの時に教えた技だな……きちん
と練習してたのか」

「感謝してるぞオリザ。お前のおかげでバカラにインファイト対策
が追加された……だが、そんな事より……お二人さんが動かなくな
ってしまつたな。退屈だ」

バカラと杭奈は膠着状態となっていた、お互いの能力が非常に強
く、迂闊に攻め込めば手痛い反撃を喰らいかねない。慎重になるの
も、仕方がない。

「おい、バカラ。魅せる試合など必要ない。さつさとお前の得意技で決めるがいい……」

スバルは、そう指示を出す。バカラは、小さく頷くと杭奈に走り寄る。

「あ……」

格闘タイプのエキスパートであるオリザが、これで杭奈がやられると踏んでしまうほど完璧な重心の運びであった。

ズルズキンはその大きな尻尾のおかげで下半身に重心が安定し、なおかつ出身地は下が砂地であるため摩擦によって腕や膝の皮膚が削れることを恐れる必要のない地形。

テイクダウンと呼ばれる、相手を転ばせる技に、これほど恵まれた条件を持つポケモンはズルズキンだけだ。

バカラの体が深く沈み、杭奈視点で見れば目の前から消えたと思うほど見事に低空から間合いに侵入。

最初から低く構えている状態よりかは幾分か高くなってしまったが、フェイント気味のこのテイクダウンに対応するのは難しい。

しかし杭奈は、その完璧なテイクダウンを上から難なく潰した。

「な……返した、だと!？」

スバルが目を見開いて驚く。見れば、静流が腕を振り上げ喜んでいる。

実際、バカラのテイクダウンは完璧であった。低く、速く、直前の目線や重心の運びはともテイクダウンを狙っているとは気づけないような振る舞いだ。

しかし、それは杭奈によってなんなくそれを潰される。

そのままバカラは伏せた状態で、背中から互い違いの状態で腹を抱きかかえられるという、いわゆるがぶりの体勢に入った。

「なるほど、静流も（、、、、）ズルズキンだったな。得意技は……共通というわけだ。ふうん、テイクダウンが読まれるわけだ」

有利な態勢を取った杭奈は、相手の腰辺りを両手で抱いて、小さ

く跳躍してから自分とバカラの全体重を込めて脳天を地面に叩きつける。

もし、戦う場所が洞窟エリアか森林エリアであれば、その辺の樹や岩壁にぶつけられて勝負はついていたかもしれない。

「ありや……パイルドライバーじゃないか。誰だ、静流のシャイニングウイザードといい、こいつらにプロレス技なんて教えた奴は」
「プロレス技はローブシンのウルキオラちゃんですねぇ……」

「だ、誰ですかそれ……」

杭奈の放ったパイルドライバーはプロレス技。プロレスリングよりも遥かに地面が柔らかい砂地では効果の薄い技だ。

人間のプロレスならこのまま腕を離してのしかかってフォールなどをするが、この勝負プロレスではない。

杭奈はバカラを離すことなく、背面から絡めた手足に渾身の力を込めてホールド。

うつ伏せのまま抱き付いて胸の棘でダメージを与え、尻尾に噛み付きつつ、右手で脇腹にボディーブローを打ちこみ続けた。

子供の喧嘩のように見苦しいほど執拗な攻撃は、ポケモンバトルにショーマンシップなど必要ないと言っているかのようだ。

痛みで呻くバカラは、強引に体をひっくり返す。横向きとなった状態から杭奈の腕に龍の力を持った鋭い爪を突きたててそのホールドから抜け出し、構えを取って体勢を整える。

そこまでの攻防で杭奈は腕に負ったひつかき傷のみ。しかし、バカラはボディーブローによる左わき腹ダメージに加え、パイルドライバーで頭を揺らされたダメージ。

肘打ちのせいで胸もジンジンと痛み、裏拳で負った額の傷からは出血して砂がこびりついている。

「済まないバカラ。今のテイクダウンは私の指示のミスだ。まさかあんな完璧なタックルをかわされるとは思わなんだ……」

静流との戦いで、あの技に対する耐性と予見が出来ていたことを失念していたのは、完全に私の責任だ……あとで私も髪を切って反

省せねばな」

「杭奈……こんなに強かったのか……四天王のポケモン相手に一方的じゃないか」

主人であるオリザが驚くほど、杭奈は強かった。砂掛け掌底のように勝つための戦略も持っていて、何をしてくるか読めない。

少々格闘タイプのジムリーダーには不釣り合いなほど奇抜で卑怯なラフファイトなのが気になるが、そこは御愛嬌といったところか。

「こいつ……味な真似を……」

裏拳を食らったり地面にぶつけられて、出血しくくらする頭。ローキックを仕掛けて痛む足の甲。胸の棘が刺さってずきずきと痛む背中。

前半から杭奈に一方的にやられ続けているバカラは毒づいた。

「いつけー！！杭奈。ケツの穴から波導弾ぶち込んで奥歯ガタガタ言わせたれー！！そのチンカス野郎を蹴散らしちまえー」

「杭奈兄さん、必殺一撃エイエイオー？」

「頑張つてね杭奈！！息子と一緒に応援してるわよー」

杭奈サイドの応援は過激で、おまけにバカラにとって昔の女である静流の応援は杭奈の方に行ってしまうている。自信過剰なバカラのプライドもズタズタだ。

対して、バカラへの応援と言えば、スバルのポケモンはあまり彼を良く思っていないようで。

「どうしたよ？」

「情けない面」

「しているじゃないか」

声掛けと言える物はトリニティがわざわざ三つの首を左から順番に、バカラを嘲る声くらいだ。

他の者と言えば、うな井とサイファアが肌が乾燥するから、日

差しがきついからとそれぞれの理由でボールの中に戻っている。

ケセランは砂遊びをしており。

「白熱バトルでメシウマ状態!!」

ふじこは言わずもがなの状態だ。真面目に黙って見ているのはユウキくらいか。

「五月蠅い、黙って見てろ」

バカラがトリニティへ苛立たしげな返答をした隙に、杭奈は防御のために上げられているバカラの腕を狙って神速のバレットパンチで棘を見舞う。

顔を狙えば腕で弾いて防御できる。だが、今の杭奈のように始めから腕を狙えば喰らう側としては防御は難しかった。

しかも杭奈はただ腕を突き出すだけでなく、指の握りを解いて手首の腱に余計な力が入らないよう。そして、スナツプを利かせた棘の裏拳で的確に相手の腕を狙う。

これを繰り返すのが普通のポケモンならばともかく、棘の生えたルカリオの裏拳だ。

もはやノクタスのニードルアームやエビワラーのマッハパンチのようなもの、たった2発だが破壊力は申し分ない。

「この野郎……」

激昂して、バカラは酸を口を含む。しかし酸を出す腺をアクティブにするための口をもごもごする動きは、初見殺しでこそあるものの静流のおかげでそこそこ見慣れている。

酸が来るな、と杭奈は確信した。防御していたらジリ貧となりかねないバカラは杭奈の腕の動きに合わせて拳を放つ。

しかし、杭奈の拳の握りはすでにパンチを突き出す途中で変わっていた。今度は腕を狙っていない、オーソドックスなパンチである。身長差と腕の長さが杭奈に有利な条件下で繰り出される眉間狙いの左ジャブ。ジャブが当たる直前に吐き出された酸は、杭奈の顔面へと真っ直ぐ向かって行った。

杭奈は引いた左腕で急所を守りつつ身を屈め、バカラの腕と酸の液体をかくぐって、下腹部を狙いすました下段突き。

まともに食らったバカラは目玉を吐き出すように眼を見開いて、差し出されたかの如く前へ出た顎に杭奈は掌底アッパー。

後ろへ下がりがりながらたたらを踏んだバカラに対し、杭奈は両手を叩き合わせる要領で鼓膜破りのビンタを見舞う。

ラルトス時代からの袴のお家芸である*17それを奪いとるかのような、鋭い一撃であった。

鼓膜の奥にある三半規管を震わせ、そのまま距離を詰めて接近戦に持ち込もうと思ったが、バカラから無造作な前蹴りが飛んできて杭奈は牽制された。

牽制の蹴りでコンボは中断されてしまったが、バックステップで互いに間合いを取ったそのタイミングに杭奈は唾液で左腕に付いた酸を洗い落とす。

プードル刈りにされる前だと言うのに、少々腕の体毛が溶け落ちてしまった。

とは言え、もはやペースは完全に杭奈のもの。脳と三半規管を存分に叩きのめされ、バカラはふらふらとおぼつかない足取り。

虚ろな目で口の中の血を吐きだす地面にバカラを見て、杭奈は自分の勝利を確信した。

「勝てる……もうペースは僕の物だ!!」

「そうかい、そうかよ……舐めてかかって、悪かったな!!」

バカラは苛立たしげに声を荒げる。プライドをズタズタにされた憤怒の表情のバカラは殺意の籠る視線で杭奈を睨みつけた。

「杭奈……なんて見事な戦い方……」

「ああ、見事だ。ナイフや鉄扇のような短い武器を持って対峙した

時は相手の手首を狙えとはよく言うが……杭奈め、手の甲の棘でそれをやるか」

「そんなの、どこで学んだ技術なんでしょうね」

「フタチマルには稀にそういう戦い方をするやつがいる。誰に教わるでもなく独学でね……そういう奴ほど考えて攻撃するから実際に強い。」

杭奈君も誰かから教わるだけでなく自分で考えて攻撃している。だから強い……そういう事だろうな」

人間達が感心している間に、バカラはフード状の抜け殻と尻尾の抜け殻を破る。

その直前に杭奈と話をしていたが、その内容を見るより先にいち早くスバルはバカラの思惑を理解する。

「な、バカラ……お前杭奈を殺す気じゃなからうな？」

その動きが、何を意味するのか、杭奈には分からなかったが、スバルのうろたえようは半端ではなかった。

あの静流まで、バカラ相手に威嚇しており、何かとんでもない技を放とうとしている事は確かなようで。

杭奈が早々とどめを刺してしまおうと走り寄ると、静流が仁王立ちして静止する。あんまりな展開に戸惑う杭奈を静流は手で制し、バカラにいちやもんをつけ始める。

「あれは、何をしようとしてるんだ？ まさか、バカラの奴禁止技使おうとしているんじゃないだろうな？」

「いや、オリザさん……間違いなくアレは禁止技だよ。静流のあの慌て具合を見ればわかるだろう？ 彼女はバカラとは同族だからね……本能的に危険さが分かっているようだよ……うん」

やれやれとスバルは首を振る。

「とにかく、得意なエリアで格下の杭奈に圧倒されたのが気に食わないのだろう……本来は禁じ手なんだがな。」

野性のズルズキンはある状態になったら確実に相手の頭部を狙う

が……万が一頭部を狙ったら私は責任をもってバカラを始末する」

スバルとオリザが会話をしているうちに、バカラと静流も会話を終えた。どうやら話はついたようで、静流が引き揚げる。

「……おい、バカラ。頭は狙わないんだな？」

もちろんだとしても言うように、バカラは頷いた。

「『あんさんのお氣に入りには敗北させて9m（＾Д＾）プギヤーするだけだ』か……いいだろう、なら許可する。

たまには杭奈にも世の中の理不尽さを教えてやっても良いだろう」

「おいおい、いいのかスバルさん？ 自分で禁じ手って言った技だぞ？」

「なに、頭さえ狙わなければどうという事はない」

スバルは先程までの剣幕とは一転して、楽しそうに杭奈とバカラの戦いを見守り始めた。

バカラは右手に持ったフードの抜け殻に、額から流れ落ちる砂交じりの血を入れ、重量を増させて空気抵抗で減速されないようにして投げる。

杭奈はそれを叩き落とすと、その一瞬に出来た隙に蹴りが飛んできるかと思い、一旦バックステップで距離を取る。しかし、バカラの蹴りは飛んでこなかった。

当のバカラは尻もちをつくような無様なバックステップをしながら尻尾の抜け殻に砂を詰めていた。どうやら転んだわけではないらしく、砂を詰める事が目的のようだ。

「殺すなよ？」

スバルがバカラへ念を押す。バカラは頷きながら砂を詰めた抜け殻を持って杭奈に向かって走り出した。

スバル、静流、バカラから発せられる異様な雰囲気にも恐れをなした杭奈は、早めに終わらせてしまおうと攻めに入る。

にやり、とバカラが笑って砂が入った尻尾の抜け殻を振り抜いた。

バカラは砂袋となった尻尾の抜け殻を杭奈の左太もみに激しく打ち付けた。杭奈はその一瞬の間に転ぶと判断して、死なば諸共とばかりにテイクダウンを狙う。

「やりやがったな……見事だよ、ブラックジャック」

バカラ、とは最も人気のあるトランプを用いたカードゲームの名前の一つである。

彼に付いた名前は如何にもなギャンブラーであるギーマらしい名前の付け方で、バカラの後任であるの雌ズルズキンもポーカーという名前だ。

しかし、トランプにはもう一つ人気のカードゲームがある。

それは、ブラックジャック。ポピュラーなカードゲームの名前でもあるが、革袋や布袋の中に、砂利やコイン等を詰めた拷問器具や暗殺用の武器の名前でもある。

四天王のギーマが、ズルズキンの2匹にあんな名前を付けた理由は、この技の存在を意識したからであった。

即ち、抜け殻を使って作った即席のブラックジャックを見舞う攻撃だ。砂漠で生まれたズルズキンの切り札にして、最強の一発技である。

その威力のほどは、ズルズキンの住む砂漠で吹きすさぶ砂嵐から肌守ってくれるしなやかでよく伸びる抜け殻を一発で破けて使い物にならなくしてしまうほど。

この攻撃はスバルや静流が心配したとおり、頭に当たれば死にかなない危険な武器だ。公式ポケモンリーグで使えば即座に反則負けである。

「あんな技……俺が静流を捕まえた時にだって使ってこなかったってのに……」

ズルズキンと苦楽を共にしてきた初めて見た技にオリザは舌を巻

く。

「当り前だ。如何にアレが子供を守る時のみに使う技とて、子供を守る時に絶対使う技ではない。

砂漠で砂嵐から身を守るための抜け殻を失う覚悟を以って子供を守るというのは並大抵の覚悟じゃない。

イワパレスなんかは殻を破ってもまた拾って付ければいいが、破れた抜け殻は使い物にならんからな。

そもそも、あの技を使ったおかげで次の戦いに敗れて子供が喰い殺されては本末転倒だろう？

だからまあ、アレは死ぬ気で放つ技……大爆発や命懸けって技に近い。だが、頭を狙った時は……喰らった相手が死ぬからポケモン教会でも使用を禁止してる技さ。

「たたく、これじゃホームページに動画をアップさせられないかな……」

どうでもいい事を呟きながら、スバルは前へ向き直る。

戦況の方と言えば、足を打たれてしまった杭奈は前のめりに転びながら相手を後ろへ転ばして寝技に持ち込む。だが、バカラを転ばせることはできたものの、そこからの追撃が全く上手くいかない。杭奈の脚は重く鈍い痛みに苛まれて、左脚は全く動いてくれず、転ばせたら抱きしめて胸の棘で苦しめてやろうかという杭奈の後ろみも不発に終わった。

杭奈はバカラの左足を抱いていたら右足で顔を蹴られ、脳が揺さぶられたその一瞬の隙にバカラは抜け殻をずらされながらも左足を引きぬいた。

更にバカラは尻もちをついたままその左足で再び杭奈の頭を蹴る。今度の蹴りは杭奈もなんとか防御出来たが、バカラは立ち上がったしまった。

足をやられた今、立ったところで杭奈に立ち技での勝ち目はほとんどない。ジョンが教えてくれた戦法に最後の望みをかけるのだ。

逆転勝ちを見据える段階までたどり着いたバカラは、尻尾の部分を切り取ってしまったためにずれやすくなっている抜け殻を悠々と引きあげる。

もう勝ちは見えたその状況でそこをスバルは命令する。

「周囲を走り回って掻きまわしながらストーンエッジで畳みかける。杭奈に負けの味を教えてやれ」

この状態で使える技は、波導弾、草結び、後は袴から教えてもらったサイコネシスくらいだが、相手は悪タイプだから攻撃には使えない。

流石に肩が外れる波導の嵐は使えない。後はブレイズキックで相手の脚を狙うくらいか。相手はストーンエッジを使える。

いくら効果が今一つとはいえ、今の状態で勝てるのかどうかは微妙なところだ。

撃つ、撃たれる、撃つ、撃たれる。バカラは波導弾を的確に避けつつ、杭奈にダメージを与える。もはや戦いは鬨り殺しの様相を呈しているほど一方的に杭奈がやられている。

バカラはさらに杭奈の足に更なる追撃を与え、両足共に杭奈は封じられてしまう。もはや、杭奈は起きあがることすらできないみじめな状態となってしまった。

しかし、波導弾が出せる限り杭奈が諦めるつもりはない。あくまで、彼は逆転劇を信じる。

「さあ、そろそろとどめをさせ。だが、降参したら素直にそれを認めてやれ」

スバルがそう命令した。バカラは杭奈の側面に回る。杭奈は動かない脚を抱えていては方向転換するのも難しく、簡単に左を取られる。

そうして、杭奈はバカラに体の左側を位置取られてしまい、最後のトドメとばかりにバカラは杭奈の腹に向かってキックを放つ。

杭奈の棘がバカラの脛に見舞われた。脛にダメージを負って、し

かしバカラは痛みを無視して蹴り飛ばし、衝撃が杭奈の脇腹に届いた。

激痛で悶絶しかける杭奈だが、彼はまだ諦めずにバカラの軸足を掴む。

今ので脛にダメージを負った上に、度重なる頭部への攻撃で足に来ていた。そのうえ、地面は砂だ。足を取られてバカラは転び、抜け殻を大きくずらされた。

中途半端にずれたズルズキンの抜け殻は、ズボンなど腰へ付ける衣服を膝辺りまで脱げば分かるように足枷となって動きを制限する。杭奈は、這いながら抜け殻を左肘で押さえてバカラの足を地面に縫いつける。攻撃のために構えられた杭奈の片手は、両手で放てないため威力は劣るが、タイプ一致弱点の波導弾。

もがいて抜け殻を脱ぎ捨てたバカラは、杭奈の顎を足で蹴り飛ばす。同時に暴発した波導弾が、地面に手をつけていて無防備だった頭部へ必殺の一撃。

砂塵が巻き起こり、それで決着はついたかに思われたが、二人の手はまだかすかに動いていた。

とどめを刺そうと、獲物を見つけようと這うような動きで砂の肌を撫でていた二人の手。しかし、数秒経つとどちらの手も砂のベツドに突っ伏して、動かなくなった。

「相打ち……だと？」

それから先、二人は二人は系の切れた操り人形のようにピクリとも動かなかった。杭奈、バカラ共に脳震盪で昏倒したのである。

「杭奈!!! 大丈夫か!!!」

スバルは駆け寄ろうとするオリザの肩を掴んで静止した。

「ダメにさせるつもりはないから、あまり動かすなよ、オリザ!!!」
そうして、普段は管理棟の医務室に勤務しているタブンネを2匹モンスターボールから繰り出す。

「治すことなら専門家に任せておけ…… 大丈夫。この育て屋は死者

を一度も出した事が無いのが自慢だ」

と言つて、スバルは溜め息をついた。

「しかし、相討ちとはな……杭奈め、ズルズキンの隠し玉と得意技を公開させておいてなお、その実力か……恐ろしい奴め。」

こんな勝負、実質杭奈の勝利と言わざるを得んな……まあ、試合は引き分けたが」

「じゃ、じゃあ……」

オリザが恐る恐る尋ねると、スバルは頷いた。

「ああ、がんばりボンは杭奈に与える……そういう約束だったからな。全く、バカラの奴め。格下相手に有利な環境だと思つて油断しているからこうなるんだ。」

指示ミスは悪かったと思うが……奢る心が無ければ最初の砂を握った掌底のコンボも避けられたはず。

だからお前は、女に役目を奪われて四天王から除外されるんだよ………
「………つたく、お前も抜け殻を没収して羞恥プレイしてやろうかな？
ああ、だが手痛い指示ミスをしてしまった私も反省の意を込めて頭を刈らなくてはな………」

一通り罵倒し終えて、スバルはコホンツと咳払い。

「それにしても私、試合中ずっと地が出ておりましたね………お恥ずかしい………」

開業前、午前7時半の整体院の2階。1階は完全に整体院に場所を占拠されており、2階は食卓などの住居スペースがあるこのゴキョウ整体院。

付けっぱなしのテレビはポケモンには無縁の外交から穀物の輸入問題、株価や政治家の演説といったポケモンには無縁の退屈なニュース番組。

それが終わり、街角の色々な話題を特集する番組へシフトする。

学生の夏休みも終わりに近づいている時期に、味付けを控えめに調理された朝食を口にしながら、ジヨンは眠い眼を擦っていた。いつもと変わらない朝のはずであったが、今日はその眠気が一気に吹き飛ぶような眼を引く話題が特集された。

いわゆる、ジムリーダー特集という奴だ。

『はい、サクライさん。ただいま私はホワイトフォレストに新たに建設されたホワイトジムの前に来ていまーす！！ いや、空気が美味しいですねー』

『こんにちは、イロリさん。いやー良い景色ですねー』

『そうなんですよ。見てくださいこの大木。なんと約60mあるんですよー。ポケモンもジムリーダーもロープを釣るして登ることで体を鍛えているんですって。』

しかも、ジムのバッジ検定バトル自体は地上でやりますが、挑戦者は命綱が支給されるとはいえ、一度は縄梯子を上って行かなきゃならないそうなので大変ですねえ！！

車いすなど、障害のあるトレーナーは流石にその仕掛けの突破も免除されるそうなんですけれど、これがまたやる気ブレイカーなんですよ。

みなさん、この高さを登る気になれますかー？ 私には無理です」

テンシヨンの高い女性リポーターがジムの施設を次々解説している。これ自体はあまり興味はなかったが、杭奈はどうしているのだろうとふと気になった。

その理由というのも、育て屋を卒業した日に撮ったジムのポケモンの集合写真を手紙に同封してきたのだが、静流や袴が映っているのに杭奈だけは映っていないのだ。

何か悪い事が起こったのかとも思えばそういうわけでもないらしく、主人に読んでもらった手紙には写真に写りたくないと書かれていたそうだ。

ショートカットにイメチェンしたスバルや、バカラを除いた教官たちも勢ぞろいというせつかくの記念撮影なのに、写らないなんて一体何があったのやら。

酷い怪我でもして包帯グルグル巻きの顔を見せるのが恥ずかしいとかだったら気の毒だな、とジョンは心配していた。

『さて、このジムのポケモンの紹介も良いよ大詰めに入ってまいりました残す所は切り札とこのジムの一番人気。』

切り札は、ジムリーダーの最強戦力の一人にも数えられ、他の地方の物を含めてバッジ8個以上を持った挑戦者の相手をしてくれるエンブオーの閻魔君。

一番人気は同じくバッジ8個以上の挑戦者を相手にしてくれるルカリオの杭奈君なのですが……これがまた、人気の理由が面白いのですよね』

お目当てのポケモンの話題がようやく出て、ジョンは身を乗り出して画面を凝視する。

『その人気の秘訣については……CMの後で』

しかし、ここで何とも腹立たしいタイミングでCMが入り、ジョンは食い入るように見入っていた自分が馬鹿らしくなる。

ジョンは食事を再開してCMが開けるのを待ち、クマシユマーケの風邪薬や、車や携帯電話の退屈なCMを経て待ちに待ったCM開け。

画面の中心に移った女性リポーターからカメラをスライドし、映った杭奈を見てジョンの第一声。

「何て格好してるんだあいつ……」

すでにして近所に住んでいる高校生の有志が作った人気急上昇の杭奈ぬいぐるみと共に画面上に現れたブードル刈りのルカリオの胸には、純金のリボンが誇らしげに輝いていた。

「でもちよつと可愛いかも」

写真に写りたくない理由を理解して、ジヨンは安堵の溜め息一つ。
杭奈の元気な姿に微笑んだ。

第7話（後書き）

- * 1 3 非リア獣とは、リアルが充実していない獣の事である
- * 1 4 しかしこの人ガチパである
- * 1 5 スマブラX仕様
- * 1 6 相手のローキックをガードすること
- * 1 7 ポケモンカードではラルトスと名のつく殆どのカードでピンタや平手打ちを使用出来る

後書き

ルカリオの育て屋奮闘記を最後までお読みいただきありがとうございました。

このあとがきには、見ても楽しめないかもしれませんが、個人的な思い入れや製作にかかわる話などを載せておきます。

興味のある方は覗いてくださいませ。

・この話を書いたきっかけ

元は、別の作品でまともなポケモンバトルを殆ど書けなかったがために、とある場所のチャットルームで漏らした『バトルもの書きたい』という愚痴に『短編でも書いてみたらどうでしょう』という言葉葉をかけられ、それを切っ掛けに書き始めた作品でした。

まあ、最初は言われたとおり短編を書くつもりで17節で終わりにするつもりだったのですが……が、どうしてこうなった。

実は17節で終わる予定だったのですが（この時点で短編じゃない）負けっぱなしの杭奈君をなんとか勝たせてあげたくなって続けた。

そのまま続けるには静流とジョンが卒業しちゃって少々キャラが厳しかった&寂しかったので、本来無個性のはずだった育て屋のオーナーが度々人格が豹変する女性、スバルとして物語に加わることになってしまいました。

・戦闘シーンについて

戦闘シーンはリアリティを意識して実際の格闘技を参考に色々盛り込んだので、ポケモンらしくないと感じる方もいたでしょう。それ

ゆえ不安でしたがなかなか好評なようで内心ホッしました。

格闘技を実際にやっている人には、波導弾や火炎放射はともかく殴り合う描写に違和感バリバリだったかもしれませんが、どうかご容赦くださいませ。

さて、参考にした格闘技ですが以下のようになっています。

ルカリオ：八極拳

インファイトが得意で、スマブラXでの動きが中華っぽかったため。あの棘はインファイトに使いやすいと思いました。

ズルズキン：喧嘩・レスリング

喧嘩はその物ですが、砂場でこそレスリングというスポーツは輝くため。また尻尾がレスリングに向いていると感じたため。

コジョンド：ジークンドー

種族名からそうではないかとさんざん言われているため。テコンドーという説もありますが、中華な雰囲気似合う為ジークンドーに。

エルレイドの袴の戦いは結局書きませんでした。書いていたら八極拳と螳螂拳になっていたかと思います。

さて、ルカリオを主人公に据えたのは頑張り屋が似合うという理由と、格闘タイプの中では身長に近いポケモンが多かったため。

ライバル兼『雌』にズルズキンを選んだのは、格闘タイプに弱い格闘タイプであるため。最初は身長と卵グループからゴウカザルとどちらにするかで悩みました。

コジョンドを教え役に選んだのは波導弾をタイプ一致で使えるルカリオ以外で唯一のポケモンであるため。

キャラを立たせるのには苦労しましたが、一番キャラが立っていたのが人間のスバルのような気がしてならない私には、主人公の杭奈

が無難であった事が良かったのかどうか悩ましく感じます。

最後に

さて、グダグダな後書きと誤字脱字の多い本編に付き合っていたいただきありがとうございました。

最後に、誰得ですがキャラの名前の由来を乗せておきます。

杭奈くいな（ルカリオ）：名前の由来は棘が杭のようだから

静流しずる（ズルズキン）：『ズル』を付けてなおかつ女の子っぽい名前にしたかったから。

バカラ（ズルズキン）：カジノで人気のカードゲームの名前から

ジョン（コジョンド）：種族名から

袴（キルリア エルレイド）：ラルトスやエルレイドの脚が袴っぽいから

ペテン（ゾロア ソロアーク）：騙すというイメージから、詐欺師ふじこ（ポリゴンZ）：くあwse d r f t g y ふじこ1pから。

ケセラン（エルフーン）：綿毛のような妖精ケセランパセランからトリニティトリニティ（サザンドラ）：三位一体から

うな井シビルドン：そのもの

ユウキ（アイアント）：某地球防衛ゲームの守護神とされる隊員、結城隊員から。

サイファー&タリズマン（シャンドラ）：エースコンバット6の主人公2人から

モヌラ&ゴツラ（ウルガモス&オノノクス）：そのもの
ウルキオラ（ローブシン）：建築家兼デザイナーのパトリシア＝ウ

ルキオラから

オリザ（杭奈達の主人）：イネの学名、オリザ・サティバから

ではまた、次の物語で会いましょう。

おまけ

準々決勝、第3試合。 静流VSトリニティ*18。

「お互い、当たりたくない者同士当たってしまいましたね……オリザさん」

「いえいえ、強い者と戦ってこそ成長するものですよ。今宵は、互いの成長になれるよう尋常に勝負いたしましょう」

順当に勝ちぬいた、スバル所有のサザンドラことトリニティと、オリザ所有のズルズキンこと静流。二人は殆ど無傷の状態で相まみえることとなる。

共にジムリーダーの本気の手合いに耐えうる実力の持ち主であり、優勝候補として申し分がない。ちなみに、どちらも若干性格は悪い。ただし、どちらも戦いには至極真面目。圧倒的な破壊力で突き進むトリニティと、堅実に耐え隙を伺って必殺の一撃を叩きこむ静流。戦法は違えど、共に貫録を見せつけるその強さゆえに、この試合だけは見逃すべきではないと会場の盛り上がりはジョンと杭奈のそれを越えていた。

人間たちの思惑はさておき、闘う当事者の2人はと言うと、罵りあっていた。

「ふふ、ご主人の期待に応えたいし……それにジョン君と勝ってデートする約束もしちゃったのよねー」

だから、大人しく負けてくれると嬉しいんだけど……」

「いやあ、優勝賞品はブラックシティのお酒でねえ。とっても美味しいお酒だから大人しく負けてくれると嬉しいんだけど……」

「ふうん、なるほど。御酒ばかり飲んでいるから、そんなお饅頭

のようにデブデブなのね」

「おいおいおい、でかいのは腹じゃねえさ。ビッチ*19にも満足できるポリリუმのソーセージも酒があるからこそ用意できる*20つてもんでねえ」

「あら、貴方のソーセージは臭いチーズがたくさんこびりついていて香りが台無しなんじゃない？」

「ほほう、この戦いが終わったら、チーズが大好きになるようにたくさん食わせてやろうか？」

闘いが始まる前から互いに挑発してみるが、どちらも一歩も引く様子もない。これはこれで仲がよさそうな二人である。

「あらあら、そんな事になる前にその粗末なウインナーソーセージを噛み千切ってあげるわよ。いい血の味がしそうじゃない？」

「はん、ウインナーだなんてとんでもない。ボンレスハムと言っても信じるだろうさ」

ところで、この二人の話は耳が痛すぎる。誰か止めると言いたいところだが、ふじこを通じて唯一会話の内容が分かっているスバルは止めない。

ふじこがスマートフォンに出力した画面を見て、あまりに口汚い二人の罵りあい嫌な顔をするどころかむしろ微笑んでいて、至極ご満悦の様子である。

「あらら、貴方の御主人は貴方の股間のモノの大きさを知っているようね。水鉄砲にすらなりやしないって笑っているわ」

「黙れ、俺のハイドロカノンで卵を孕ませて目玉焼きにして食ってやろうか？ それとも親子丼にしてやろうか？」

「あら、貴方の種なしこんにやくがそんな卵を作るとか高尚な能力を持っているのかしらね？*21」

「ほーう、種なしこんにやくとな？ 柔軟性が高くてノンカロリーだからダイエットによさそうじゃないか。お前さんに飽きるほど飲ませてやろうか？ 痩せるぞ？」

「あらあら、貴方は自分のお口が届くから毎日そうやって自分の飲

んでいるんでしょう？ 自家発電なんてエコで良いじゃない」

「自分のを飲む趣味は無いねえ。しかし口がよく動くことだ、口を開くよりも股を開けこの雌豚が……おっと、人間様がそろそろ対戦を始めるとよ」

「あら、残念。もう少し貴方と話していたかったのに」

2人は軽く微笑みあいながら戦いの舞台に立つ。顔こそ微笑んでいるものの、腹の底は底なし沼か血の池地獄か、それほどまでに深く淀んでいる。

この2人、仲が良いにも程があった。

「はっはっは……仲のいい事だな、この2人は」

「おや、何を話しているんですか？」

「ああ、えーと……要約すると、静流ちゃんが『ダメ男めが!!』。トリニティが『ダメ女めが!!』と罵りあっているな」

クスクスと笑いながらスバルは答える。

「それ……仲、いいんですか？」

「何、悪タイプとブラックスティでは日常茶飯事だ。……ポケモンに生まれていたら私も悪タイプだったかもな、はは結構結構」

「そうですね……ポケモン世界も色々ありますね」

苦笑しながら肩をすくめて、オリザは審判に目配せをする。

「こちらの準備はOKです」

「私も、いつでも構わんぞ審判」

互いにOKの合図をすると、審判は頷き宣言する。

「両者、構えて」

ともに唸り声を上げて威嚇し合っていた2人も、その声に合わせて会話を止め構えをとる。

さっきまで笑顔だった二人も、構えをとると同時に顔を引き締め、牙を向いた。

「それでは、試合開始！！」

その合図と同時にトレーナー2人は吼えた。

「トリニティ、龍の息吹！！ 3つの首で順番に放って避けた後の隙をつけ！！」

「静流、出来る限りダメージを受けないように気を使え。相手の息切れを狙って一気に攻撃を仕掛けろ」

全く、静流に与えられた命令は無茶な命令であった。3つの首から順番に放たれる殺意の塊。

点ではなく、塊として飛んでくるその息吹は一撃避けるのに体幹をずらすだけでは足りない。大仰な避け方をせざるを得ないのだ。

まず、トリニティは僅かながらに静流の左側に位置する場所を狙って息吹を飛ばす。静流は右に体を傾け、立ち膝の姿勢から右手を着いて伏せる。

狙ったように、今度は静流の僅かに右側を狙う。静流は1発目を避けた際の勢いがついていた。

このままでは切り返しが出来ない判断した静流は、勢いをそのまま保ちつつ、右肘を地面に付く。

肘、トサカ、首、背中と地面につけながら転がりつつも、決して視線は敵から離さない。尻尾で反動をつけて立ちあがって、静流はトリニティへ向き直った。

「3発目を撃ったら離脱しろ。やり方は任せる」

スバルのトリニティへの命令。それとほぼ同時に放たれた静流の右を狙った3発目の息吹をのけぞりながら首の皮一枚でかわす。

「ならば、追撃するんだ静流！！」

オリザに命令された通り、静流は足指で地面を抉るが如く踏み込んでから一気にトリニティに距離を詰める。

如何に最高クラスの特攻を持つサザンドラのトリニティと言っても、3発放った後にもう3発など殺人的な要求には答えられないし、スバルもしない。

トリニティは、一旦地面に降り立ったかと思えば、ジャンプと羽

ばたきを合わせて高速で上空に飛び上がった。

空気を押すより地面を蹴った方が、当然加速はよくなるという事だ。

肩を掴んで飛び膝蹴りを決めてやろうと意気込んでいた静流は、腕も膝も空しく空を切って地面に落ちる。

「良いぞ、だが高所に居続けるのはよくない。低空飛行から波乗りを持ち込め」

スバルがトリニティに命令する。格闘タイプは飛行タイプ対策に岩タイプの技を持っている事が多い。

ストーンエッジならばまだしも、撃ち落とすことに特化して翼を狙う攻撃を高所で受ければ、受け身を行う能の無いトリニティは形勢を逆転されかねない。

要はそれを警戒してスバルは低空飛行の命令を下したのだ。

静流は飛び膝蹴りを外し地面に落ちていたが、鍛え抜いた体捌きを駆使して静流はきちんと受け身を取れる。

また、身を守るために着ていた山吹色の抜け殻のおかげで、落ちている小石に皮膚を切り裂かれることも無かった。

静流が振り返ってみると、トリニティはすでに地面近くまで降りている。

高度を下げたトリニティは、龍の息吹が避けられてしまうならば、スバルに命令されたとおり波乗りで勝負に持ち込んだ。

トリニティの体の内から漏れだした水の力が、実体化して試合場を襲う。

澄んだ水の流れが静流を襲うが、静流は後ろに下がりながらその鉄砲水を受けて波の衝撃を緩和。

流れにのみ込まれても、静流は激流に身を任せて体力を消耗するような野暮な真似はしない。砂漠でワジ*22に飲みこまれた時に生き残る知恵だ。

結果的に、波乗りに対しては殆どノーダメージだが、地面がぬか

るんだ上に抜け殻に水が入ってしまった。

実はこの抜け殻、砂漠では野性のズルズキンが使用済みのそれを水瓶代わりに使う程、保水性・撥水性は高い。

波乗りにもまれて抜け殻が水を飲みこんでしまえば、当然のように重量が増す。

その上、乾燥を防ぐ抜け殻表面の蠟成分ワックスのおかげで地面との滑り具合は濡れた大理石の如く最高だ。

「さあ、見る。トリニティ……足場の条件も、服装の条件も敵のみが劣化した。有利なお前はさっさと料理を始めろ。美味しく作れよ？」

「クソ、相手は足場無視だ……静流、守勢に回ったらやられる。攻めるんだ」

双方のトレーナーは攻めをポケモンに命じた。トリニティが選んだのは気合い玉。静流の弱点を突きつつ、しかも威力の高い必殺技である。

トリニティは地位様の気合い玉2つを同時に、僅かに体の中心線からずらした位置を狙い、放つ。

それぞれ左胸と右太もも辺りを狙った非常にいやらしい位置である。

静流は、ヘッドスライディングのような前のめりの姿勢から、僅かに右ヘスライドしつつきりもみ回転しながらジャンプ。

左胸を狙った気合い玉を風圧だけ浴びてかわし、右太ももを狙った気合い玉は飛び越えて足に風圧を感じてかわす。

前のめりで地面に着地、手を突くと同時に4足歩行のポケモンの如く手を用いて地面を蹴り、加速と共に一気に立ち上がる。

地面を力強く踏みしめた瞬間から敵に届くまで、トリニティに地面に降り立って大ジャンプをする猶予は残されていない。

静流は頭部を守るフード状の抜け殻をかぶり、気合い玉に備える。トリニティが真ん中の首の気合い玉を静流に向けて放た。

これまた頭部を守るためのトサカを向け、静流は真っ向から気合

い玉を受け止めた。

頭蓋に響く轟音。食いしばった顎に伝わった衝撃で歯が欠けてしまいそうなダメージを負いながらも、静流は怯まない。

トリニティの首に向けて諸刃の頭突き。柔軟性が高くよく撓る首だけに、頭突きのダメージは受け流された。

だが、更なる追撃として静流はトリニティの首の股を掴み、腹と胸の境目に渾身の跳び膝蹴りを放つ。

飛び膝蹴りは、体当たりを除けば、エネルギー的には最強の打撃技である。しかもそれが、肩などを掴まれ衝撃の逃げ場が無い状況とあれば、まさしく一撃必殺だ。

トリニティは分厚い筋肉に内臓と肋骨を守られていても、効果抜群のこの一撃は流石に効いたらしい。

グハアツ、と唾の飛沫を飛ばしてトリニティは怯んだ。

だが、哀しいかな。飛び膝蹴りは体ごとぶつかる技ゆえか、連打の利かない技である。

静流が次の一撃を放つよりも、トリニティが怯みから回復する方が早く、トリニティは2つの顔で噛みついて静流を引き剥がした。

静流は脳天に喰らった気合い玉のせいですでに足に来ていたのか、引き剥がされながらふらりとたたらを踏んだ足取りはおぼつかない。トリニティは再度、波乗りを繰り返した。対する静流はおぼつかない足取りながらも、先ほどと同じ対処法で衝撃を緩和する。

だが、平衡感覚を完全に失った静流は、波乗りの終わりに上手く立ち上げられる体制を作れなかった。

呼吸も大いに乱され、肺に入った水が容赦なく静流の体力を奪う。「トドメだ、トリニティ!!」

「静流、危ない!!」

なんて、オリザの大声もスバルの命令の前には空しい。静流は運の悪い事に奔流に揉まれて後ろを向かされていた。

静流が立ち上がろうと手をついたその瞬間に、耳を塞がなければ

とても耐えられないような大声が響き渡る。

ハイパーボイスの轟音を浴びて、静流は反射的に立ち上がるための腕を地面から離し、泥飛沫と共に顔を地面に突っ伏した。

しかも、性質の悪い事にそのハイパーボイス、左右2つの顔だけで行っている。それだけに音量は僅かに小さいのだが、耳を塞がせる効果さえあれば恩の字だ。

トリニティの残った真ん中の口から放たれる技は、当然のように気合い玉。

「さて、降参だ!!」

それが放たれる前に、静流のトレーナーであるオリザは降参を宣言した。

「……つつつ」

上体だけはなんとか起こした静流は、流血している頭を押さえつつ、唇を食い結ぶ。

トサカがボロボロな上に随分痛そうな表情だが、彼女はなんとか意識を保っているようだ。

「大丈夫かよ？」

上体を起こした静流を気遣ってトリニティは3つの首で静流を覗きこむ。

「主人が降参宣言してくれたおかげで、なんとかね……」

「ほら、つかまれよ」

「ありがと」

差し出された右顎に噛まれて静流は立ち上がり、そっけなくお礼を言う。

「てゆーかあんた、胸は大丈夫？ 肋骨折れてない？」

「なんとかね。鍛えているから体は丈夫なもんでさ」

などと言いつつも、トリニティは結局痛みで顔をしかめている。

多分、と言うよりは確実に痣が残るであろう。静流の蹴りにはそれくらいの強さはある。

「すまんね。お前さんのデートの予定はキャンセルだな」

「仕方ないわよ……あんたの方が強かった。それだけで十分じゃない？」

「違うないね」

静流とトリニティは互いに笑いあって主人の元へと帰ってゆく。

強がってはいてもどちらも酷いダメージを負っていたのか、近くまで歩みを進めた2人は泥まみれの体を傾け主人に倒れ込んだ。

おまけ（後書き）

*18 時系列は38節。オリザとスバルの会話の後である

*19 雌犬のこと。淫乱を意味します

*20 お酒を飲むと女性ホルモンが分泌されるので、飲み過ぎはむしろ小さくなります。それどころか乳が張ってしまう事も。

女性も酒を飲みすぎるとホルモンバランスが崩れますので、貧乳だからってがぶ飲みしてはいけない。貧乳はステー（ry

なににせよお酒はほどほどに、楽しく飲みましょう。

*21 一応卵グループドラゴンの雌雄なので卵は出来ます

*22 流水の無い枯れた河。ただし、雨が降ると物凄い濁流が発生するため非常に危険

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0846r/>

ルカリオの育て屋奮闘記A

2011年5月15日20時41分発行